
リアル忍者 北郷

浦波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアル忍者 北郷

【Nコード】

N2097U

【作者名】

浦波

【あらすじ】

様々な世界に転生や憑依、漂流している北郷が今度はNARUTOの世界に転生した。ある意味最も忍者らしく動く北郷は何時も通り自分の幸福を求めて行動する。

1 悪夢の手紙

目が覚めると知らない天井が見えた…。

またか……………。

体が縮んでいる事から今回も転生か憑依だな。

自分の体を見る限り2歳〜3歳ぐらいか？周囲は木造建築の一戸建てらしい。多分この体の家だろう。

少し歩いて鏡を発見したので見てみたら俺だった。

アルバムで見たことのある俺の幼少期の顔だ。

もしかして現実世界に戻れたか？

とやっと戻れたと嬉しくなってきたがそれを打ち砕く物があった。

洗面台の上に「でいあー 北郷君」と書いてある手紙を発見した。

久しぶりに見る手紙だな。出来れば無視したいが仕方ないので読んだ。

でいあー北郷一刀君。

やあ、久しぶりだね。元気？

実はさ、今君がいる世界はNARUTOの世界なんだよねえ。

まあ何でNARUTOの世界にいるのかは僕の適当なだけどさ。

それでいつもみたいに今回もNARUTOの世界で頑張つてよ。大丈夫、君なら出来るさ。

あ、それとその世界ってさ、ジャンプ物なのに簡単に人が死ぬし、

周りはチートみたいな奴等がわんさかいるじゃん？

今までみたいにコピー能力だけだと簡単に死んで面白く無いから特典として前いたハンターハンターの能力も使えるようにしてあげた

よ。

でも全部使えたら面白く無いからちよつと制限。

使えるのは『完全なる隠匿』と『都合の良い祝福』の2つだけね？
ちなみに念能力は使えないよ？だってその世界に念は存在しないからね。

まあ何とかなるさ、君なら出来る！今までのように僕を楽しませてよ。

それじゃ！幸運を祈って。バイバイ〜。

いつものながらムカつく文章だ。

にしてもNARUTOかよ…。

まあ、前みたいに主人公にはならなかったのは良しとするか。

何せ前回はハンターハンターでゴンに憑依したからな。原作通りに進める必要が多少あったから無理して行動するなど非常に面倒だった。

しかし今回の立ち位置は恐らくモブ。

これなら原作に関わる必要はまず無い。

それに気配や姿を完全に消せるっていうか認識させない『完全なる隠匿』や死亡以外なら何でも治せる『都合の良い祝福』があるんだ。大抵は問題無い。

それに今まで通りコピー能力は健在らしいから金や食料に困ることも無い。

残念ながら今の年齢では一人立ちが出来ないからしばらくは大人しくするとして、今は何年なんだ？

原作と同じなのか？それとも後か？先か？

それがわからねえと対処のしようがねえ。

もしも直ぐに九尾暴走や木の葉襲撃があったら不慮の事故や殺される危険性だって高い。
先ずは情報収集だな。

にしても俺の親はどこだ？
まさか一人暮らしな訳無いよな？

注意書きと主人公紹介

この小説はアンチ小説です。

原作キャラを真っ向から否定する文章が多々あります。

この小説の主人公は前作の「狡猾なゴン」から転生した主人公です。

この主人公は最低です。

原作を崩壊させたり、あえて遵守したりなど矛盾した行動があります。

この小説は作者の妄想です。

基本的にご都合主義です。

たまに下ネタがあります。

これらの事が一つでも気に入くわないという方や、原作をとて大事に思っている。

という方は見ない事をお勧めします。

主人公紹介

名前 北郷一刀

恋姫無双の北郷一刀とは全く関係は無く、ただの同姓同名なだけ。性格は利己主義で自分が良ければ基本的にどうでも良い。学歴は中卒で高校受験失敗後はニートになり、遊び呆けていた。

ある日、突然神だか悪魔だが分からないが誰かによってコピー能力を与えられて恋姫の世界に漂流させられ、原作を無視して大陸統一後には更に拡大してアジア全域とアフリカ北部を支配した後に寿命で死亡。そしてまた別の世界に行かせられ、その繰り返しをしている。

能力説明

初期から所有している能力

能力名 『コピー』（特に名称は無い）
直接見た物、触れた物をコピー出来る。
個数や大きさに制限は無い。
この能力を使用しても術者は疲労しない。

制約

生物をコピーする事は出来ない。（術者が生物と認識しないなら可能）
ちなみに忍術は主人公が生き物と認識していないのでコピー可能。
コピーやコピーした技を使えるのは本体のみ。

能力名 『都合の良い祝福』
ありとあらゆる怪我や病気を癒す。
念や忍術で受けたダメージや呪いにも有効。
任意での発動が可能。(使用后1月以内に仮死状態になった場合には自動で発動。)

制約

この能力は一度使用すると消去される。
生きている者ではないと発動しない。
自分以外には使えない。

能力名 『完全なる隠匿』

この能力を発動すると姿や気配、その他何もかもを認識されなくなる。

生物は勿論無生物にも認識されない。

円など念能力を使用しても認識出来ない。

忍術や畏にも認識出来ない。

この状態で攻撃された対象は攻撃された事は認識出来るが攻撃対象を認識出来ない。

制約

この能力は一度解除すると消去される。

姿形が消えるだけで攻撃を受ければダメージはそのまま受ける。

影分身で作った分身でも発動出来るが解除したらその分身はこの能力を使えなくなる。

2 現状把握（前書き）

この小説の北郷はあんまりデカイ事や目立つ事はしません。基本は忍者らしく演技しながら日常生活を過ごします。

2 現状把握

あの後ようやく親を発見した。

どうやら俺は木の葉の忍者の家系に生まれたいらしい。といっても血
継限界ではなく、ただの忍者のな。

父親は上忍で母親は中忍。

両方ともそこそこ実力はあるらしいので俺にもその恩恵は多少備わ
っているだろう。

でも所詮原作には一切出なかったモブだからあまり期待は出来ない。

俺の名前も分かった。何の因果か、北郷カズトという元の名前をこ
の世界風書き換えただけらしい。

北郷って現実世界では普通だけどこの世界じゃおかしくないか？ま
あ別に良いけど…。

にしても自分の名前を使うのは恋姫時代以来だな。何か嬉しい。

後年代も分かった。

まだ九尾の襲撃跡が残ってるし、うちは一族も全滅してないことか
ら原作と同じが限りなく近い年代だ。流石に原作メンバーの歳は聞
けない。会ったこと無いんだからな。

後分かったのは俺の歳は3歳で兄弟はいない。

祖父母や親戚は九尾事件で全員死んだので両親以外の血縁関係は無
い。

そんなに強くは無かったが代々忍者の家系なので多分上忍になれる
だけの資質はあるだろう。といってもモブだけだね。

出来るなら忍者にはならず商人や農民、職人にもなりたかった
けど家系的に無理だな。

多分6歳ぐらいになったら無理矢理にでもアカデミーに入れられるだろうな。面倒だが拒否は難しいだろう。

何せこっちはガキだ。

6歳のガキに決定権など存在しない。

「とりあえずアカデミーに通ってみて、その後決めれば良いさ。」とか丸め込まれて終了だ。

まあでも原作組に関わらず、最初の試験に不合格すればアカデミーに戻るし、そんなに悪くは無いか。

アカデミーなら所詮体育に力を入れてるだけの学校と同じだ。

とりあえず自分の立ち位置は理解出来た。

後は今後を決めなくては…。

とりあえず里を抜けよう。

木の葉落としの時に偽装工作して死んだように見せかければ良い。

最悪『完全なる隠匿』を使えば簡単に抜けれる。下忍にもなつてないアカデミー生が抜けた程度なら別に騒がないだろうし、追い忍も来ないだろう。

だとしたら『現実シエルター』も欲しかったな。あれがあれば例え追い忍が来ても簡単に振り切れるし隠れられる。一番使ってた能力だから無いと面倒だ。

さてと、とりあえず行動方針は決まったから早速行動開始だ。

まだ何も知らないガキの振りをして親の部屋を漁る。

無いと思うがアカデミーの教材みたいな初心者用のテキストを探す。途中で見つけた上級や中級忍術書も触ってコピーする。まだ使

えないが知識として役立つ。

しばらく漁り、やはり無いかと諦めかけていたら奥の方に多少ぐちゃぐちゃになっていたが昔のアカデミーのテキストを発見した。早速触りコピーする。

アカデミーのテキストに載ってる術は変わり身や分身、変化といった基本から縄抜けや金縛りなど役立つ術も載っていた。結構使えるな。チャクラの記述などは微妙だったがな。

まあ代わりに親父の持ってた資料で穴埋め出来るから良しとするか。後は実践あるのみだ。

そう思ってたら後ろから

「あらあらダメじゃないカズト。そこはお父さんの大事な本とかが一杯あるのよ。」

と母親が声をかけてきた。とりあえず先に決めていた通りにガキの振りをする。

「…ごめんなさい。たくさん本があったから見たかったの…。」
上目遣いで涙目で言う。

本心では「空気読めよクソアマ。人が人生の第一歩を踏み出した時に邪魔しやがって。」と思う。

母親は俺の態度を見て反省したと思ったのか

「分かったら良いのよ。ただ次見たい時があったらちゃんとお父さんに言うのよ?」

と軽く注意して終わった。

俺も「はい。」と答えとく。次からは『完全なる隠匿』を使うか。次は母親の部屋を荒らす予定だったしな。

とりあえず今は影分身を覚えなくてはな。

あれがあれば修行効率は何十倍にもなるし、俺の身代わりにも出来る。

ただあれはたかだか3歳のガキが覚えるには無理だろう。誰かのをコピーする必要があるな。

親父を使うか？

3 基礎会得（前書き）

影分身についてはこんな感じで勘弁して下さい。

3 基礎会得

親父はあまり家にはいない。

まあ上忍だしな。任務とかで里外にいる事が多いのだろう。

おかげでたまにしか会えない俺を溺愛している。これは好都合なのでただの好奇心旺盛なガキの振りをして親父にねだる。

「ねえねえお父さん。」

俺が話しかけると

「うん？どうしたんだカズト？」

と笑顔で返してくる。そこまで俺が好きか。

「お父さんから貸して貰った本に分身の術ってあったんだけど、どんなのを見せて？」

とねだる。

あの後親父に謝り、正式にお願いしたら簡単にアカデミーのテキストを貸してくれた。息子に立派な忍になって欲しかったからかな？そんなに息子を少年兵にしたいか？ヒデエ親だな。

「分身の術か？」

カズトは凄いな、分身の術の記述はテキストの後半なのに。もうそこまで読んだのか？」

と聞いてきた。ちょっと早すぎか？でも影分身を覚えるためだからな。いちいちアカデミーまで待つてらんねーし。

「うん！でも分身の術ってイメージしづらいから一回見せて？」

と頼み親父と一緒に庭に出た。今更だがウチって家は普通だけと敷地は広いよな。

やっぱりそこそこ歴史ある家だからか？

「それじゃあ見てるよ？」

…分身の術！」

印を組んで3人に親父は分身した。勿論コピーさせて貰ったけど。

「うわあ！スゴイ！」

分身の親父に近付き、触ろうとするが通り抜ける。

「あれ？」

と俺は首をかしげる。ガキの振りつて大変だよな。

「ああ、分身の術で増えた分身は実体が無いから触れないんだ。」
と親父は解説してくれた。

「じゃあ増えたお父さんには触れないんだね。」

と寂しげな目を親父に向ける。流石に「じゃあ影分身やって。」なんて言えないからな。テキストには載ってないし。

「うう……そんなことは無いぞ！」

と分身を解いた親父は違う印を組んで

「影分身の術！」

と狙い通りの術をしてくれた。マジコイツ単純。

「ほらあ、カズト。今度は触れるぞ。」

と出した影分身と本体で俺の頭を撫でる。2方向からのナデナデって不気味なだけだ。

「スゴイ！これは分身の術と違うんだね！」

不思議そうな眼差しを向ける。それに気分を良くしたのか親父は

「これは影分身の術といって実体まで分身するんだ。凄いだろう？」

と自慢気に言ってくる親父。息子に誇るのには良いが別にお前の術じやねえだろ？

「凄い凄い！お父さんって凄いんだね？」

一応持ち上げとく。親父は俺の思惑など分からないのか素直に喜んでいる。忍の癖に感情表現が分かりやす過ぎないか？それとも仕事の反動のせいか？

まあ良い。この上機嫌を利用して貰おう。

「ねえお父さん、他の術も見せて。」

とねだると「おう、良いとも良いとも。」と軽く了承してくれたの

でテキストに載ってる変化や金縛りなど基本型を全て見せて貰った。

流石に攻撃系の術は見せてくれなかったけどな。

「カズトにはまだ早いよ。そのテキストの術を全部出来るようになったら教えて上げるよ。」

とかわされた。まあそうだろうな。

流石にこの年のガキに火遁とかの術を教えても無意味だし、万が一覚えられて使われたら被害が出る危険性が高い。

とりあえず当初の予定の影分身は覚えられたし、ついでに初級忍術も覚えられたから良しとするか。

ちなみに影分身とかをそのままコピーするとコピーした奴の影分身が出る。

でも術をコピーするとそのメカニズムとかを理解出来るようになるから自分の影分身も出せるようになる。

初めて影分身を出した時はとんでもないチャクラを必要としたが何とか成功させた。まあ、メカニズムさえ解れば後はコピーしたチャクラを注ぎまくれば良いだけだから本体の俺には何らダメージは無いがな。

次はチャクラコントロールを身につけなくては。

影分身を留守番に使って本体の俺は『完全なる隠匿』を使って隠れながらチャクラを体に行き渡らせる修行をする。これが出来ないと身体能力が上がらないからただの3歳児と同じだ。

もし木登りの修行をやったなら失敗して落下する時に首を折って自殺することになっちまう。

先ずはチャクラを体に浸透させて体を鍛えなくては。

影分身と隠匿を併用して何百人単位で修行だ。

疲労がたまつたら祝福で回復する。改めてスゲエチートだと分かる。ある意味無限に修行が可能だからな。チャクラコントロール班と体を鍛える班に分けて修行をやらせる。体を鍛えるとは言うものの、まだ3歳の体だから精々ランニングや腕立てなどトレーニングレベルでしかない。

地道に鍛えるしか無いからな。

ただ術だけ覚えても逃げるためには身体能力が必要だし、体術は重要だ。

幸い、血筋のせいかな体力や頑丈さは常人以上だ。少なくとも6歳レベルはあるだろう。

まあ原作組には負けるがな。

アイツ等ただかだか一月か二月で倍以上強くなるからな。どんだけのインフレだよ。

マジアイツ等人間とは思えねえ。もしかしてアイツ等転生者で神から特典でも貰ってるんじゃないか？

そのほうが納得出来る。

4 厳しい現実

1年が経過し、ようやくチャクラコントロールやアカデミーで習うEランクの忍術を全て自分で使えるようになった。

ここまで長かった。

てっきりアカデミーのランクなら簡単に覚えれるだろうと思っていたがチャクラコントロールに手間取り、1年もの歳月を費やす結果になった。

まあおかげで基礎はしっかり身に付いたから良しとするか。

それに、時間をかけて体を鍛えたから基礎体力も向上した。

今なら100mを14秒で走れそうだ。

一般的に考えるとちよつと早い程度だが、俺はまだ4歳だ。それを考えると驚愕の運動能力だな。

それでは第2段階に入るか。

子供用の忍具をコピーしてこれからは武器の使用訓練と更なるチャクラコントロールを会得する。

にしても子供用の忍具があるとは思わなかった。見つけたのは5歳児用で少し大きいの問題無い。

5歳のガキに刃物を持たせて良いのかよ？コピーしたクナイや手裏剣は普通に鋭く、人間を切り裂くには十分だ。

ある意味この世界はハンターハンターの世界より危ねえな。

とりあえず武器の扱いは教本を読んだり下忍や中忍の訓練風景を観察して覚えるか。まだ実戦には早すぎるしな。

次にチャクラコントロールだが、今まではチャクラの移動や体内浸

透で身体強化を主にしていたが、これからは実戦に入る。
受け身の取り方や体も頑丈になって来たから手を使わない木登りを
開始する。

チャクラコントロールは1年みっちりやったから木登りに自信があ
ったが、現実には厳しかった。

原作でサクラが一発で成功していたが、あれは異常だ。

それどころかサスケやナルトも1週間で見事に会得したのもあり得
ない。

だって俺は木に足を吸い付けるだけで1週間。

更に1週間経ってようやく登れるようになり、頂上に到達するには
合計1ヶ月もかかった。

何この差？原作補正？才能の差？

それともただ単に俺が4歳だから？

……多分全部だろうな。非常にムカつくが。

キルアに修行をつけていた頃を思い出す。まだ会った事も無い原作
組を無性に殺したくなるのは仕方ないだろう？

リーの気持ち分かるわ。まあ、アイツも大概チートだけどな。

ちなみに現在は木登りの発展版である水面歩行の修行をしている。

ナルトみたいに60の熱湯の上でやるみたいなのは命がけだ、普
通の川でやるのも俺にとっては命がけだ。

何せ大抵の川では身長の問題で足が着かない。もし筋肉が痙攣でも
起こしたら溺死してしまう。

だから影分身の補助と見張りを立てて万全の状態でやるという非常
に面倒な手順を踏む。

ちなみに俺が水面歩行をやっている途中でも影分身がトレーニングや

新たな忍術会得などをしている。俺にチャクラ切れの心配なんて必要無いからな。

例え俺のチャクラが切れても万全な状態の影分身をコピーすれば24時間修行が可能だ。

やっぱ俺が一番チートか？

遂に原作組に遭遇。

我らが主人公、うずまきナルトがいた。

まあ、遭遇っていつか見つけたただけだけどね。

ちなみに現在ナルトはハブられています。

ナルトはうずくまっでいて、里の住人達が石を投げてる。

見た目俺と変わらないという事はやはり原作に限りなく近い世界なんだと改めて分かった。

にしても4、5歳のガキに大人が石を投げつけるのはスゲエ光景だな。

こんなことされてナルトが火影になって里の奴等を見返すとはスゲエ考えだな。

俺だったら強くなって里を滅ぼすと誓うだろう。

ていつかここまでされたら里から逃げないとマジでヤバイぞ？

しばらく観察したけど食料を売ってくれないし、ていつか近付くとシャッターを下ろされる始末だ。まるで死神か疫病神扱いだな。

滅多にしない俺まで同情するぜ。

ちなみにウチの両親もナルト排斥派。

親子で歩いていたら偶然ナルトを見つけて

「カスト、あの子に近付いてはダメよ？」

と母親から言われた。

「なんで？」

何も知らない風に聞いたら

「何でもよ。良いわね？絶対になんか話したりしちゃうダメよ？」と理由は言わずに念押しして来た。やっぱり理由は話さないのか。まあ、自分の両親や親戚、親友を粗方九尾に殺されたらしいからな。こうなっても無理は無いか。

「うん、分かった。」

と返事をしとく。別に俺はナルトがどうなるうがどうでも良い。

他のオリ主達はナルト救済に向かうが、俺は興味無い。

少なくともまだ九尾の力が使えないナルトに価値は無い。

だったらカブトでも尾行して怪しい研究やチャクラメスでもコピーする方が何倍も有益になる。

カブトを能力を使って尾行して秘密研究所にも潜入してくまなく調べたが、大したモノは見つからなかった。

精々実験途中の解体された死体やまだ生きてるが腹を開けられてる人間など別にコピーする価値も無いモノばかりだ。

カブトが形質変化させて内部だけを切るチャクラのメスぐらいしか成果は無い。多少は忍術の本や医療関係の本もコピー出来たからよしとするか。

まあ、上級忍術とかの印や使い方が分かっててもチャクラがまだ全然足りないし、コントロールも未熟だから無駄知識にしかならない。

影分身を一度に何百体と使い、そして吸収してるからチャクラの総量はかなり上がってるけどまだ全然足りない。

精々まだ中忍レベルだ。

まだ成長期だからこれから伸びるんだろうが、それをゆっくり待たてられないから無理矢理鍛える。

このまま行けばアカデミー入学時には上忍レベルにまでチャクラ総

量は増えてるかもな。

そうなればコピーしなくても自分で覚えられる可能性もある。

この世界で好き勝手生きるには圧倒的な力は必要不可欠だ。

最終目標は万が一暁や面倒な組織に狙われても軽くあしらえるぐらいの強さだ。

5 ハード

水面歩行や忍具修行を始めて1年。

5歳になった頃、ようやく水面に長時間立てるようになったし、全速力で走れるようになった。

これでチャクラコントロール力は更に上がった筈だ。

一方、忍具関係はまだまだ発展途上。

流石に1年じゃ極められないから修行は継続中だ。

チャクラ総量は影分身修行のおかげかなり上がってる。今では上忍の下位ぐらいにまでなった。まあ、最悪コピーした術を使えば良いだけだからそんなにいらんないが、ありすぎて困るものじゃないからこれからも上げ続ける。

さて、ようやく本格的な忍術の修行といくか。

このチャクラ総量とチャクラコントロールならランクCやランクBの忍術も覚えれるかも知れない。

コピーすれば手っ取り早く楽なんだけど、俺がコピーしたい忍術をわざわざ俺の前で使ってくれる訳無いし、そもそも里の中で被害がデカイ上級忍術は使わない。

だからと言って俺が里の外にいつて勝負を仕掛けたりするのはまだ早すぎる。いくらこの年代では強いと言ってもまだまだ下忍レベル。こんな状態で里から出たら格好のマトになるのがオチ。だから使いたい術は自分で覚えるぐらいしかない。

まあ、それでもコピーを諦めた訳じゃない。

親父の部屋にあったチャクラを流すと反応する紙をコピーしてチャクラを流してみたら紙が燃えた。どうやら俺のチャクラは火属性らしい。

火属性という事は格好の獲物がある。

天下に名高きうちは一族だ。

うちは大虐殺が確かもうすぐ起こるから去年から度々うちは一族の土地に侵入して観察していた。

やはりとんでもない広大な土地を有しているからだろうか、敷地内で被害がデカイ火遁系忍術をバンバン使っていた。

豪火球や豪龍炎など様々な火遁系の術をコピーさせて貰った。

ちなみにイタチも見つけた。

まだ万華鏡写輪眼は無いからか普通に修行してたけど威力とかマジでスゲー。

アイツと戦うとかサスケの根性は信じられん。あんなの見せられたら俺なら復讐など諦めるか余程の確信を持てるまでは仕掛けられない。

ていうか大虐殺の時にみんなと一緒にサスケも殺した方がサスケのためでは？

だってそうすれば後の殺伐として酷い人生を送らずに済んだらうに。可哀想にねえ？

とりあえず火遁系の術はそこその数を覚えられたから他の属性の術も覚えよう。

火遁系ほど強くはならないかも知れないけど色んな属性の術を使えた方が良いに決まってる。

行動方針としてはコピーした教本や術式の本を見ながら地道に修行しながら、里の訓練所や訓練している奴等を見つけてそいつらの技をコピーする。

コピーするにはオリジナルの俺が直接見る必要があるから影分身が

優良株の発見を報告してきたら俺が見てコピーする。
基本はそれでいく。

次はチャクラコントロールだ。

水面歩行が出来たから更なる段階である滝登りだ。

流れる滝に逆らいながらチャクラをコントロールして登るといふかなり難しいが、出来るようになれば更にチャクラコントロール力は上がる。

死ぬ危険性があるから影分身にやらせるけどね。

それと体術の修行だ。

身体能力もそこそこ上がって来たから体術も本格的に鍛える事にする。

しかし相手が精々自分の影分身ぐらいしかいないからどうしても効率が悪いな。

俺に師匠でもいれば手早く済むんだけど俺にそんな都合の良い存在はいない。

リーみたいとは言わないがそれなりの体術を身につけたら里を出て他国の忍を襲うか？

流石に木の葉でそんな事をやればバレル可能性が高いしな。

まあ、影分身でやれば俺が死ぬ事は無いから良いか。変化で化ければ他国ならバレないと思うし。

このようなハードスケジュールをやりながら非常に面倒だが家族団欒も欠かさない。

「これ美味しいねー！」

とかベタなセリフを言いながら家族で鍋をつつくとかマジ疲れる。
親父や母親の「友達は出来たか？」みたいなくだらない質問に答えるのがウザったい。しかし木の葉にいる限りコイツ等は必要だから理想の家族を演じてやっている。
ある意味修行よりこっちの方が疲れる。

6 アカデミー入学

6歳になり、アカデミー入学 possible の歳になった。

両親は勿論アカデミーへの入学を勧める。というよりもう決まっていた。

いつの間にか入学願書は提出されていたらしく、いきなり

「来月からアカデミーが始まるぞ。」

と親父が言っただけだった。子供に何の相談も無しかよ？

確かに6歳の子供に将来に関する重大な決定を下させるのは難しいが、殺し、殺されるのが当たり前前の世界にこやかに送り出す親ってどう？

気分は赤紙を突きつけられた気分だ。赤紙同様、拒否は出来ないからな。

「うわぁー遂にアカデミーに入れるんだね？」

と喜んでく。面倒な軋轢は最小限にしたい。

「カズトはアカデミーに入る前から勉強してたからきっと一番になれるぞ。」

と自信満々に親父が俺に言う。

確かに普通なら一番になれるだろうが今年はバグの年だ。

座学ではトップになる春野サクラや全科目トップのうちはサスケがいるんだからな。

どう頑張ってもサスケと同率1位にしかなれない。別にならないけど。

だってトップになったらサスケと比較されたりして面倒だし。そんなに目立つ必要は無い。

精々トップ10に入るぐらいで良い。

それぐらいならそこそこ優秀だからある程度の誤魔化しも効くし、

バカにはされない。
一番楽なポジションだ。

長ったらしい入学式が終わり、教室に入ると原作組が勢ぞろいしていた。

うずまきナルト、うちはサスケ、奈良シカマル、犬塚キバなどなどチートメンバーが腐る程いる。今はタダのガキだが、6年後には化物に進化してる。

ちなみにナルトは原作どおりイタズラ小僧だ。

担任教師に罫を仕掛けたり、落書き、サボり、器物破損などなどウザったい限りだ。相手にして貰えないなら諦めるか開き直れよ。だからお前は何もかもが中途半端なんだよ。

アカデミー当初は本体である俺が通っていたが、やはりレベルが低すぎる。

アカデミーの授業レベルなら3歳の時に終了したからな。高校生が小学校に入学するのと同じだ。

つまらん。シカマルがよくサボるのも頷ける。暇つぶしにならないからな。

早々に見切りをつけて影分身に授業を行わせる事にした。レベルを大幅に落として常に学年5〜10位を目指せと命じて俺は修行に移った。

俺は更なる忍術や知識を求めて『完全なる隠匿』を使い、火影の屋

敷に潜入した。

見張りや罠などは俺を認識出来ないから堂々と侵入して禁術や禁書保管庫に入った。

にしても原作でナルトは何でこの屋敷に簡単に侵入出来たんだろう？少なくともこの警備はかなり厳重だ。たかだかアカデミー卒業間近の生徒の侵入など許す筈は無い。

火影がわざと入れたのか？

まあ良いか。とりあえず今は禁書や禁術書も何もかもを手当たり次第にコピーだ。

初代火影が封印したという封印の書や医療忍術の書、拷問の書、表には明かせない書など全てをコピーして堂々と帰った。

これで火影が知っている術や情報などは文書化されたものは全て知る事が出来た。

多分まだ暗部とか「根」には術や情報があるだろうから侵入したいが、場所が分からない。

とりあえず今は場所を探ろう。分かったら侵入してコピーだ。それが終わればこの里が知りうる情報全てを俺も知れる。

情報は無いよりは多い方が良いからな。

原作でナルトは封印の書一番初めの「多重影分身の術」しか出来なかったと言っていたが、それだけで十分異常だ。

何せ僅か一時間足らずで会得出来たんだからな。

俺も試しにやってみたが、自力で多重影分身を出来るには1ヶ月かかった。オマケに出せたのは3体。

一応の才能や今まで努力をしてきた俺でさえこれだ。

時々やるせなくなってくるがこれは諦めるしかない。何せナルトは主人公。この世界に愛されてるんだからな。

封印の書には多重影分身の他にも様々な術が載っていたがほとんど使えない。どうやら俺のレベルが足りないらしい。

まあ、これは追々会得すれば良い。

原作開始まであと6年あるんだ。何とでもなる。

体術や忍具の修行も順調だ。

チャクラを体に浸透させるのもかなりコントロール出来るようになったから超人的な運動能力を有するようになった。

流石にリーみたいに体術のみに注いだ奴には適わないだろうが、下忍レベルなら対等かそれ以上には戦える筈だ。

忍具についても手裏剣や飛び道具の扱いもかなり完成してきた。

この世界で銃が生まれない訳だ。明らかに銃弾より早く投げられるし弾道？を曲げる事も出来る。

ていうか忍のせいで近代兵器の大部分が生まれないだろうな。

チャクラを浸透させて理想的な投擲姿勢で投げればとんでもない早さで手裏剣やクナイが飛ぶ。

俺でさえこの早さだ。上忍レベルなら最早目で追えないだろうな。

チャクラコントロールも大分出来てきたからそろそろ性質変化に入るか。

チャクラも武器として扱えれば戦術の幅はかなり広まる。

チャクラでクナイや手裏剣を覆えば頑丈に、強力になるし、例え武器が無くなっても戦える。まあ、俺の武器が無くなる事は無いがな。

会得するにはかなりの修練を積む必要があるから長い修行になりそ

うだ。

そうになるとアスマのチャクラ刀が欲しいな。コピーしよう。

7 授業風景

アカデミーに入って2年目。

ようやくアカデミーでも忍術の実習に入った。

今までは遠足みたいなサバイバル実習や忍術理論や戦術の座学ばかりだったから周りは浮かれている。

まあ、忍術をしたい気分は分かるがな。

今まで出来なかった事が出来るようになるのは誰でも嬉しいものだ。俺も始めて変化の術が出来た時は嬉しかった。3歳の時だったがな。

アカデミーでは7歳になってようやく縄抜け、隠れ蓑、変化など基本的な術を教えるらしい。

普通に考えれば十分早いかな？

何せ現実世界で言えば小学1年生と同じ歳だ。そんなイタズラ盛りのガキ共に術を教えるのはどうかと思うがな。

教師が術の説明をしている途中でうちはサスケは勝手に印を組み出し、見事に成功させた。

周りは「スゲエ！」や「流石サスケ君！」みたいにもてはやす。

確かにスゲエけど教師の面目丸潰れだぜ？

ほら、実習担当の教師が若干青筋立ててる。

自分が教える前にやられるってマジ迷惑でしかないもんな。サスケも教師の顔を立って説明が終わった後にすれば良かったのに。

まあ、たかだか7歳に空気を読むことを求めるのが間違いだろがな。

それに対抗心を抱いたのかうずまきナルトが

「なんだよ！なんだよ！俺にだって出来るってばよ！！」

と意気がって印を組むが見事に失敗。周りから笑われている。ナルトの才能が開くのは12歳以降だからな。九尾のチャクラを自在に操れないナルトはドベでしかない。

教師が改めて説明をして、話が終わったので皆我先に印を組み、術をしようとするが大抵は失敗する。最初から成功する訳無いから当たり前だがな。

ちなみに俺も一度失敗してから2度目で成功させた。これならそこまで目立つ事は無い。

周りの奴等から「教えてくれ。」と頼まれたので暇つぶしとして指導する。と言っても教師の説明を分かりやすくしたただけで大した指導はしてないがな。

授業が終わる頃にはほぼ全員が術を成功させたが、ナルトだけは一度も成功しなかった。そのせいで再度落ちこぼれのレッテルを張られた。

つかアイツ簡単な術にチャクラ込めすぎ。あれは上級忍術に使う量ぐらい込めてるぜ。

その代わりにチャクラコントロールが下手すぎで無意味に終わってる。アイツがコントロール技術を持ったらとんでもなく強くなるからな

今はその片鱗さえ見せないが。

尾行や調査をした結果、ようやく暗部や「根」の本拠地を見つけた。暗部は変な仮面を着けてるから簡単に尾行出来たけど「根」の奴等は尾行を撒くためか瞬身とかの移動系術を使いやがるから中々苦労させられた。

根の本拠地に入ると至るところに侵入者避けのトラップや見張りがうようよいやがる。火影の屋敷より警備が嚴重だな。

でも『完全なる隠匿』を発動させてる俺には何の意味も無い。普通に目の前を通りすぎても全くバレないし畏も発動しない。

図書室にあつた禁書や禁術、ダンゾウの部屋にあつた危険性が高い術式が書いてある巻物も簡単にコピー出来た。

巻物の中には飛雷神の術みたいな超便利な術が沢山書いてあるが、俺のレベルで発動する訳無いので無用の長物だ。

まあでも暗部構成員とか血継限界についての知識が更に得られたから良しとするか。

滝登りの修行を終え、これでチャクラコントロールは上忍の域に達しただろう。

しかし形態変化はまだまだだ。

チャクラを棒状にして敵を切り裂くなど簡単な形状なら出来るが、

チャクラメスのような難しいのは安定しない。

皮は切らずに内部だけを切るといふのは結構難しい。でも出来ればかなり楽になるからな。

コピーで既に出て来るが、自分で出来るようになれば誤魔化しも効くから自力達成を目指す。

逆に医療系は結構上手くいってる。

掌仙術などチャクラを込めることで傷を治癒する術などは成功した。まあ、『都合の良い祝福』があるからこんなのいらないが、人前で治療する必要があつた場合に備えて覚えといた。

無いとは思つが知らないよりは良い。

性質変化については順調だ。

チャクラ量と制御レベルが上がったおかげで火遁系以外の術も使えるようになってきた。

火遁と相性が良い土遁が多いな。逆に水遁は難しいが。

それでも初級や中級忍術ぐらいなら何とか会得出来た。精々補助ぐらいだが。

体術や忍具もレベルは上がってるだろうが、実戦経験が無いから不完全に終わってる。

そろそろ一通りの強さは手に入れたから実戦に移るか。

とりあえず実戦を見据えてフェイントなど騙す技術を更にする。

これが終わったら初の実戦だ。

8 実戦デビュー

アカデミーも3年生になり、手裏剣やクナイといった凶器の扱いが増えて来た。

たかだか9歳のガキ共に危なく無いのか？たまに手を切る事故も起きてるし。

イジメに使われたらシャレにならないぞ？

他にもサバイバル実習の難易度も少しづつ上がってきて、1日自給自足で山で過ごすなど忍者らしい授業も増えて来た。まあまだ子供騙しの面が強いがな。

俺の学園生活はとりあえず順調だ。

狙い通りに学年10位ぐらいをキープしてるからそこそこ優秀な生徒と認識されてるし、なるべく原作組には近寄らずに当たり障りの無い友人関係も築いている。

アイツ等に近寄るとロクな事は無いだろうからな。出来れば一生関わりあいたく無い。

原作組はまあ、原作通りに過ごしている。

うちはサスケは忍術の授業では相変わらず教師が説明している横で術を成功させるし、戦術の授業では教師ですらうなる戦術を披露する。

他の科目でも全てトップで、他のアカデミー生を引き離している。

どうせ偉大なるクソ兄貴が異常な程優秀だったから負けないために努力しているのだろうが、どう見ても才能ではうちはイタチに負けるから劣化コピーにしか見えない。

逆に見てて哀れなぐらいだ。

一方つずまきナルトはそんなサスケに対抗心むき出しで追い付こうとしているが、逆に失敗して毎回笑われるか呆れられている。空回りしてるのが分からないのか？
面倒だねえ子供のプライドって。

後の奴等も原作通りだ。

春野サクラは唯一座学だけはサスケと並んでトップ。他は平凡だけ
ど。

奈良シカマルはサボリの常習犯だし、秋道チョウジは何時も何か食
ってる。どこからあのお菓子は出てくるんだ？

日向ヒナタは時々ナルトをジツと見たり見なかったり。リアルで見ると不気味だな。まるでヤンデレみたい。
とにかく原作通りだ。

ようやく実戦デビューの日が来た。

この日のために戦う技術は勿論、逃げる技や煙に撒く技術などいざ
というときの技術も鍛えていた。

今回の実戦は主に体術や忍具の経験を得るためだ。必要になったら
忍術も使うけど。

今回向かうのは隣国、岩の国だ。

岩の国を選んだ理由は特に無い。

ただ単に砂の国は砂漠だからヤダし、海を越えて霧の国に行く必要
は無いし、だから岩の国になった。

岩の国に向かうのはそこらへんのガキに変化した影分身だ。流石に
本体が行って万が一があつたらヤダしな。

アカデミー生でも無い、12歳ぐらいのガキだから忍者の証である
額当てもしてない。これならどこかの国の偵察か威力偵察程度にし

か思われないだろう。万が一戦争が起きると面倒だしな。

火の国を出て2週間。ようやく岩隠れの里の国境線に着いた。

今回は見つかる事が前提なのでそのまま国境に入った。

岩隠れの里に向かいしばらく進んでいると前方から誰かが来た。

国境警備のためか一人だけ。

岩のマークが入った額当てをしていることから岩の忍に間違い無い。

「止まれ！」

停止命令が出たのでとりあえず停止。忍と対峙する構図になった。

「ここは岩隠れの里の領内だ。何のようだ？」

と聞いてきた。少し困惑もしているようだ。何せ侵入者が忍者に見えないガキだからな。

「おお、すいませんねえ。いつの間にか国境を越えちゃったみたいで。」

でもせつかくだから岩隠れの里を見学したいなあ。お願い出来ませんか？」

とりあえず平和的？に交渉する。

「ダメだ。許可なく他国の人間を里には入れられない。」

「そうですか。じゃあ残念で……」

会話途中で忍にクナイで切りかかった。

しかしそれは軽く避けられた。ちよつとショック。

「……どういっつもりだ？」

睨み付けながら忍が聞いてくる。

「いやあ、すいません。何となく貴方の顔が気に入らないのでつい自分まだガキなんで勘弁して下さい。」

全く謝る気が無いように謝る。謝る気無いしな。

「ふざけやがって……。連行してどこの国の忍者か聞きだしてやる！」と忍も襲いかかって来た。早さから多分中忍か下位の上忍かな？

「ほつ！危ないなあ。ダメですよ？子供に襲いかかるなんて。まるで子供好きの異常者に見られますよ？」

軽口を叩きながら攻撃を避ける。逃げや避けるのには自信があったから避けられた。

「うるさい！さっさと捕まれ！」

と忍の攻撃も苛烈化してきた。

まだお互い忍術は使っていないがそれなりに熾烈な戦いになった。にしてもやはり実戦は全然違うな。当てる気満々の攻撃も軽く避けられるし、相手の攻撃もフェイントが織り交ぜられていてかわしにくい。

最初は善戦していたがやはり経験の差が少しづつ押され始め、傷が増えて来た。

「降参したらどうだ？」

忍が勧めて来た。確かにこのままではジリ貧になって何れは負ける。

「はあ、はあ……残念、子供は諦めが悪いんだよ。」
と強がる。

その言葉に忍も本気になったのかクナイを構え、決めようとした。

そこに背後から農民と商人に変化した2体の影分身が忍に飛びかかって来た。それに忍はビックリしたが、すぐに立て直して構え直す。実は初めから3体でスリーマンセルを取り、気配を消して機会を伺っていたのだ。

いきなり3対1と忍が不利になったためか形勢逆転。

一気に忍が不利になった。

ある程度実戦経験を得られたから増援が来る前に引き上げても良いんだけど、念のためにこの忍は殺しとく。無いとは思いが少しでも不安要素は消し去る。

少年と商人に化けた影分身が忍を囲み、農民に化けた影分身が印を
組み

「土遁！土流槍の術！」
をかけた。

2体の影分身は忍の体を押さえつける。忍は何をする気か分かったのか必死に逃れようとするが間に合わず、土で出来た槍で影分身諸とも串刺しにされた。

影分身は消え、忍は重症を受けたがかるうじて生きていた。スゲー生命力だな。

「…貴様どこの忍か知らないが…タダで済むと思っているのか!？」
死ぬ間際のベタなセリフを聞き終えた後に残った農民に化けた影分身が忍の頭を飛ばし、念のために潰した。
前方から増援が来たのか心配がするから影分身を解いて逃げた。

よし、初めての实战だからかかなり手間取ったが、無事終了だ。
念のために影分身が持っていた装備は岩隠れの装備をコピーした物だから木の葉の忍がやった証拠は無いし、火遁系ではなく土遁系の術を使った事から内部が抜け忍の犯行と勘違いするだろう。
目撃者である忍は串刺しにした後に首をハネたから確実に死んだ。
万が一にもバレない筈だ。

にしてもアイツ強かったな。

中忍だと思うけど、実戦は結構厳しいな。一人だけで行ってたら絶対負けてたし。

結局は数の暴力でしかない。まあ、勝てばどうでも良いけど。

さあ、今回得た戦訓を基に修行してまた実戦。その繰り返しだ。

岩隠れは多分しばらく警戒体制を取るだろうから、次は雲の国の雲隠れの里にも行くかな。

9 説教

実戦初体験から1年が経ち、10歳となり、アカデミーは4年目に突入して変化の術など使える忍術をようやく教え始めた。

やはりこれもうちハサケは一発で成功させ、得意気な顔をする。言っちゃあ悪いが、お前の兄貴は多分6歳の頃には使えただろうからそんなに得意気にならない方が良いと思うが？

確かに普通に考えれば、驚異の才能だけどお前の目標はかなり高いから無意味だぜ。

まあ別に良いけど。他人の復讐に興味無いし。

俺は何時も通り1、2回ワザと失敗してから成功させる。これでも十分優秀なだけだな。

大抵の奴等は1、2時間やってようやく出来るんだから。

ナルトは何時まで出来なかったがな。

まあ、でも原作の年には変化は出来ていたから何れは出来るんだろう。

何故かイルカに呼び出された。何かやったか？

特に心当たりは無いが呼び出されたので職員室にいった。

「カズト」。お前もうちよつとヤル気出せよ。」

と言われた。何に？

「どういう意味ですか？」

「お前、わざと毎回術に失敗したりテストで間違えたりしてるだろ？」

いきなり当てられたので少し驚いた。やっぱり毎回毎回失敗するのはあからさまだったか？

「いいえ、全て真剣にやっていますよ？だからトップ10に入る成績を維持出来てるんですから。」

正直に言う必要は無いので惚ける。

「それにしても一度も満点や術を一回で成功させた事が無いよなあ。真剣にやってるなら一度くらいあってもおかしくないんじゃないか？」

中々痛いところ突くな。

「それこそ誤解ですよ。俺は真剣に一生懸命やった結果がこれなんです。だから。これ以上何を頑張れと言っんですか？」

それともこの成績だと何か問題でもあるんですか？」

逆に問い詰め口調にする。後はこの無限ループをすれば良い。何せ特に問題無いんだからな。

「ん〜。確かに今の成績は十分優秀だから特に問題無いがな。

どうも俺にはお前が手を抜いているようにしか見えないんだが？」とイルカが俺を見ながら言う。

しかし俺は

「手を抜くなんてとんでもない。俺は一生懸命やっています。それを疑われるのは心外ですね。」

とあくまで惚ける。

それを聞いてイルカも何を言っても無駄だと悟ったのか

「…はあ。もう分かった行っても良い。」折れた。

ようやく終わりかと職員室を出ようとしたら

「でもなカズト。世の中にはどんなに頑張っても出来ない奴等もいるんだ。

だから本当はもっと出来るのにワザと出来ない振りなんてそいつらに失礼だぞ？」

と道徳的な事を言ってきた。

確かに教師としては素晴らしい説教だが俺にはウザったいだけだ。

「先程も言いましたが、俺は俺なりに精一杯やっています。」
と言い放ち、職員室を出た。

この俺に説教をかますとはスゲエな。
幾つもの世界を体験し、好き勝手に生きてきた俺に「他人の事も考
える。」とは素晴らしいお言葉だな。

しかし残念ながら普通のオリ主なら多少考え方を変えるかも知れな
いが、俺は小揺るぎもしない。

あの程度で変わる考えなら今まで生きてこれなかっただろう。

初めは戦乱の世界、次は魔法世界、その次は人外魔境、そして今は
忍者の世界だぜ？

道徳なんて考えてたらとつくの昔に死んでるか心が壊れて自暴自棄
になる。

初めから無かった気もするがな。

実戦経験を得るために岩以外の国にも侵入して国境警備の忍と戦っ
てた。

木の葉だけ何も無いと怪しまれるから木の葉にも侵入して多分中忍
の忍を殺った。

国境を越えられ、更に警備の忍も殺されるといふ不祥事は勿論隠さ
れたが、上層部や他国では公然の秘密となっていて、国境警備の人
数を増やしたり上忍などレベルが高い奴等を警備につけるようにな
りやがった。

これは非常に困った。

何せ忍5大国全てに侵入して経験を得られた。つまり実戦経験は5
回しか得られていない。

最低でも10回以上は欲しい所だが、流石に上忍や大人数を相手に

するのは難しい。万が一にもバレたらヤバイ。上忍と戦うという経験は欲しいが、警戒心MAXの上忍とやるのはかなりの難易度だ。

恐らく戦いは長時間になり、そうなったら相手は増援を呼ぶだろう。目撃者が増えるのは避けたい。

最悪、能力でサイレントキリングすれば良いんだが、その場合一撃で全員を決めないと逃げられる可能性が高い。

大技はまだ会得してないから大人数を一撃で仕留めるのは至難の技だ。

……いや？いつそ上忍に積極的に仕掛けるか？

体術や忍具から忍術戦に変えれば相手も忍術で返してくる可能性が高い。上忍ならランクAやSの忍術を知ってる可能性があるからもしかして大技をコピー出来るかも。

失敗したら速攻ずらかればリスクは少ない。

しかしこれには重大な欠点がある。

何かをコピーするには本体である俺自身が見なくてはならない。影分身では経験を得られるだけだ。

つまり俺は影分身が上忍と戦ってる所を見てなくてはならない。

『完全なる隠匿』を使えば気配や姿は認識されないが、大技をされた場合、俺も飲み込まれて死ぬ危険性が高い。

危険性が低い遠距離からの視認では大技以外のコピーが難しい。小技でも重要な術は沢山あるからな。

命の危険性が高いがリターンは運要素が強過ぎる。

どうしたもんか……。

5 大国の侵入者警戒が強まってから1年。
11歳になり、アカデミーでは5年生になった。

あの後考えた結果、やはり5大国に再び侵入して上忍と戦うのはあまりにリスクが高すぎるとして却下。

代わりに援軍は来ず、殺つても問題の無い奴等である抜け忍や、強力な戦力は少ないであろう小国に侵入して経験を得る事にした。

抜け忍を見つけるのはかなりの手間がかかる。

何せ簡単に見つかるなら既に追い忍に殺られてるからな。

木の葉の暗部の資料などで大体の位置は特定出来るが、そこから見つけるのは至難の技だ。

変化した影分身を多数放っているがほとんど見つからない。現在見つけられて殺したのはたった二人。効率悪すぎ。

だから主目標を小国に切り替えた。

滝隠れや草隠れ、雨隠れなど大戦に負けた小国は忍の数が少ないからそこまで脅威じゃない。

しかし中忍や上忍はいるから十分実戦経験にはなる。

それぞれの里で体術、忍術、幻術など使い分けて実戦経験を得れた。

まあ、どれも最後は皆殺しにしたけどね。

岩の時みたいに影分身で相手を取り囲んで押さえつけて全方位から槍や刀で影分身ごと突き刺して殺したり、『完全なる隠匿』を使って潜んでた影分身で暗殺したりなど目撃者は皆殺しにした。

おかげで大陸中で

「各里を襲い、国境警備の忍を次々殺して回ってる奴、もしくは奴等がいる。」
つて噂にまで発展したからな。
しばらくは大人しくしよう。

アカデミーでは本格的な忍術実習をするようになってきた。
何日も山に籠ったり、体術や忍具の扱いを詳しく教えるようになったし、忍術では分身などアカデミーでは高度な術も教えるようになった。

しかし面倒なものも増えた。

例えば、体術の時間では勝ち抜き方式の試合とかが多くなり、原作組と戦う事もしばしばだ。

ほとんど楽勝に勝てるけど、一つだけ面倒があった。

うちはサスケだ。

サスケは溢れんばかりの才能を生かしてこの試合でも連戦連勝をしているが、そのサスケとかち当たる事になった。

幾ら強いとは言っても所詮下忍レベルだから軽く倒せるが、コイツを倒すと一気に注目度がハネ上がるから勝つ訳にはいかない。

そのため、適当に相手してワザと蹴られて終了。

ワザと負けるって結構難しいんだよな。

あまりにも手を抜くとこのプライドの塊はキレて「本気を出せ!!」とか言い出すだろうし。

だから何回かサスケに当たるような攻撃を見せたりして誤魔化してから攻撃を食らう。

ここで殺しておけば俺のストレスは減るが、代わりに追われる身に

なるから我慢して負けてやる。

それなのに「キヤー、サスケ君スゴイ!!」という女子の声援に「ふっ。」と軽く答えるその顔をえぐりたくなかったが我慢だ。

「惜しかったな。」や「次やれば勝てるさ。」など慰めてくれる友人達の元に行き、サスケの無双を見学する。

結局サスケは無敗のまま授業を終えた。

途中でナルトが乱入してサスケに襲いかかったが、軽いなされて床に沈められてた。

飽きないねお前。

勝負しかけるならちゃんと努力した後に行けよ。だから成長しねえんだよ。

親父が国境警備につく事になった。

親父は上忍だからな。警備強化のために駆り出されたらしい。

しばらく家には帰らないと母親は俺につげた。

「これは秘密の話なんだけどね。最近大陸中の里で襲撃事件が頻発しているらしいの。」

襲撃犯達は国境警備の忍に襲いかかり、皆殺しにしてるんだって。

だから国境警備の強化のためにお父さんも呼ばれたの。

無いとは思っけど、カズト、絶対に国境付近には近付いちゃダメよ？」

母親が注意してきた。ていうかそれって一応極秘事項だろ？いくら息子とは言え、喋って良いのかよ。

「ああ、大丈夫。絶対近付かないよ。」
と笑顔で言う。

元凶が襲われる訳ねえだろ。

いつそ親父を狩るか？とも考えたが騒ぎになるし、葬儀も面倒だからやめた。

まだこの生活を崩す気は無い。少なくとも後1年は。

11 原作開始（前書き）

いよいよ原作へ介入です。

ここから北郷は空気になります。

11 原作開始

更に1年が経ち、12歳となり、原作開始のアカデミー最終学年になった。

アカデミー卒業式前日、原作通り歴代火影の顔岩に落書き事件が発生した。

ていうかよくやるな…。

あんな高い所からロープで固定しているとは言え、平気で落書きをするというのはそれなりに勇気が必要だ。

チャクラで岩に張り付いてる訳でも無いのにやるのはある意味で賞賛物だ。

しかしその勇気は称えられず、イルカに捕まり、現在は教室にて同学年生徒全員から呆れられた目でナルトは見られてる。

「明日は忍者学校の卒業試験だぞ！！」

お前は前日もその前も試験に落ちてる！！

外でいたずらしてる場合じゃないだろバカヤロー！！」

もう何回目か分からないが何時も通りイルカがナルトに説教をかます。

しかしナルトは「はい、はい。」と軽く返すだけ。

イルカはナルトのその態度が頭に來たのか

「今日の授業は変化の術の復習テストだ！！全員並べー！！」
と理不尽な抜き打ちテストを開始した。

勿論生徒達は「えー！！！！！！！！」と抗議するが

「先生そつくり化けること！！」

イルカは無視して早く並べと促す。

生徒達も納得いかないが仕方ないので全員並ぶ。

生徒達は次々変化を成功させていく。まあ変化なんてかなり前に習った術だから出来なきゃヤバイしな。

勿論俺も軽く成功させ、席に戻って終わってない奴等を見てる。

「次！うずまきナルト。」とナルトの番になる。

「お前のせいだぞ！！」とか後ろの奴等から愚痴られるがナルトは「知るかよ。」と返すだけ。

そしてナルトは印を結び「変化！！！」と術をかけたならイルカではなく、全裸の女性に化けた。

それを見てイルカは鼻血を出し倒れる。

確かに面白い術だけどそこまでか？まあ個人の好みがあるが、俺は全く何とも思わなかった。何か中途半端だしな。

「ギャハハハ！！名づけておいろけの術！！！」

とナルトは術を解いて得意気に言う。

しかし起き上がり、ティツシユを鼻に詰めたイルカは

「この大バカものー！！勝手にくだらん術を作るなっ！！！」
と激怒。結局ナルトはまた説教を食らう羽目になった。

1日経ち、遂に卒業試験の日になった。

「……で、卒業試験は分身の術にする。呼ばれた者は一人ずつ隣の教室にくるように。」

イルカが試験科目を発表する。

生徒達は次々呼ばれて、隣の部屋に入り、分身の術を見せる。

出てくる者達は全員合格の証である木の葉のマークが入った額当てをして喜んでいる。分身の術だからな。普通に授業を受けていれば楽勝だろう。

「次！北郷カズト。」

俺も呼ばれたので隣の教室に入る。

「よし、じゃあ分身の術をやれ。」

イルカが言ってきたので「分身の術。」と軽く言つて3体の分身体を出した。

「よし、合格！」

おめでとう。」

と額当てを渡された。

「ありがとうございます。」

と頭を下げて教室に戻る。

教室の中では互いに額当てを見せ合つて盛り上がつていた。そんなに嬉しいか？

たった12歳で軍人にさせられたんだぜ？

まるでジハードのために戦う少年兵の集まりに見えるな。

卒業試験が終わり、我が子の合否を待つていた親の元に生徒達は行く。勿論俺も。

いらなと言つたんだが「カズトのせつかくの晴れ姿を見ない訳にはいかないわ。」と俺の母親も来ていた。

「良くやった、さすがオレの子だ!!!」とか「卒業おめでとう!!!今夜はママごちそう作るね!!!」とか周りでは我が子を親達が祝福している。

俺の母親も「おめでとう、カズト!!!」と喜んでいる一人だ。

そしてこの光景を少し離れた木に吊るされたブランコに乗りながらナルトが聞いていた。

「ねエ、あの子……。」

「例の子よ。一人だけ落ちたらしいわ!」

「フン!!!いい気味だわ……。」

「あんなのが忍になつたら大変よ。だって本当はあの子……。」

などなどヒデエ事をわざわざ聞こえるように言つてる。正に人間らしい行動だな。

ちなみに俺の母親も「カズト、あの子を見ちゃダメよ。汚らわしい。」と中々辛辣な事を言っている。

これで原作ともおさらばだ。

多分俺は前半のモブ達で構成される班に配属されるだろうからそれで不合格になれば良い。どうせ7班から前は合格しないんだからな。後は中忍試験までまたアカデミーでのんびり過ごしてれば良い。木の葉崩しが起きればかなり混乱するだろうから死を偽装するのは簡単だ。

国境を越えて他国に逃げるなり別の大陸を目指すなり後は自由だ。

その後、忍者登録書を作るために証明写真を撮り、提出する。勿論普通にな。誰かさんみたいにとんでもないメイクやポーズをするような事は無い。

そして遂に説明会。

教室にはやはりナルトが額当てをつけて座っていた。原作通り多重影分身でもやったんだろう。にしても多重影分身をあんなに早く会得するってマジあり得ない。主人公様は素晴らしいですね。

ちなみに現在その主人公様はうちはサスケの目の前に座り込み、ガソつけあつてる。そこまで近付くのはスゲエな。

そして更に前の席の奴に押されてサスケとキスをするというトラウマも受けた。

更にそのあと春野サクラにボコられるという悲惨っぷり。正に漫画だな。

「今日から君達はめでたく一人前の忍者になったわけだが…。しかしまだまだ新米の下忍。本当に大変なのはこれからだ。」
イルカ先生による最後の講義が始まった。ちなみにナルトはまだダウンしている。

「えー…。これからの君達には里から任務が与えられるわけだが、今後は3人1組のスリーマンセルを作り…。各班ごとに一人ずつ上忍の先生が付き、その先生の指導のもと任務をこなしていくことになる。」

「そうそう、スリーマンセル。つまり3人で1グループ。だから既に決まっている原作グループに入る事は無い。改めて安心だ。」

「班は力のバランスが均等になるようこつちで決めた。」
イルカの宣言に「えー！！」と苦情が来るがイルカは受け流し、班の発表をする。

1班、入ってない。2班、入ってない。3班、入ってない。

あれ、6班まで終わったけどまだ呼ばれてない。
もしかして俺だけ1人で11班とか？まあそれでも良いけど。
もしかして原作組に入れられる事は無いよな？それが7班だったら最悪だ。

あの班は下忍のグループなのにランクAの任務をやらされたりしてあり得ないんだからな。
普通の奴等なら速攻死んでる。

「じゃ、次7班。」

春野サクラ…「うずまきナルト！」

その言葉にナルトは歓喜の声を上げている。

しかし今の俺はそれを見る余裕は無い。何としてでも7班には選ば

れたくはない。最悪7班以外ならどこでも良い。とにかくアイツ等と一緒に嫌だ。

「それと…うちはサスケ。」

よし、それで終れ!! 終わってくれ!! お願いします。誰でも良いからお願いします。そのまま次の班に移って下さい。

いつの間にか俺は祈りのポーズをしていた。端から見れば7班に入りたがって祈っているように見える。

「そして北郷カズト。」

……………終わった……………。

ガツクリとして机に頭をぶつける。

ドンツ!! というデカイ音が教室に鳴り響いて全員が机に頭をぶつける俺を見る。

「…どうした? カズト。」

イルカが聞いてきた。諸悪の根源の癖に。

俺はゆっくりと頭を上げて

「何故7班だけフォーマンセルなんですか? 確か木の葉はスリーマンセルが決まりなのでは?」

せめて理由を…。それ次第ではまだ回避出来るかも知れない。

「まあ、卒業生が全員で28人で一人余ったからどうしようかと悩んでいたら、成績が一番ドベのナルトに常に一番の成績であるサスケと座学ではサスケと同率1位のサクラ、そこに常にトップ10位以内に入っていたお前を入れれば丁度良いかな? と判断したからだ。」

確かにそれならバランスが取れるかも知れない。

トップのサスケとドベのナルトでは差がありすぎるからそこにサクラを入れて、全体的なバランスを取るために安定した成績を持つ俺を入れたって訳か。

何てイレギュラーだ。こんなだったら俺もドベの振りをすれば良かった。そうだったらナルトの班には入らなかつただろうに…。

俺が世の中の理不尽さを嘆いていたら班の発表を終わり

「じゃ、みんな午後から上忍の先生達を紹介するから。それまで解散！」

イルカの解散宣言が聞こえたのでとりあえず教室を出て森に向かった。

周りに誰もいないことを確認してから

「チキシヨウ!!!」

太い木を思いつき殴り倒す。

「こんなイレギュラーは始めてだ……」。

キルアを引き取った時も焦ったが、今回は比較にならない。

……何でよりによつて原作組。更に7班……。俺に死ねるか?」

しばらく気分直しに周りの木々をなぎ倒しながら何かを罵倒する。

何に文句を言えば良いか分からないからな。

よしよし、段々と落ち着いて来た。

取り乱すな、まだ終わった訳では無い。

ザブザと大蛇丸の襲撃を何とか突破すればまだ可能性はある。スゲエ難易度上がったが……。

とりあえずは明日の試験のことを考えよう。

あの試験内容では俺が足引っ張りまくっても多分合格するだろう。

ただ単純に弁当食べれば良いんだからな。

だったら素直にやれば良い。

力は下忍レベルに落として鈴取りしよう。別に取れなくても良いしな。

意外に不意をつけば結構やれそうだけど。

12 テスト

飯を食い終わり、どうせカカシは遅刻するだろうが待ってないとおかしいので時間通り教室に戻った。

次々と他の班の担当上忍達が来るのに7班の担当上忍だけはいつこうに来る気配が無い。あんまりにも暇だから俺は読書中だ。しかし他の3人は何も持つてきて無いのかイライラしながら待っている。

「ナルト！じつとときなさいよ！！」
扉を開けて廊下を見ているナルトをサクラが注意する。

「何でオレ達7班の先生だけこんなに来んのが遅せーんだってばよオ！！」

ナルトはイライラが限界に達したのか大声を上げる。
気持ちは分からなくは無いがな。

ていうか忍が時間に遅れるってあり得ないだろ？任務の時は違うと願いたい。

「ほかの班はみんな新しい先生とどっか行っちゃったし、イルカ先生は帰っちゃおうし！」

周りをイライラしながら見ていたナルトが黒板消しを見て名案を閃いたみたいに笑う。

「ちよつと！！何やってんのナルト！！」
扉に古典的な黒板消しトラップを仕掛けているナルトをサクラが注意する。

「ニシシシ。遅刻して来る奴がわりーんだってばよ！！」
仕掛けが完了してナルトはやや満足気。

「私！知らないからね！！」

サクラは優等生的な発言をしているが止めない事から楽しんでる

事がわかる。

「フン。上忍がそんなベタなブービートラップに引っかかるかよ。」
サスケはくだらなそうに見ているだけ。

俺は読書を続けてスルーしていた。

少し経ち、カカシが扉に手をかけ、扉を開いたら黒板消しが見事頭に命中した。あんまりにも出来すぎてワザとらし過ぎ。

「ぎゃははは！！」

引っかつた！！引っかつた！！」

それが分からないナルトは指を指しながら爆笑している。

「先生、ごめんなさい。私は止めたんですがナルト君が…。」

サクラはしおらしい演技をしてナルトに全責任を押しつける。ヒデエ女だ。

サスケはカカシがあんまりにも簡単に引っかつたから疑わし気にカカシを見る。

「んー…なんて言うのかな、お前らの第一印象はあ…：嫌いだ！！」カカシが嫌い宣言をする。周りの雰囲気は陰鬱なものになる。そりゃ2時間以上遅刻されればトラップも仕掛けなくなるものだ。俺も起爆札が発動するトラップを仕掛けるか悩んだしな。

カカシに連れられて外に行った。

「そうだな…まずは自己紹介してもらおう。」

「…どんなことを言えばいいの？」

「そりゃあ好きなもの嫌いなもの…将来の夢とか趣味とか…ま！そんなのだ。」

「あのさ！あのさ！それより先に先生、自分のこと紹介してくれよ！」

「そっね…見た目、ちょっと怪しいし。」

カカシはナルトとサクラから悲惨な評価を受ける。確かに理由が分からない奴は片目を隠してるのが変に見えるしな。

「あ……オレか？」

オレは「はたけ・カカシ」って名前だ。好き嫌いをお前らに教える気はない！

将来の夢……って言われてもなあ……。ま！趣味は色々だ……。」

自己紹介と言えるか疑問な紹介をカカシは言う。まあ面接を受けてる訳じゃないからな。

「ねエ……結局分かったの……名前だけじゃない？……。」

サクラが言う。忍に詳しく自己紹介をされても困るだけだと思うがな。

「じゃ、次はお前らだ。右から順に。」

俺は左端に座ってるので最後か。

「オレさ！オレさ！名前はうずまきナルト！

好きなものはカップラーメン。もっと好きなものはイルカ先生におごってもらった一楽のラーメン！！嫌いなものはお湯を入れてからの3分間。将来の夢はア、火影を越す！！ンでもって里の奴ら全員にオレの存在を認めさせてやるんだ！！

趣味……はイタズラかな」

無理だと思っがな。

九尾に親類や友人を殺された奴等はどうあってもお前を憎むだろう。そうすれば楽だからな。

多分ナルトが認められるのは死んだ後だろう。

「次！」

「名はうちはサスケ。嫌いなものならたくさんあるが好きなものは別れない。

それから……夢なんて言葉で終わらす気はないが野望ならある！一族の復興とある男を必ず……殺すことだ。」

格好つけてるつもりなのかわざわざ言う。

別に言う必要無いと思うが？

「よし、次。」

「私は春野サクラ。好きなものはあ……ってゆーかあ、好きな人は……えーとお……将来の夢も言っちゃおうかなあ……。」

「キヤー……！」

非常にウザい。なんなら今言えば？100%断られるだろうから。

「嫌いなものはナルトです！」

それを聞いてナルトはガツクシする。それを無視してサクラはサスケを見ている。

「趣味はあ……」

何でコイツ忍者になっただらろう？

普通の家庭に生まれたんだから普通に暮らせよ。出来るなら家を交換して欲しい。

そうすれば忍者になんかならずにまだガキらしく遊び惚けられたのに。

「よし……じゃ最後。」

「俺の名前は北郷カズト。」

好き嫌いは色々。将来の夢は……じゃあ上忍になるってことで。趣味は……読書で良いや。」

恐ろしく適当な自己紹介をする。

嘘は言っただけ。一応上忍（並みの強さ）を目指してるし読書も好きだ。

「何か……えらく適当だな。」

カカシが呆れている。周りも呆れた目で俺を見ている。

「貴方に言われたくはありません。」

「よし！自己紹介はそこまでだ。明日から任務やるぞ。」

カカシが話を打ち切り、別な話題に転換させた。

「はっ、どんな任務でありますか!？」

ナルトがわざわざ敬礼して聞いてくる。そんなに任務がやりたいか？俺は一生したくない。

何で12で働かなくちゃならないんだよ？就労年齢低すぎ。

「まずはこの五人だけであることをやる。」

「なに？なに？」

「サバイバル演習だ。」

カカシの言葉にナルトとサクラら不満気な顔をする。

「サバイバル演習?」

「なんで任務で演習やんのよ？演習なら忍者学校でさんざんやったわよ!」

「。。。」

サスケはただ黙ってる。俺もだけど。

「相手はオレだが、ただの演習じゃない。」

カカシの言葉に3人は「?」となるだけ。俺はぼくっとしてるだけ。

「じゃあさ!じゃあさ!どんな演習なの?」

ナルトの言葉にカカシは「ククク。。。」と笑って答える。

「ちよつと!何がおかしいのよ先生!？」

「いや……ま!ただな……オレがこれ言ったらお前ら絶対引くから。」

「引くウ……?は?」

カカシの言葉にナルトは疑問を露にする。

「卒業生28人中下忍と認められる者はわずか10名。残り18名は再びアカデミーへ戻される。」

この演習は脱落率66%以上の超難関試験だ!」

やっぱり俺がいる分人数が増えてるな。

俺はその18人に入りたいよ。棄権とか無理かな?無理だろうなあ。3人は啞然としている。俺はただ無言なだけ。

「ハハハ、ホラ引いた。」

カカシは満足気。俺は普通にしてただけなんですけど。

「とにかく、明日は演習場でお前らの合否を判断する。忍び道具一式持って来い。」

それと朝めしはぬいて来い……吐くぞ！

くわしいことはプリントに書いといたから明日遅れて来ないよーに！

カカシがプリントを渡して来たので全員受け取る。

「吐くつて！？そんなにキツイの！？」

サクラが頭を抱える。確かにやりようによっては吐く可能性があるな。目的は全然違うが。

翌日、プリントに書かれた通りの時間に全員集合したが、やはりカカシは来ない。

3人共張り切っていたのかカカシの遅刻にイライラしている。

俺はまた読書。ちなみに朝食は普通に食ってきた。

しばらくして

「やー諸君、おはよう！」

ダルそうに歩きながらカカシがやって来た。

「おっそーい！！！」

ナルトとサクラは怒鳴る。あんだけ時間に遅れるなっつっつといてこの大遅刻だ。腹も減ってるだろうから相乗効果で倍ム力つくだろう。

少し移動した後

「よし！12時セットOK！！」

カカシが目覚ましをセットしていた。

3人は何がしたいのか分からないから「？」を浮かべる。

「ここにスズが3つある…。これをオレから昼までに奪い取ることが課題だ。」

もし昼までにオレからスズを奪えなかった奴は昼メシぬき！あの丸太に縛りつけた上に目の前でオレが弁当を食うから。」

4つの丸太を指差しながらカカシは言う。

3人の腹がぎゅるるる。と鳴る。俺のは鳴らなかつたけど3人に紛れて分からなかつたのか誰も突っ込まない。

「スズは一人1つでいい。3つしかないから…必然的に一人丸太行きになる。」

…で！スズを取れない奴は任務失敗つてことで失格だ！つまりこの中で最低一人は学校へ戻つてもらふことになるわけだ…。」

3人の顔に真剣な色が浮かぶ。そんなにアカデミーに戻るのが嫌か？仲間が沢山いるつてのに。」

「手裏剣も使つていいぞ。オレを殺すつもりで来ないと取れないからな。」

カカシの言葉は最もだが、世間知らずのサクラは

「でも！！危ないわよ先生！！」

と言う。

「そう、そう！黒板消しもよけられねーほどドンくせーのにイ！！！！本当に殺しちまうつてばよ！！」

ナルトも追従する。

「世間じゃさあ…実力のない奴にかぎつてホエたがる。」

ま…ドベはほつといてよいスタートの合図で…。」

ドベと言われた事が余程腹が立ったのかナルトはクナイを取り出し、カカシの方に投げようとしたが、その前にカカシに後ろを取られ、手と頭を拘束されて逆に自分の頭の後ろにクナイを向けられた。

にしてもたかだかドベって言われたぐらいで殺しにかかるとはヒデエな。倫理観はこの世界には無いのか？

「そうあわてんなよ。まだスタートは言っていないだろ。」

あまりの早さにサクラとサスケは驚く。確かに下忍に反応出来る早さじゃないしな。

俺なら多分避けられただろう。絶対とは言えないがな

「でも、ま、オレを殺るつもりで来る気になったようだな…。やっ
とオレを認めてくれたかな？」

ククク…なんだかな。やつとお前らを好きになれそうだ…。

…じゃ始めるぞ！！…よーい…スタート！！！」

カカシの合図に一齐に散る。

完全に隠れると不自然だから調整して下忍に出来る範囲で気配を消す。

「いざ、尋常に勝~~~~負！！！」

何故かナルトはわざわざ出てきた。お前は侍でも目指してんのか？

「しよーぶつたらしよーぶー！！！」

ナルトはまだ言う。

「……………あのさア…お前ちつとズレとるのオ……………」

カカシが呆れている。忍びが正々堂々と勝負なんてあり得ないからな。

「ズレてんのはその髪型のセンスだろー！！！」

ナルトがカカシに突っ込んで行くとカカシはポーチに手を入れた。

「うっ……………」

それを見てナルトは止まる。

「忍戦術の心得その1、体術！！…を教えてやる。」

そう言いながらカカシはポーチから何かを取り出す。

イチャイチャパラダイス中巻と書かれた本を読み出した。

「！？？」

ナルトはまさか本だとは思わなかったのか停止状態。

「……………？どうした早くかかって来いって。」

カカシが言うが

「…でも…あのさ？あのさ？なんで本なんか……………？」
ナルトが聞くと

「なんでって本の続きが気になったからだよ。」

別に気にすんな…。お前らとじゃ本読んでても関係ないから。」

その言葉にナルトは再びぶちギレ

「ボッコボコにしてやる！！」

と思いつき振りかぶって殴りにかかるが軽く防がれる。

「くっ…！！」

今度は蹴りを放つがしゃがんで避けられる。

「だあーっもうっ！！」

当たらない事がムカつくのか再び殴りにかかるが外れ、いつの間にか後ろを取られる。

「あれ？」

「忍者が何度も後ろ取られんなバカ」

カカシは指を組んで構える。一見すると火遁系の構えに見えるな。

「ナルトー！！！！早く逃げなさいって！！！！アンタ死ぬわよオ！！！！」

！！！！

サクラはわざわざ姿を表してまでナルトに警告する。

「え？」

ナルトは後ろを振り返ろうとするが

「遅い。」

カカシが指を組んだまま突き出し

「木の葉隠れ秘伝体術奥義！！！！千年殺し！！！！」

ナルトのケツの穴を突き刺し、ナルトをぶっ飛ばす。

ナルトは「ぎいやあああ！！！！」と断末魔を上げた。相当痛いだろうな。

ナルトは川に落ちた。そんな威力だったらケツの穴が壊れて内蔵もイカれてるんじゃないか？

しかし水中から手裏剣が二枚出てきてカカシを狙う。どうやら無事

らしい。

その手裏剣は本をみて笑ってるカカシに軽く取られた。

少しした後、ナルトが川から上がってきた。

「ゲホ！ゲホ！」

「ホラどうした。昼までにスズを取らないと一人だけ昼めし抜きだぞ。」

カカシがナルトに近付く。

「んなの分かってるってばよ！！」

「火影を超すって言ってたわりに元気ないねお前…。」

カカシの挑発に

「くっそ！くっそ！腹がへつても戦はできるぞ！！」

ナルトが精神論を述べる。

「さつきはチット油断しただけだってばよオ！！」

「世間じゃ油断大敵って言うんだよね。」

カカシがナルトに背を向けて歩く。

その瞬間、川から7人のナルトが出てきた。

「ん？」

カカシが軽く反応する。

「へへー…ん！！お得意の多重影分身の術だ！！油断大敵！今度は一人じゃないってばよオ！！」

ナルトが自信満々に言い放つ。

「ん！分身じゃなくて影分身か…。残像ではなく実体を複数作り出す術…。」

お前の實力からしてその術、1分が限界ってところだろ…。御託ならべて大見得切ったってしよせんナルト…まだその術じゃオレはやれないね。」

カカシが冷静に分析している途中にカカシは後ろから衝撃を受けた。後ろを見るとナルトの影分身がカカシを押さえつけていた。

「な…なにイ！！後ろ！！？」

「へへ…忍者つてのは後ろ取られちゃダメなんだろ…カカシ先生つてばよオ!!!」

ナルトが勝ち誇った顔で言う。

「影分身の術で一人だけ川下からこっさり上がって裏手に回り込んでいたんだつてばよ!

……さつきケツやられたぶん!せっかくだからここで一発…なぐらせてもらうつてばよ!!!」

ナルトが思いつき振りかぶって殴ったのは同じナルトだった。

「いつてエー…!!!」

殴られたナルトは倒れこむ。

「お前つてばカカシ先生だな!変化の術で化けてんだろ!!!」

主人格?のナルトが言う。

「お前こそ!」「イヤ!お前だ!」「オレじゃないつてばよ!」「

お前、先生と同じオヤジの臭いすっぞ!」「するかあ!!!」
などなど言い合い、殴り合う。

少し経った後に

「あのさ!あのさ!とりあえず術といてみるつてば。そしたら二人になる…。それで分かる。」

ナルトの一人が提案する。

「あ!もつと早く気づけバカ!」

「お前はオレだバカ!」

ボンツ!術を解いたらナルト1人だけだった。

ちよつとナルトの背中に哀愁を感じた。

よし、そろそろ動くか。

俺は気配を消しながらサクラに近付く。

「サクラ。」

俺に全く気がつかなかったのかビビりまくってサクラは後ろを見た。俺と分かってホッとしたのか

「何だカズトかア、驚かせないでよ。」

「悪いな、ところで協力してスズ取らないか？」

「協力？」

「ああ、さっきの見た限り1人だとキツイから協力して取りに行こうぜ。」

俺の協力要請にサクラは

「ゴメン、私サスケ君と組みたいんだ。」

断られた。

「でもサスケの居場所分かるのか？」

「ううん。でも見つけてみせる。そうすればスズも取れるはず。だってサスケ君はアカデミーNo.1だもん！」

どこから来るか分からないがサスケに絶対的信頼感があるらしい。仮にサスケがスズを取れてもお前の分まで取ってくれると思えないけどな。

これ以上何を言おうがサスケ君なら大丈夫！という宗教まがいの信頼感を見せられそうだから素直に引く。

「そうか、分かった。幸運を祈る。」

そう言っただけでその場を後にした。まあ、本当に協力関係を結ばれても困るしな。

一応声はかけた。という事実が欲しかっただけだ。

どうせ受かるなら受かるべくして受かりたいからな。最初から分かっていた感を出せば後々楽になる。

次はサスケだ。

サスケはさつきワザとスキを見せた力カシを襲撃したせいで居場所がバレたから移動中だ。

そこに偶然出会ったように姿を見せる。

「サスケ、無事だったか。」

俺が姿を見せたら手裏剣を投げられかけたが俺と分かり止めた。

「お前か…。」

若干警戒してんのはもしかしてカカシが俺に化けてるか疑ってるのかな？

「安心しろ、俺はカカシじゃねえよ。」

一応言っとく。あんまり効果は無さそうだが。

「何の用だ？」

「ああ、実はさ、俺と協力しないか？」

俺の協力要請にサスケは「協力？」と言うだけ。

「ああ、さつき見た限りカカシはかなり強い。1人だと難しいだろうから協力してスズを取ろうぜ？」

割りと友好的に勧誘したんだがサスケの返事は

「断る。」

即答だった。

「何故？」

俺の質問に

「オレは1人でも問題無い。」

それにお前と組んだところで足手まといになる可能性がある。」

どこからその自信は生まれるのか是非解体して確かめたくなったが我慢だ。

「いやあ、でも1人より2人の方が戦術の幅は広がるぜ？」

再度勧誘したが

「くどい。俺は1人で合格する。」

そう言っただけサスケは行ってしまった。

計画通りなんだがやっぱムカつく。

サスケの性格上、まず無理だと思っていたが案の定無駄だった。まあサクラ同様、頷かれても微妙に困るがな。

サクラよりかは使えるが言うこと聞きそうに無いからな。精々その

自信をカカシに打ち砕かれると良いだろう。

再び気配を消して隠れていると

「あぎゃああああああ!!!」

デカイ悲鳴が聞こえた。サクラが幻術をかけられたんだろう。ざまあ見ろ。

しばらく隠れていると今度は

ボゴウ!!!というデカイ音と光が見えた。豪火球の術をやったか。という事はサスケも終わったな。

そろそろ行くか。

カカシは弁当を盗み食いしようとしていたナルトを丸太に縛り上げた後、俺を探している。

まだ俺は何もしてないし何もされてないからな。

気配を消して隠れているがこの程度の隠蔽では簡単なのかカカシは真っ直ぐ俺のいる方角に来る。

俺はクナイを持ち、近くに仕掛けたロープを切る。

その直後にデカイ丸太やクナイが飛んで来て、カカシに襲いかかる。しかしカカシは簡単に丸太を避けてクナイは丸太で防いだ。しかしそのクナイには起爆札が仕掛けられていてジジツという札が燃える音がした直後に大爆発して丸太ごとカカシがぶっ飛んだ。

カカシが死んだように見えるが俺はクナイを構えたまま警戒を解かない。

すると後ろから

「いやあ〜やってくれるね。」

無傷のカカシが出てきた。

「そういうアナタこそ、無傷なんて傷つきますね。せめて腕が吹っ飛んでくれてれば助かりますのに。」

皮肉を返す。

「それは勘弁して欲しいな。

…にしてもやり方や殺る気が下忍とは思えないな。やっぱりお前は実力を隠していたか。」

「ほう、どうですかね？この程度ならアカデミー上がりでも考え…」
会話途中での強襲もカカシに簡単にいなされる。

クナイを持ちフェイントをかけながらサスケより速い動きで急所を狙うが避けられる。

やっぱり下忍レベルに落とされた体術ではカスリもしないな。

「避けないで下さいよ。殺せないじゃないですか。」

攻撃を続けながら軽口を叩く。

「避けなきゃお前、完全に殺す気でしょ？ていうか目的忘れて無い？」

「貴方が死んだのを確認した後にスズを貰います。」

カカシの首を狙って攻撃する。

「そういう訳にはいかないのよね。」

カカシは下忍では見切れないような速さで避けて俺の背後にまわる。そしてカカシは俺を昏倒させるために首に手刀を叩き込む。しかしその瞬間ボンツという煙りを出しながら俺が消えた。

「な、影分身！」

カカシが俺が影分身を使った事にほんの一瞬だけ驚いたのを見計らって後ろで待機していた本体の俺がスズを取った。

「よし、これで任務完了。」

スズを揺らして鳴らしながらカカシを見る。

「…はあ〜まさかお前も影分身の術を使ったなんてね。」
カカシが呆れたような目を向ける。

「まあ、俺はナルトみたいに8人なんて数は無理ですけどね。1人で精一杯なんですよ。これでも必死に努力したんですけどね。まさ

か下忍で他に使える奴がいるなんて……。」
俺も呆れたように言う。

「まあ、影分身の使い方とかはお前の方が優れているから良いんじゃない？」

カカシが慰めるように言う。

「それはどうも。必死に修行しましたからね。」

にしてもアイツ等が協力してくれたらもっと簡単に終わったんだけどな。」

愚痴を溢すと

「ほう……協力しようとしたのか？」

「ええ、ていうかそれがこの試験の正解なんでしょう？」

俺の正解発表にカカシは少し驚く。

「……答えが分かってたのか？」

「はい、普通に考えて上忍相手に下忍が個人で勝てる訳無いですからね。ワザとチームワークを乱すような条件つけてたし、ちよつと考えたら分かりますよ。」

「……確かに分かっていたらしいな。ワザとチームワークを乱したのも見抜いてるようだし。」
感心したように俺を見る。

やり過ぎかな？でもこの程度なら下忍でも十分出来るし、分かるだろうから大丈夫だろう。

「ナルトは協力要請する前に独走して捕まるし、サクラはサスケ君と組むと聞かないし、そのサスケには足手まといと断られるし。」

だから最終的に自分でやるしかないからとっておきの影分身を使って自分でチームプレイをしたんですよ。何とか成功しましたけど。」
再びスズを持ち上げる。

これで合格だろう。後はナルトに弁当食べさせれば文句無いだろうし。

「何とも……大変だったんだな。」

カカシに同情された目で見られた。

それもこれもこの班に選ばれたくせいだけどな。俺はモブになりたかったのに今では何か準主人公的な活躍してねえか？
やっぱり普通に戦って負けとけば良かったかな？

ジリリリリリッ！！

目覚まし時計が鳴った。

俺はカカシと共に丸太の前に戻った。

そこには丸太に縛られてるナルトと座り込んでいるサスケとサクラがいた。

「おーおー、腹の虫が鳴つとるね…君達。

ところで、この演習についてだが、ま！お前らは忍者アカデミーに戻る必要も無いな。」

カカシの言葉に合格したと思ったのか3人とも喜色の色が浮かぶ。

「じゃあさ！じゃあさ！つてことは4人とも…」

ナルトが確認のために聞こうとしたら

「……そうカズト以外の3人とも…忍者をやめろ！」

「！！！！？」

いきなりの勧告に3人とも絶句する。

「忍者やめろつてどーゆーことだよオ！！

そりやさ！そりやさ！確かにスズは取れなかったけど！ていうか何でカズトだけ合格なんだよ！！」

怒りのためか普段の口調を忘れるナルト。

「だって俺、スズ取ったし。」

スズを3人に見せる。

それを見て3人は驚愕する。

「カズト、スズ取れたの！？」

サクラが信じられないようなものを見るように聞いてくる。

「ああ、と言つてもほとんど運だつたけどな。」
結構ギリギリだったしな。カカシが驚かなければ無理だった。

「……確かにカズトはスズを取つたみたいだから合格で良いとして、なんでやめるまで言われなくちゃなんねエんだよ!!」
縛られながらナルトが暴れる。

「どいつもこいつも忍者になる資格もねエガキだつてことだよ。」
カカシが言い切るとサスケがキレたのかカカシに突っ込んで行った。しかし逆に上に乗られて頭を踏まれている。

「!!サスケ君を踏むなんてダメー!!!」
泣いてんのか怒つてんのか分からない顔をしてサクラが抗議する。それをカカシが睨み付けて

「お前ら忍者なめてんのか?あ!?

何の為に班ごとのチームに分けて演習やってると思つてる。」
「え!?!どーゆーこと?」

サクラは未だ分からない様子だ。お前は頭しか取り柄無いんだからここで分からないなんて存在価値無いぞ?

「つまり……。お前らはこの試験の答えをまるで理解してない……。」

「答え……!?!?」

ナルトはまだ分かつてないのか首をかしげる。

「そつだ、この試験の合否を判断する答えだ。」

「だから……。さつきからそれが聞きたいんです!!」

サクラは何故か開き直る。

「……………つたく。」

カカシが再度呆れる。

「あ……も……!だから、答えて何なんだつてばよオ!?!?」

「チームワークだよ。」

俺が答えた。

「！」
3人ともその単語に反応する。
「1人では無理だが、4人全員ならスズを取れただろう……。」
「なんでスズ3つしかないのにチームワークなわけエ！？4人で必死にスズ取ったとして1人我慢しなきゃならないなんてチームワークどころか仲間割れよ！」
俺の言葉にサクラが反論する。

「当たり前だ！これはわざと仲間割れするよう仕組んだ試験だ。」
カカシの言葉にサクラとナルトは「え！？」と反応する。

「この仕組まれた試験内容の状況下でも、なお自分の利害に関係なくチームワークを優先できる者を選抜するのが目的だった。だからカズトは合格したんだ。」

その言葉にサクラとサスケは思い出す。カズトが協力関係を結ぼうと言ってきたことを。ナルトは分からないが。

「それなのにお前らときたら……。」

…サクラ：お前は目の前のナルトやカズトじゃなく、どこに居るのが分からないサスケのことばかり。

ナルト！お前は一人で独走するだけ。

サスケ！お前は3人を足手まといだと決めつけ個人プレイ。」

各々思い当たる節があるので何も言えない。

「任務は班で行う！たしかに忍者にとつて卓越した個人技能は必要だ。が、それ以上に重要視されるのは「チームワーク」

チームワークを乱す個人プレイは仲間を危機に落とし入れ、「殺す」ことになる。

……例えばだ……。」

カカシがポーチへと手を伸ばし、クナイを掴みサスケの首に添える。

「サクラ！ナルトを殺せ、さもないとサスケが死ぬぞ。」

カカシの行動にサクラは動揺し、ナルトは「え！！？」とビビっている。

「と…こうなる。人質を取られた挙げ句、無理な2択を迫られ殺される。」

任務は命がけの仕事ばかりだ！」

カカシはクナイをサスケの首から外し、サスケを解放して立ち上がる。

サクラは嘘だと分かりホツとして、ナルトはもしかして殺されるんじゃない？と思っていたのかかなりホツとしている。

カカシは丸太の後ろにあつた石碑に近付く。

「これを見る、この石に刻んである無数の名前。これは全て里で英雄と呼ばれている忍者達だ。」

それを聞いてナルトが反応する。

「それぞれそれーっ！！それーっ！！」

オレもそこに名を刻むってことを今決めたーっ！！

英雄！英雄！犬死になんてするかってばよー！！」

ナルトが高らかに自殺宣言をした。

確かに名を刻むだけならさほど難しくは無いな。

「…が、ただの英雄じゃない…。」

「へー！えー！。じゃあどんな英雄達なんだってばよオ！」

「……。」

「ねえ！ねえ！」

ナルトが笑顔で聞く。

「任務中、殉職した英雄達だ。」

カカシの言葉を聞くと流石のナルトも黙る。サクラやサスケも同様だ。

「これは慰霊碑。この中にはオレの親友の名も刻まれている……。」「カカシが沈鬱な感じで言う。」

「…お前ら…！最後にもう一度だけチャンスをやる。ただし昼からはもつと過酷なスズ取り合戦だ！

挑戦したい奴だけ弁当を食べ、ただしナルトには食わせるな。」

「え？」

ナルトが言う。流石に朝昼飯抜きはキツイからな。

「ルール破つて一人昼めし食おうとしたバツだ。もし食わせたりしたらそいつをその時点で試験失格にする。

ここではオレがルールだ。分かったな？

それとカズト、お前はめしを食ったら帰って良い。明日から任務だ。

「

そう言い、カカシは瞬身でどっか行った。

「へっ！オレつてば別にめしなんか食わなくつたつてへーきだつ…」
強がりと言ってる途中でぎゅるるると腹の虫が鳴く。

サクラやサスケが飯を食ってる最中に俺は包みを開け、ナルトに差し出す。

「…！」

ナルトとサクラが反応する。サスケはどうしようか迷っていたようだから別に驚いていない。

「ちょ…ちよつとカズト！さっきカカシ先生が…！」

サクラが止めに入るが。

「さあ、俺はダメなんて言われて無いし、それにこれで失格になったらまたスズを取るさ。

それに、これもチームワークだろ？」

さっさと帰りたいので手早く終わらせる。普段の俺なら死んでも使えそうに無い言葉だ。

「…そうだな。今はアイツの気配はない。昼からは全員でスズを取りに行く。」

サスケも弁当をナルトに差し出す。

それを見てサクラは弁当を名残惜しそうに一瞥し、ナルトに差し出す。

それを見たナルトは笑顔で

「へへへ、ありがと……。」

と礼を言う。

さあ縄を切ろうとしたらボン！！と目の前にデカイ煙りが上がり

「お前らああああ！！」

カカシが大声上げながら出てきた。

「！」「うわあああ！！」「きゃああああ！！」「……。」

各々声を上げる。俺は無言だけど。

そしてカカシが近付き笑顔で「ごーかつく！！」と言う。

「え！？」「は？」「……。」

全員固まる。

「合格！？なんで!?!」

サクラが聞くと

「お前らが始めてだ。」

今までの奴らは素直にオレの言うことをきくだけのボンクラどもばかりだったからな。

……忍者は裏の裏を読むべし。忍者の世界でルールや掟を破る奴らはクズ呼ばわりされる。

……けどな！仲間を大切にしない奴はそれ以上のクズだ。」

じゃあ俺はクズ認定か？ヒデエ。

ただ自分の命を最優先してるだけなのに。

「アハ……」「……。」

サクラは喜び、ナルトは呆然、サスケは知ってたかのような態度を取り、俺は弁当を食ってる。だってこの後帰るだけだし。

「これにて演習終わり、全員合格！！」

よーしい！第7班は明日より任務開始だア！！」

カカシがサムズアップしながら決め台詞を言ってる。

「やったああってばよオ！！オレ、忍者！忍者！！忍者！！！！」

ナルトが歡喜に震えていると

「帰るぞ。」

とカカシやサスケ、サクラは縛られてるナルトを放置して帰る。

「って！どーせこんなオチだと思ったってばよオ！縄ほどけエー

！！」

ナルトが絶叫している。五月蠅いので放置しようかとも思ったがその方が五月蠅いから縄を切ってやった。

「おオ！サンキューカズト！やっぱお前だけは良い奴だってばよ！

！！」

ナルトは喜びながら3人の下に向かう。

ようやく終わったか…。

とりあえずアイツ等には好印象を与えたい良しとするか。

敵対しているより良好な関係を築いてる方が色々やりやすい。

次は波の国か…。いきなり死亡フラグじゃん。

13 最早Bランク任務

正式に下忍になって数日経った。

現在は広大な山に逃げたペットを探すという非常に面倒な任務の途中だ。

ていうか山に逃げたんなら諦めるよな。飼い主の責任だろ？

なんで俺等が半日以上かけて山の中探しまわんなきゃならん。

『目標との距離は？』

無線機からカカシの声が聞こえた。たかだかペット探しに無線機なんて必要か？

『5m！いつでもいけるってばよ！』、『オレもいいぜ』、『私も』
、『…俺も』

一応返事しとく、別に4人も待機する必要は無いと思うが？

『よし！やれ』

カカシからの捕獲命令が出たので全員で一斉に猫に襲いかかる。

「うりゃああ！！」

つつかまえたあーっ！っ！！！！」

ナルトが右耳に不自然にリボンがついているネコを捕獲した。

「ニャー！！！！」

ネコは必死に逃げようとする。余程帰りたくないのだろうか…。

『右耳にリボン…。目標のトラに間違いないか？』

カカシが念のため聞いてくる。

「ターゲットに間違いない。」

それにサスケが答えた。

『よし、迷子ペット「トラ」捕獲任務終了！』

カカシが疲れたような声で告げる。カカシがやるような仕事じゃないからな。

暴れるトラを連れて任務終了を報告するため里に戻った。

そこには地獄があった。

「ああ！私のかわいいトラちゃん。死ぬほど心配したのよオ〜」。
トラの飼い主のいかにも中年女性のようなマダム・しじみにトラは
頬擦りされてる。

トラは「ニヤ〜！〜！」と泣いてるが…。

だから逃げたのか。

「…さて！カカシ隊、第7班の次の任務はと…。

ん〜！…老中様のぼつちゃんの子守りに隣町までのおつかい、イ
モほりの手伝いか…。」

火影がスケジュールを見ながら言う。

イモほりやおつかいはまだしも、子守りは勘弁してくれ。ガキの世
話なんかして泣かれたら殴って泣き止ませそうだ。

「ダメ〜！〜！〜！そんなのノーサンキュー！！

オレってばもつと、こうスゲー任務がやりてーの！他のにしてエ
！！！！」

ナルトがケチつける。

たかだか下忍の分際で火影に反論するなんてあり得ないんだけど。
ていうか任務を拒否できる忍者なんかいねエし。

「バカヤロー〜！！お前はまだペ〜ペ〜の新米だろ〜が！

誰でも初めは簡単な任務から場数を踏んでくり上がってくんだ！」

何故かいるイルカに怒鳴られる。お前アカデミーの仕事はどうした？

「だってだって！この前からずっとシヨボイ任務ばつかじゃん！！」
それでもナルトは反論する。お前は何？いきなりAランクの暗殺任
務でもしたいの？スゲー向上心だな。

「いいかげんにしとけ、こら！」

流石にカカシが止める。殴ってだが。まあ、体罰が普通の世界だか
ら特に問題無い。

その後は火影が任務の大切さやランクについて教える。そんなのア

カデミーの時に教えとけよ。

「分かった。お前がそこまで言うならCランクの任務をやってもらう。」

「……ある人物の護衛任務だ。」

「遂に初めての死亡フラグが来たか。出来るならやりたくないが立場拒否など不可能だ。」

「だれ？だれ？大名様！？それともお姫様！？」

ナルトはワクワクしながら聞く。そんなにやりたいのか？

国家存亡をかけたSランク任務を……。

「そう慌てるな、今から紹介する！入ってきてもらえますかな……。」

「火影が声をかけると扉を開け、酒瓶片手の両腕が傷だらけの老人が現れた。と言っても足腰はしっかりし、肌も若々しく筋肉もそこそこある。」

「なんだア？超ガキばっかじゃねーかよ！」

メンバーが不満なのか酒を飲みながら俺等を見る。

「……とくにそこの一番ちっこい超アホ面、お前、それ本当に忍者かあ！？お前エ！」

「アハハ、誰だ？一番ちっこいアホ面って……。」

ナルトが俺達を見る。ちなみに俺が一番背が高い。

そして自分が一番低いと分かったナルトは

「ぶっ殺す！！！」

依頼人に突進しようとしたが

「これから護衛するじいさん殺してどーするアホ。」

カカシが襟を掴んで止める。

「わしは橋作りの超名人、タズナというもんじゃわい。」

わしが国に帰って橋を完成させるまでの間、命をかけて超護衛して

もらおう！」

「ランク分の報酬しか寄越さねえ癖に偉そうに。てめえの娘でも売って依頼料稼いで来いよ。」

各自一旦家に帰り装備を整える。

両親にも「任務で里を出る。しばらく帰れない。」と伝えた。

まあ、両親共忍者だから「分かった、注意するんだぞ。」ぐらいで終わった。もう少し心配しろよ。

これから中忍や上忍と戦いにいくんだぜ？

旅行用のカバンに着替えや食料、嗜好品などを積める。

コピーを使えば荷物なんかいらないけどバレるからちゃんと必要な道具を積める。

荷物を持つなんて久しぶりだな。

そして門に向かう。既に全員いたので驚いた。まだ集合時間前なのに。

「出発ーっ！！」

ナルトがハイテンションで叫ぶ。

「何をしゃいじゃってんのアンタ。」

サクラが白けた目を向ける。

「だってオレってば一度も里の外にでたことねエーからよ。」

ナルトは辺りをキョロキョロしてるまるでお上りさんだ。まあ、お前が里から出れる訳無かったからな。ある意味歩く戦略兵器だし。

「おい！……本当にこんなガキで大丈夫なのかよオ！」

タズナがナルトを見て不安がる。何せ忍に命を狙われてるのに護衛がこんなガキ丸出しだからな。

「ハハ…上忍の私がついてます。そう心配いりませんよ。」

カカシは責任者として依頼人を安心させる。大変だよね大人って。

しかしそんなカカシの苦勞が分からないナルトは

「コラ、じじい！あんまり忍者をなめんじゃねエーゼ！オレってばスゲーんだからなあ！」

根拠の無い自信を見せるナルト。

「いずれ火影の名を語る超エリート忍者！…名をうずまきナルトという！！覚えとけ！！！」

「火影つていやー里一番の超忍者だろ？お前みたいのがなれるとは思えんが？」

タズナは酒を飲みながら軽く笑う。

「だーうつさい！！火影になるためにオレってばどんな努力もする覚悟だつてーの！！オレが火影になったらオツサンだつてオレのこと認めざるをえねエーんだぞ！！！」

「認めやしねーよガキ…。火影になれたとしてもな。」

それを聞いて再びナルトはぶちギレル。

「ぶっ殺ーす！！！」

「だからやめるバカ、コイツ。」

そして再びカカシに止められる。学習しねえのかてめえは。

しばらく歩き、不意に

「ねえ…タズナさん。」

「何だ？」

「タズナさんの国つて「波の国」でしょ？」

「それがどうした？」

「ねえ…カカシ先生…。その国にも忍者っているの？」

いたらわざわざ木の葉に依頼しに来る訳ねえだろ？

「いや、波の国に忍者はいない…が、たいていの他の国には文化や風習こそ違うが隠れ里が存在し、忍者がいる。」

カカシによる忍び五大陸や火影についての説明が始まった。

ていうかその程度なら町の図書館で調べられるレベルだろうが。そんなのも知らねえのかよ。

「へー、火影様ってすごいんだあ！」

サクラがワザとらしく言う。心の中で絶対えバカにしてるな。

「……お前ら、今火影様疑っただろ。」

カカシが見事見抜く。3人ともギクツと反応する。

「ま…安心しろ、Cランクの任務で忍者対決なんてしやしないよ。」

カカシがサクラの頭に手を置いて安心させる。

「じゃあ外国の忍者と接触する心配はないんだア……。」

サクラは安心する。

「もちろんだよアハハハ！」

カカシが笑うがタズナは微かに反応した。

それをサスケが見つけたが確信が無いのか黙ってる。

また歩いていると遂に最初の死亡フラグ、水溜まりを見つけた。

にしてもマジで目立つな。何で水溜まりなんかにしたんだろう。地面や虫にでも化ければ良かったのに。

もしかして水溜まりにしかねないとか？霧の忍者だからな。

カカシは水溜まりを一瞥する。

「あれ、良いのかよ？」

俺がカカシに近づいて聞くが

「うん？どうした？カズト。」

と惚けやがった。

何をしたいのか分かった俺は頷いて離れる。カカシは満足気に俺を

見ていた。

そして水溜まりを通り過ぎたら徐々に二つの気配が生まれてきた。

そして後ろから1人が飛んで来た。

そいつは鎖の部分が刃物になっている鎖を持ち、カカシに巻き付ける。

もう1人も鎖を持ち「一匹目。」という片方の声と同時に鎖を引く。鎖に巻き付けられていたカカシはバラバラになる。

まあ、幻術で本物に見せかけているだけで実際はただの丸太だけだな。

流石上忍、俺でも本当に死んだように見える。今は幻術を解除したから丸太に見えるが。

「キヤーーー！！」、「カカシ先生エー！！」

サクラとナルトは突然の事に混乱して止まっている。

そして敵は瞬時にナルトに近付き「2匹目。」とカカシ同様、鎖で巻こうとしたがその前にサスケが反応してジャンプして手裏剣を飛ばす。

その手裏剣はナルトを縛ろうと円状に飛んでいる鎖を木に縫い付け、更にクナイを投げて手裏剣の穴に通して木に刺して固定する。

敵は鎖を引っ張るが動かない。

サスケはその隙に敵2人の爪がついた籠手のような装備に飛び乗り、引っ張ろうとする動きを止め、敵の腕を掴みながら両足で2人の顔を蹴る。

蹴られた2人は「グッ！」とうめき声を上げた後に邪魔になっっている鎖を籠手部分を回転させてネジ切り、自由になる。

そして別々に狙いを変えた。

背の高い方はタズナの方に、背の小さい方は何故か俺の方に来た。

あれ？原作ではナルトを狙うんじゃないの？それとも別に何もしなくても終わると思ってポーツとしてたから俺に狙いを変えた？

敵は俺の疑問なんて考慮してくれねえから接近してきた。どうやら完全に俺に狙いを定めたらしいのでクナイを持ち、迎え撃つ。

まずは手裏剣を敵の顔めがけて投げる。

案の定、爪で手裏剣を弾く。しかしその瞬間顔が爪で隠れるからそ

のスキをついて死角が出来た方向に逃げて後ろを取る。

そして敵が振り返らない内に首を落とした。最初はチャクラの形態変化で切り落とそうか悩んだが別にコイツ等ならクナイで十分かと思ひ、クナイでハネた。結果は成功。

首は別な方向に飛んで胴体はそのまま倒れた。

あっちの方ではサスケがサクラとタズナを守ろうと盾になろうとしていたが、その前にカカシがリアットかまして敵を昏倒させた。

「ナルト…すぐに助けてやらなくて悪かったな。ケガさしちゃったな。……お前がここまで動けないとは思ってなかったからな。」

とりあえずサスケ、カズトよくやった。

カズトはほとんど1人で仕留めてたが。」

「まあね、ていうか出てくるの遅いですよ。」

カカシに軽く言い返す。

人を殺しといて平然としている俺をカカシが見ている。やっぱりいきなり殺すのは不自然か？

でも忍者として間違っつて無い筈だ。片方生きてんだから情報は得られるし。

カカシサイド

担任だったイルカの報告書によると元々カズトは実力を隠していたらしい。まあ成績を見る限り安定し過ぎだし、一定の法則により成績が上下しているから実力を隠しているのは納得出来る。

そしてそれが確信出来たのはあの演習の時だ。

カズトは最後まで何ら行動を見せず、最後に残るはカズトだけになり、このままではラチがあかないと思ひ、わざわざカズトが隠れて

いる方向に向かったらトラップにあった。

最初は丸太やクナイだけのアカデミー上がりでも思いつくトラップかと思いきや、そのクナイには起爆札が仕込まれていて少し行動が遅れていたら大怪我を負っていただろう。

それをかわし、次は直接戦闘になったら体術や忍具の使い方は下忍でもトップクラス、速さではサスケをものいでいた。

時間も無かったし、さっさと決めるかと下忍では無理な速さで後ろに周り、手刀をいれようと思ったならそれは影分身で、いつの間にか背後にいた本体にスズを取られていた。

影分身に殺気を出させて本体の気配を誤魔化していたのだろう。

それだけで下忍とは思えない戦術だった。実戦ならもしかしてオレを殺れたかも知れない。

そして最後にさっきの戦闘だ。

ワザと死んだ振りをして敵がどう動くか確かめていたら流石サスケは初の実戦にも関わらず冷静に動き、見事ナルトを守った。

ナルトはまあ……何にもせず、ただ呆然としていただけだったな。

サクラはちゃんと最後には依頼人を守ろうとした。

ここまでは予想通りだったが、1つだけ予想を外した。

カズトが敵の忍びを殺したことだ。流石のカズトも殺すのは躊躇うだろうと思っていたが何の躊躇いも無くアツサリと殺した。

殺した後に軽く話しかけたが普通に軽口を叩いて来る。精神状態も何ら変化無しか…。

明らかにカズトの実力は下忍ではトップクラスだろうし、速さや決断力、実行力は既に中忍クラスだ。

何故実力を隠してたんだ？あの実力ならアカデミーでもサスケを軽く抜いてトップになれただろうに。

まあ、良い。今はそれよりも重視しなくてはならない事がある。

カズトサイド

「よオ…ケガはねーかよビビリ君。」

わざわざサスケがナルトを挑発する。何で挑発するかねえ。興味が無いなら無視するなりすれば良いのに。

「！！！！」

ナルトがまたぶちギレそうになったが

「ナルト！ケンカはあとだ。」

こいつらの爪には毒が塗ってある。お前は早く毒ぬきする必要がある。傷口を開いて毒血をぬかなくちゃならない。あまり動くな、毒がまわる。」

ナルトに注意した後にはタズナを睨み付けて

「タズナさん。」

「な…何じゃ…！」

カカシが話しかけるとタズナは明らかに動揺しているような口調になる。

「ちょっとお話があります。」

そう言った後にとりあえずまだ生きてる敵を木に縛りつけた。

「こいつら霧隠れの中忍つてとこか……。こいつらはいかなる犠牲を払っても戦い続けることで知られる忍だ。」

カカシが全員に説明する。

「…なぜ我々の動きを見られた。」

起きた敵が聞いてくる。マジで聞いているのかよ？もしかして下忍か？

「数日雨も降ってない今日みたいな晴れの日に水たまりなんてないでしょ。」

カカシの全て分かっていたという説明にタズナが噛みついた。

「あんだ、それ知ってて何でガキにやらせた？」

「てめえが文句言うなや。てめえが正規の依頼をちゃんとしてれば上忍が行ってた任務だったのに。」

「私はその気になればこいつぐらい瞬殺できます。…が…私には知る必要があったのですよ…。この敵のターゲットが誰であるのかを…。」

改めてタズナを見る。

「？どういうことだ？」

「つまり、狙われているのはあなたなのか、それとも我々忍のうちの誰なのか…ということですよ。」

我々はアナタが忍に狙われているなんて話は聞いてない。依頼内容はギャングや盗賊など、ただの武装集団からの護衛だったはず…。これだとBランク以上の任務だ…。依頼は橋を作るまでの支援護衛という名目だったはずですよ。」

「……………」
「敵が忍者であるならば…迷わず高額な「Bランク」任務に設定されていたはず…。」

「なにか訳ありみたいですが依頼でウソをつかれると困ります。これだと我々の任務以外ってことになりますね。」

カカシの説明を聞き、さつきみたいな事がまた起きるかも知れないのでサクラは怖くなり

「この任務、まだ私達には早いわ…。やめましょ！」

ナルトの傷口を開いて毒血を抜くにも麻酔が要るし…里に帰って医者に見せないと…。」

ナルトを口実にして里に帰ろうと促す。それが一番賢い選択だ。出来るなら俺もそうしたい。でもそうならないのがこの世界だ。

「んー…。」

カカシはナルトを見ながら考える。

「……………」
「こりゃ荷が重いな！」

ナルトの治療ついでに里へ戻るか。」
カカシはそう決断した。担当上忍として正しい選択だ。さつきより強い敵が現れたら誰か死んでもおかしく無い。そもそもランクが違いすぎる。下忍がやっていいランクでは無い。

空気的には帰還一色だが、ここに異を唱える者が現れた。我らが主人公様だ。

ザクツといきなりナルトが傷にクナイを刺した。

「!!」、「!!」

全員が驚愕する。俺は「あーあ。」と言っただけだが。

「ナルト、何やってんのよ!アンタ!!」

サクラがナルトの奇行を咎めるがナルトは何故か笑顔を浮かべて

「オレが、このクナイで……。」

オッサンは守る。任務続行だ!!!」

何を偉そうに。

たかだか傷口を刺して毒血を抜いただけで何を意気がってんだ?お前は何も変わってない癖に。

コイツマジ意味分かんねえ。

何で忍者やってんだろう?

…たまたま忍者の里で生まれたからだろうな。

もし条件が同じで侍の国に生まれてたら侍になっていただろうし。環境が悪すぎたんだな。

せめて侍だったらコイツの考えはあながち悪く無いが、忍者には最悪だ。

正々堂々戦い、勝機が薄く、断れる任務を敢えてやるなんて忍者の考え方じゃない。

まあ、少年マンガでリアル忍者じゃ人気出ないからな。
忍者の仕事の大半は情報収集や雑用だ。
暗殺とかはほとんど無いからな。

14 完全にAランク以上

あの後、タズナから依頼の真相を聞かされ、下手な泣き落としみたいなのを聞かされて忍者の癖にお人好しのカカシは依頼を受託。

Cランクから強制的にAランク任務に上がった。

ぶっちゃけ波の国が滅ぶとかどうでも良いじゃん。何で他国の存亡危機を救わなくちゃならない。

鬱だ……………。

陸を歩き、波の国への国境に近付いたら今度はバレないようにエンジンを手漕ぎ船で入国する。

まさか不法入国者みたいに入国するとはな。

「うひょう！でけエー！！！」

見えてきた建設中の橋を見てナルトが叫ぶ。

そんなにデカイか？この世界の橋にしてはデカイとは思うが、現実世界やハンターハンターの世界にはこの何倍もの橋はざらにあったからそんなに驚く程では無い。

「こ…こら！静かにしてくれ！」

この霧に隠れて船出してんだ。エンジン切って手漕ぎでな。ガトーに見つかったら大変なことになる。」

船主がナルトを注意する。

ガトーねえ。

確かにガトーの会社、ガトーカンパニーは超巨大企業だけどやり方があまりにもマフィアじみてて長続きしないのは見え見えだ。

バカだよ。

人を従わせるには恐怖は最適だけど、恐怖ばかりでは人は逆らう。

恐怖を与えたら飴も与えないと人は従わない。

それにやり方が中途半端だしな。
反乱指導者を殺すのは良いが、その家族も始末しないと反乱の温床は残る。

ついでに家族も殺しときゃこの依頼も無かつたろうに。

しばらく橋沿いに進んでいたら波の国が見えてきた。

見つかる事を避けて上陸するのはマングローブのある街水道を通る事にしたようだ。

マングローブ地帯を抜けて古い木の栈橋に到着した。

「オレはここまでだ。それじゃあな、気をつける。」

「ああ、超悪かつたな。」

船主はオールを外してエンジンをかけて、一目散に逃げていった。
何で逃げる時はエンジン使うん？

最後までバレないように手漕ぎにすれば良いのに。

「よーしいー！ワシを家まで無事、送り届けてくれよ。」

偉そうに言いやがる。どうせならてめえの首を土産にガトーに会った方が金になるだろうに。

「はいはい。」

カカシは面倒くさそうに返事する。何せ次はさっきみたいな雑魚とは違い、上忍だからな。

「そこかぁー！っ！！」

キョロキョロしてたナルトが突然大声を叫びながら手裏剣を草むらに投げる。せめて投げるなら無言で投げろよ。

しー！んつと何も起きない。

「フ…なんだネズミか。」

ナルシストみたいに格好つけるナルト。

「って、何かっこつけてんの！！そんなとこ初めから何もしやしな

いわよ！」

大声で注意するサクラ。お前が一番うるせーよ。

「コ…コラ！お前がやたらめったら手裏剣使っな…。マジでアブナイ！！！」

カカシが注意するがナルトは聞いてない。また何かを探しはじめていた。

その時、何か視線を感じた。

カカシも反応したがその直後にはまたナルトが

「そこかアーーー！！！」

また手裏剣を草むらに投げた。確かにその方向から視線を感じたから間違っつて無い。何気にスゲエな。

「だからやめろー！！！」

「ぐがア！！！」

二度目にぶちギレたのかサクラがナルトを殴る。

「ホ…ホントに誰かがこっちをずっと狙ってたんだってばよ！」

「はい、ウソ！」

ナルトが真実を言うがサクラは信じない。

カカシは視線が気になったのでナルトが手裏剣を投げた辺りを探すと、そこには手裏剣にビビっていた白い毛並みのウサギがいた。

「ナルト！なんてことすんのよオ！」

サクラはウサギにした事を怒る。そんなの気にすんなよ。

しかしカカシは警戒を更に強めた。あれは変わり身用のユキウサギだからな。

その瞬間、後方からブン！ブン！と何かが飛んで来る音が聞こえたので直ぐ様伏せる。

その直後にカカシが

「全員ふせる！！！」

と命令する。数瞬後にはデカイ何かが飛んで来た。

全員間一髪避け、その飛んできた物は木に刺さり、デカイ包丁みたいな刃物と分かった。

そしてその刃物の柄に上半身裸で口元に包帯を巻いた男が現れた。一目でヤバい事が分かる。今まで相手にしてきた国境警備の忍じや話にならない。

「ヘー、こりゃこりゃ、霧隠れの抜け忍、桃地再不斬君じゃないですか。」

暗部のビンゴブックに乗ってる有名人だからな。

空気の読めないナルトは無謀にも再不斬に挑もうとするが直ぐにカシが止める。コイツは洒落にならないからな。

「邪魔だ、下がってるお前ら。こいつはさっきの奴らとはケタが違う。」

そしてカカシは額当てを触り

「このままじゃあ…ちとキツイか…。」
と写輪眼の準備をする。

「写輪眼のカカシと見受ける…。…悪いが、じじいを渡してもらおうか。」

再不斬とカカシがにらみ合う。何で俺こんなところにいるんだろう？
こういう危ない事はしないように生きてたのに。

「卍の陣だ。タズナさんを守れ…お前達は戦いに加わるな。それがここでのチームワークだ。」

カカシが命令する。何でこの爺を守んなきゃいけねえんだよ。置いていって逃げれば良い。

「…再不斬、まずは…オレと戦え。」

カカシが額当てを上げて左目を出す。そこには3つの勾玉みたいな紋様が浮かんでる目が現れた。

出来るなら写輪眼もコピーしたいがそれは不可能だ。

どうやら術なら血継限界でもコピー出来るが、写輪眼や白眼みたい

な人体の血継限界はコピー不可らしい。

死体の目ならコピー出来そうだが、その目を俺の物にするなら移植しないといけない。

それに、俺はその血継限界の血筋じゃないから拒否反応が酷いだろう。

カカシも写輪眼を使うと物凄い疲れるらしいし。そこまで苦勞するならいらない。

「ほーほー、噂に聞く写輪眼を早速見れるとは…光荣だね。」
再不斬がそんなのこれっぽっちも思っていない癖に言う。

「さつきからシャリンガン、シャリンガンって…何だそれ？」

ナルトがわざわざ聞く。それ今聞かなきゃダメか？後で良いじゃん。後があればな。

あまりにウザかったのかサスケが説明した。

「クク…御名答。ただそれだけじゃない。それ以上に怖いのはその目で相手を見極めコピーしてしまうことだ。

オレ様が霧隠れの暗殺部隊にいた頃携帯していた手配帳にお前の情報載ってたぜ。それにはこうも記されていた。

千以上の術をコピーした男…コピー忍者のカカシ。」

わざわざ説明するなんて意外と善人だよね。ていうかこの時点で白を使えば簡単にタズナを仕留められるぜ？

カカシはお前から目を離せないんだから。何でこの世界の忍者は微妙に正々堂々に拘るんだろう？

「さてと……お話はこれぐらいにしとこーぜ。オレはそのじじいを殺さなくちゃならねえ」

その言葉に俺達4人はタズナを取り囲み、守る体制を取る。

「つつてもカカシ！お前を倒さなきゃならねーようだな。」

そう言った直後に包丁を引き抜き、水の上に移動して印を結んでる。

「あそこだ！！」

「しかも水の上！？」

ナルト、サスケ、サクラは驚く。人が水の上に立ってるんだからな。「忍法…霧隠れの術。」

その言葉の直後に再不斬の周りの霧が急に濃くなり、消えた。

「消えた!？」

「まずはオレを消しに来るだろうが…。……桃地再不斬、こいつは霧隠れの暗部で無音殺人術として知られた男だ。

気がついたらあの世だったなんてことになりかねない。オレも写輪眼を全てうまく使いこなせるわけじゃない…。お前達も気を抜くな!」

カカシがわざわざ説明する。だったら喋るな。と命令しとけよ。深い霧の中で音を立てるのは自殺行為。まあ、こいつらには無理だろうが。

「どんどん霧が濃くなっていくってばよ!」

ほらやつぱり。

「8ヶ所。」

「!?!え？」

なっ…何なの!？」

「咽頭、脊柱、肺、肝臓、頸静脈に鎖骨下動脈、腎臓、心臓…。…

さて…どの急所がいい?クク…。」

脳は無いのか?一番手っ取り早いと思うが。

その言葉が終わった瞬間、猛烈な殺気が襲ってきた。

まあ俺は様々な世界で殺気を受けて来たからそこまでビビらない。

他の3人は震えてるがな。

「サスケ…安心しろ。お前達はオレが死んでも守ってやる。

オレの仲間は絶対殺させやしな!いよ!」

カカシが軽く言っつてサスケを安心させる。

「それはどうかな…。?」

いつの間にか再不斬が俺達とタズナの間にはいた。

「終わりだ。」

再不斬がタズナを殺そうと包丁を振ろうとしたがその前にカカシが再不斬の腹にクナイを刺す。

しかしその腹から流れるのは血では無く水。

そしてまたいつの間にか再不斬がカカシの後ろにいた。

「先生！！後ろ！！」

腹を刺された再不斬が水になり、ナルトの言葉にカカシは反応しようとするがカカシは胴体を真つ二つにされる。

「ギャー！！！！」

それを見てサクラは叫ぶ。

しかしそのカカシも水に変わり、再不斬の背後を取り、クナイを首筋に当てる。

「動くな……」

何で声かける？何も言わずに首を切れば良いのに。

「終わりだ。」

「ス……スッゲー！！！！」

「ハハ……」

ナルトやサクラも安心する。しかし

「クク……」

再不斬は笑う。自分が圧倒的有利なままなように。

「ククク……。終わりだと……。分かってねエーな。」

…サルマネごとときじゃあ……このオレ様は倒せない。絶対にな。」

「クク……しかしやるじゃねエーか！あの時すでに……オレの水分身の術はコピーされてたって訳か……」

分身の方にいかにもらしいセリフをしゃべらせることで……オレの注意を完全にそっちに引きつけ、本体は霧隠れで隠れてオレの動きをうかがってたって寸法か。」

「……。」

「けどな……」

オレもそう甘かぁねーんだよ。」

また再不斬が後ろにいて前にいた再不斬は水に変わった。

「そいつも水分身ー!!!?」

ナルトが再び叫ぶ。

再不斬が包丁を振り回し、カカシを切断しようとするがカカシはそれを避ける。

再不斬は包丁の回転を利用してカカシに蹴りを入れる。カカシもそれは避けられなかったのか食らい、海にぶっ飛んだ。

再不斬は追撃しようとするが足に痛みを感じ、見てみるとまきびしがバラまかれていた。

「くだらねエ。」

再不斬は瞬身を使いカカシの元に移動する。

「!せんせー!!!」

ナルトが叫ぶ。お前叫ぶしか脳が無いのか?

カカシは水から上がろうとしてるが何故か水がまとわりつく。

「フン…バカが。」

再不斬は印を結び、水牢を作り、カカシを閉じ込めた。

「!!!なに!?!」

カカシが驚愕する。

アホか…。水遁を得意とする忍びを相手に水中に逃げ込むなんて。

「ククク…。脱出不可能の特別牢獄だ!!!お前に動かれるとやりにくいんでな。」

…さてと…カカシ、お前との決着は後回しだ。…まずはアイツらを片付けさせてもらっせ。」

再不斬は印を結び水分身を作る。

ズズズ…。と水際から再不斬の分身が出てきた。

「!」、「!」

3人とも恐怖の顔色を浮かべる。俺はビビってるように見せかけて少しずつ下がる。

「ククツ…。偉そーに額あてまでして忍者気どりか…。だがな、本
当の忍者ってのはいくつもの死線を越えた者のことを言うんだよ。
つまり…オレ様の手配書にのる程度になって初めて忍者と呼べる…
…お前らみたいのは忍者とは呼ばねエ…。」

そう言つて水分身は消える。そしていつの間にかナルトの前において
ナルトを蹴り飛ばす。

「ナルトオ!!!」

サクラが叫ぶ。死ぬわけ無えだろ？主人公様だぜ。

「だだのガキだ。」

本体が言う。今ので殺しとけば良かったのに。戦いで遊ぶと痛い目
見る。

「ぐつ！お前らア！！タズナさんを連れて早く逃げるんだ！！コイ
ツとやりあつても勝ち目はない！！」

オレをこの水牢に閉じ込めている限りコイツはここから動けない！
水分身も本体からある程度離れば使えないハズだ！！とにかく今
は逃げる！！

カカシが懸命に言う。だからタズナは置いといた方が生存率は多少
上がると思うが？一応目標はタズナだからな。

まあどうせ全員、口封じに殺されるだろうがな。

その言葉に全員が焦る。

特にナルトは恐怖から逃げようとしたが転けた。

そして自分で決った傷跡を見た後、再不斬に踏まれてる自分の額当
てを見る。

うわぁ、何かマンガ的なこと考えてるな。ていうか再不斬もさつさ
と殺れば良いのに。

ナルトは立ち上がり

「うおおおお!!!」

叫び、再不斬に突進する。

そして再びドカ！！と蹴り飛ばされる。

「1人で突っ込んで何考えてんのよ！いくらいきがたつて下忍の私達に勝ち目なんてあるわけ……」

サクラが正論を言っているとナルトは立ち上がり、その手には額当てを持っていた。

「おい……そのマユ無し。」

ナルトの言葉に再不斬が僅かに反応する。気にしてたのか？

「……お前の手配書に新しくのせとけ！いずれ木の葉隠れの火影になる男

木の葉流忍者！うずまきナルトつてな！！」

薄笑いを浮かべながら額当てを結ぶナルト。言ってる事はかっこいいけど行動が伴わなきゃ無意味なんだよ。

「サスケ、カズト！ちよつと耳貸せ。」

「……………え？俺も？」

「何だ？」

サスケが答える。何で俺も一緒なんだよ？

「作戦がある。」

「フン、あのお前がチームワークかよ……。」

「さーて、暴れるぜえ……。」

「……………いやあ、その必要は無いと思う。」

俺の言葉にナルトは

「！？何でだよカズト！？」

と怒る。何故かサスケも同様に。お前もやりたかったのか？いきなりな発言に自分を注目させ

「だつてさ……」

最後まで言い切る前に突然水牢を維持していた再不斬の近くで俺の影分身が飛び上がり、再不斬に向かってクナイを投げる。

「!!!」

急な攻撃に再不斬は避けるために水牢から手を離す。

そして影分身が投げたクナイは再不斬の頬を僅かに擦り、小さいが再不斬に傷を与えた。

「!」、「!」、「!」

3人は驚愕する。

ほんの少しだけの傷とは言え、傷つけられたのがムカついたのか再不斬は影分身に向かって包丁を振りかぶるがその前に水牢から脱出したカカシが手で止めた。

そして影分身は消える。

「カ…カカシ先生!!!」

サクラは純粹に喜ぶ。ナルトとサスケは微妙に俺を睨む。見せどころを取られたせいかな？

「……カズト…作戦見事だったぞ……。」

「…まあ、ナルトが上手く全員の注意を引き付けてくれたおかげですよ。おかげで影分身を簡単に配置出来ましたから。」

後は俺（本体）が突飛な事を言っただけ。今回は俺に注意を引き付け、奇襲した。ナルトのおかげですよ。」

一応ナルトも持ち上げる。本当は霧隠れの術の時に影分身に『完全なる隠匿』を使わせて隠れさせ、タイミングを見計らって解除した影分身で攻撃しただけ。

別にナルトはいなくても良かった。

しかしそんなことは知らないナルトは自分のおかげだと言われて「へへ…それほどでも。」と照れる。

「へっ…カツとして水牢の術をといちまうとはな…。」

「違うな！術はといたんじゃなくてとかされたんだろ。」

カカシの言葉に再不斬はピクつく。

「言っておくが、オレに2度同じ術は通用しない。さて、どうする

？」

「フーン！」

お互いに一斉に離れた。

そして再不斬が印を組み始めたらカカシは写輪眼で見ながら少し遅れたが、段々追いつき、同時に印を組み終わる。

「水遁、水龍弾の術！！」

同時に術を発動した。

そして互いに周りの水が龍のようになりお互い相殺し合う。

その余波が俺達の方にも来た。

「うおお！！」、「キヤーーー！！」、「ぐっ！！」

ザブオ！！と龍の接触地点にデカイ水柱が出来た。

まあこれで水龍弾の術はコピー出来た。久々に大技をコピー出来たから気分良い。まあこれが見たいがためにこの任務も受けたからなそれが無きゃサボるか何らかの理由で任務を休む予定だった。

カカシ達の方を見るとカカシと再不斬が全く同じ動きを取っていた。再不斬にとって物凄い不快だろう。

そして互いに印を結んでいたが、突然再不斬の動きが鈍り、術の発動が遅れた。

その隙にカカシが水遁、大瀑布の術を発動させて再不斬を吹っ飛ばす。

にしてもスゲエ威力だな。まさに天災だ。

これもすっかりコピーさせて貰ったがな。

流された再不斬は木に叩きつけられ、更に両手足をクナイで刺されて身動き取れない状態にされた。

甘いよ、一撃で殺れば良かったのに。

「ぐっ。。。」

「終わりだ。。。」

何故か再不斬に背を向けて枝の上にいるカカシ。意味分かんない。

「…ナゼだ……お前には未来が見えるのか…!？」

再不斬は恐怖が入り交じった目でカカシを見る。

「ああ……お前は死ぬ。」

カカシがクナイを構え、決めようとしたらその瞬間、いきなり細長い針である千本が飛んで来て再不斬の首をザクツザクツと刺す。

再不斬は倒れ込み、動かなくなった。

「フフ：本当だ。死んじやった。」

いつの間にかカカシの反対側の木の枝には仮面をつけた俺達と変わらない年であるう人間がいた。

カカシは瞬身で再不斬の下に移動して首筋に手を当て脈を確認する。念のために首を切り落とせば良いのに。

「ありがとございました。ボクはずっと……確実にザブザを殺す機会をうかかっていた者です。」

白は頭を下げて言う。

内心は腸煮えくり返ってるだろうな。何せ大事なご主人様を殺されかけたからな。

「確か、その面……お前は霧隠れの追い忍だな……。」

「……さすが……よく知っていらっしやる。」

「追い忍？」

ナルトが悔しそうな顔で聞く。

「そう、ボクは抜け忍狩りを任務とする霧隠れの追い忍部隊の者です。」

何も知らない人間なら疑いもしない程落ち着いてるな。

そこでナルトが仮死の再不斬と白を何度も見返す。

白も「？」となる。

「なんなんだつてばよ!!!お前は!!!？」

白を指差してナルトは叫ぶ。全くウザい。

「安心しろナルト、敵じゃないよ。」

カカシが安心させるために言うがナルトは止まらない。

「んなこと聞いてんじゃねーの！オレってば！！」

あのザブザが：あのザブザが殺されたんだぞ！！あんなに強えー奴が：オレと変わんねエガキに簡単に殺されちまったんだぞ！オレ達バカみてーじゃん！

納得できるかア！！」

別にお前が納得する必要は無い。ただの足手まといの分際の癖に。

「ま！信じられない気持ちも分かるが：が、これも事実だ。」

カカシはナルトの頭に手を乗せて諭す。大変だねえ。

「この世界にやお前より年下でオレより強いガキもいる。」

ナルトはとりあえず黙った。納得はしてないようだが。

白は瞬身で再不斬に近付き、手を肩に回して担ぐ。

「…あなた方の闘いもひとまずここで終わりでしょう。ボクはこの死体进行处理しなければなりません。」

なにかと秘密の多い死体なもので…。…それじゃ失礼します。」

また瞬身を使い消えた。

「フリーー。」

カカシはため息をつき、額当てを戻し写輪眼を解除する。

「さ！オレ達もタズナさんを家まで連れていかなきゃならない。元気よく行くぞ！」

カカシの号令にようやく雰囲気に戻る。

「ハハハッ！！皆、超すまんかったのオ！」

ま！ワシの家でゆっくりしていけ！」

タズナが笑いながら言った後にカカシが倒れた。

「なに！？え…！？どうしたの！！？」

「カカシ先生ー！！！！」

全員が慌て出す。もしかして何か大怪我したのか？と心配するが。

「……スマン、写輪眼の使いすぎで体が動かない……誰かおぶって

くれ……。」「
その情けない言葉に誰がカカシをおぶるかで一行は揉め始めたのだ
った。

やれやれ、もしカカシがこんな状態じゃ無かつたら無理矢理にでも
ザブザと白を殺しにかかったのに。

流石の再不斬も仮死状態だから何も出来ないし、白1人ならそこま
で脅威にはならない。カカシ1人で殺れる。

まあ、今は結局身長からタズナがカカシを担ぐ事になり、タズナが
愚痴りながら歩く。

帰らせてえ……。

タズナの家に着き、現在カカシを布団に寝かせた状態だ。

「大丈夫かい？先生！」

タズナの娘のツナミが言う。

「いや……！一週間ほど動けないんです……。」

弱々しく言うカカシ。ピクリとも動かないからな。

「なあーによ！写輪眼つてスゴイけど体にそんなに負担がかかるんじゃないかよ！」

サクラが呆れたように言う。まあカカシはうちは一族じゃないから負担がデカイんだろう。

だから写輪眼をコピーする利点は低い。コピーなら元々出来るし、透視眼は魅力的だがリスクがでかすぎるしな。

「でも、ま！今回、あんな強い忍者を倒したんじゃ。おかげでもうしばらくは安心じゃろう！」

カカシを背負ってきたからか汗を拭きながら言うタズナ。

「それにしてもさっきのお面の子って何者なのかな？」

その後はカカシが追い忍についてと忍者の始末法について説明する。カカシやサスケは死後、多分解体されるか完全に燃やされるんだろうな。血継限界の悲しい末路だ。

その後、カカシは疲れたのか眠ったので全員も休息を取る。

各々座ったり、携帯食料を食べたり、装備の確認をするなど暇つぶしをしている。俺はまだ読み終わって無い小説を読んで時間を潰す。しばらくダラけてたらナルトが

「……なあ、カカシ先生が寝てるうちにマスクの下見ねエ？」
と笑顔で言ってきた。

「何言ってるのよ？」

非難する口調だがサクラも気になるのか大して止めない。

「いいじゃん！いいじゃん！カカシ先生は疲れて寝てるから気付かねエーって！」

笑いながらナルトはカカシに近づく。

「んもう、仕方ないわねエ。」

とサクラもカカシに近づく。何だかんだ言っても気になるらしい。

そ〜とナルトはカカシのマスクに手をやろうとしたら突然カカシが目を開いた。

「！！」、「ギャー！！！」

いきなりカカシが起きたからナルトとサクラはビビった。

その声に座りながら寝てたサスケも起きた。

「あら、カカシ先生。起きたの？」

丁度帰ってきたツナミがカカシに声をかけるがカカシは無視し、頭に手を当てて何かを考えている。

カカシはアゴに手を当ててまだ考える。その雰囲気のせいかな全員黙り、カカシを見る。

「どうしたんだってばよ！先生？」

「ん？ああ……」

……死体処理班ってのは殺した者の死体はすぐその場で処理するものなんだ……」

まあ当たり前だろうな。わざわざ死体を運ぶなんて疲れるし。

「それが何なの？」

「分からないか？あの仮面の少年は再不斬の死体をどう処理した？」

「は？知るわけないじゃない！だってあのお面が持って帰ったのよ。」

「そうだ……殺した証拠なら首だけ持ち帰れば事足りるのに……だ。」

それと問題は追い忍の少年が再不斬を殺したあの武器だ……」

確かに千本じゃ難しいよな。毒でも塗ってあるなら別だが。」

「！！……まさか……」

サスケがようやく気付いた。

「あーあ……。そのまさかだな。」

カカシが頭を抱える。何せ厄介な敵が生きてる事がほぼ確定したんだからな。

「？」

ナルトとサクラはまだ分からないのかサスケとカカシを見ている。

「さつきからグチグチ何を言っとるんじゃ、お前たち……!?!」

タズナも分からないようだ。ちょっと考えれば分かるだろう?それとも分かっているも分かりたくないのか。

「おそらく、再不斬は生きてる！」

カカシの言葉にナルト、サクラ、タズナは驚愕する。ツナミは再不斬を知らないで分からない顔をする。

「どーゆーことだつてばよ!?!」

「カカシ先生、再不斬が死んだのちゃんと確認したじゃない!!」

ナルトとサクラはカカシを問い詰める。信じたくない事実だからな。

「確かに確認はしたが、あれはおそらく……仮死状態にただけだろう……。」

カカシは白の持っていた千本と不自然さをからお面の少年は再不斬の味方だと説明した。

「……超考えすぎじゃないのか? 追い忍は抜け忍を狩るもんじゃろ!」

タズナはまだ否定する。そう信じたいんだろう。何せターゲットは自分だ。

「いや……クサイとあたりをつけたなら出遅れる前に準備しておく……」

……それも忍の鉄則!

ま! 再不斬が生きてるにせよ死んでるにせよ。ガトーの手下にさらに強力な忍がないとも限らん……。」

カカシの説明にナルトは何故か少し笑顔でフルフル震えている。その様子はワクワクしているにしか見えん。

コイツ状況を分かっているのか？カカシが再不斬に勝てたのはほとんど偶然だぜ？

やり方によつては再不斬が勝つ可能性のほうが高い。だからバトルジャンキーは困る。

一人で死ねば良いのに。

「先生！出遅れる前の準備って何しておくの？先生とーぶん動けないのに……。」

サクラが聞くとカカシは突然含み笑いをして

「お前達に修行を課す……！」

と言った。

「えっ……修行って……！！」

先生……！私達が今ちょっと修行したところであれが知れてるわよ！
！相手は写輪眼のカカシ先生が苦戦するほどの忍者よ……！」

サクラが正論を言う。確かに普通ならたかが一週間程度の修行ではほとんど変わらない。

でもお前等は主人公組。

一週間どころか場合によつては1日で劇的に強くなれる可能性すらある。

例えばナルトの九尾の力を多少解放するなど。

「サクラ……その苦戦しているオレを救ったのは誰だった……。お前等は急激に成長している。

とくにナルト……！お前が一番伸びてるよ……！」

ナルト何かしたっけ？

まあ、カカシの言葉のおかげでナルトは嬉しそうな顔をしている。上手く乗せたな。

俺を指摘しなかったのは俺の実力が分からないからだろう。

基準が分からないんじゃないや伸びてるかなんて分からないからな。

「とは言ってもだ。おれが回復するまでの間の修行だ…。まあ、お前らだけじゃ勝てない相手に違いはないからな…。」

「でも先生！再不斬が生きてるとして、いつまた襲ってくるかも分からないのに修行なんて…。」

「その点についてだが…いったん仮死状態になった人間が元通りの体になるまでかなりの時間がかかることは間違いない。」

「だったらその間に逃げれば良いじゃん。タズナが任務偽証したんだから帰ったとしても何ら問題無いのに。」

「その間に修行つてわけだな！面白くなって来たつてばよ！」
何も面白く無えよ。

その後はあのガキがやって来て悲劇のヒロイン気取つてたが別に興味無かったので無視して本読んでた。

そして今は松葉杖を突いているカカシに森まで連れて来られてチャクラについての説明をしている。

ナルトは無知の癖に偉ぶるからな。無知だから偉ぶるのか？

「木登りー！！？」

カカシから告げられた修行内容が木登りだったため、3人は疑わし気な目でカカシを見る。

「そんなことやって修行になんの？」

サクラは言葉にもする。

「まあ、話は最後まで聞け。」

ただの木登りじゃない！手を使わないで登る。」

カカシの言葉にナルトは面白そうとも思ってるのだろう。笑顔だ。

「？どうやって…？？」

サクラはまだ疑わしげ。

「ま！…見てろ。」

カカシがわざわざ印を結んでチャクラを足に移動させる。

そしてスタ、スタと歩き、そのまま木の表面も歩く。まるで重力を感じてないかのよう。

でも実際はかなりの重力を感じる筈だ。あの状態であそこまで楽々登るのは…。改めてスゲエと分かった。

「登ってる……。」「足だけで垂直に……。」「

3人は呆然。

サスケは知っててもおかしくないと思うが？

うちは一族なんだから既に親に教えられてもおかしく無いのに。

「…と、まあこんな感じだ。チャクラを足の裏に集めて木の幹に吸着させる。」

チャクラは上手く使えばこんなことも出来る。」

笑顔で逆さになりながら話すカカシ。頭に血は昇らないのか？

「ちよつと待つて！木登りを覚えて何で強くなれるのよ！」

サクラが抗議する。

アホか？木登りが簡単になれば逃げるのにかなり役立つ。

それにチャクラコントロールがロクに出来ない奴はロクな忍術も使えない。ていうかこれが出来なきゃ一生下忍だな。

カカシがこの修行の有効性を説明した後に

「…と、まあオレがごちゃごちゃ言ったところでどーこーなる訳でもないし…。体で直接覚えてもらうしかないんだけどね。」

カカシは俺達4人の前にクナイを投げる。俺は出来るんですけど。

「今、自分の力で登りきれぬ高さの所に目印としてそのクナイでキズを打て。」

そしてその次はその印よりさらに上に印を刻むよう心がける。お前は初めから歩いて登るほどうまくはいかないから走って勢いのりだんだんとならしていく……。いいな！」

「ンな修行、オレにとつちや朝めし前だつてばよ！
なんせオレつてば今一番伸びてる男！」

ナルトが自信満々に言う。何の根拠も無い癖によくそこまで信じれるな。

「ごたくはいいから。お前ら、早くどの木でもいいから登ってみろ。」

カカシの言葉に3人は印を結び、チャクラを足に集中させる。

「よっしゃー！！いつくぞオー！！」

ナルトが勢いよく行くのと同時にサスケとサクラも木に向かう。

そしてナルトは一步目から滑り、転けた。

サスケは木の表面を破壊しながら進むが、中腹で限界が来て木に傷を打ち、着地した。

ナルトはチャクラが少なすぎて吸着出来ず、サスケは逆に多すぎて弾かれて木を破壊しながら進むだけ。

しかしそこに「案外カンタンね！」という声の上から聞こえて来た。そこには一番高いであろう枝に腰掛けたサクラがいた。

「サクラちゃん！！」

「今一番チャクラのコントロールがうまいのはどうやら女のこのサクラみたいだな。」

これにはサスケは「チツ。」と舌打ち、ナルトは「スツゲエー！！サクラちゃんつてば！さすがはオレが見込んだ女！」とサクラを賛美する。

しかしサクラはサスケに誉めて欲しかったのがガツクリとする。

「いやー！チャクラの知識もさることながらコントロール、スタミナともになかなかのもんだ。

この分だと火影に一番近いのはサクラかなア…。誰かさんとは違ってね。それにうちは一族つても案外大したことないのね。」

カカシが見えすいた挑発をする。二人はその挑発にまんまとかかったようだが。

「そう言えばカズトはどうしたんだ？早く登れよ？」
カカシが気付いたかのように俺に声をかける。
俺って影薄いのか？まあ、周りが周りだからな。
何故か3人も俺を注視する。そんなに気になるか？
どうするべきか多少悩んだが別に良いか。という結論に達した。
この程度なら基礎の基礎だし。知っててもそこまで不思議は無い筈だ。

カカシのようにスタスタ歩き、そのまま木の表面を歩く。

「あら。」「な！！？」「ウソ！！」「！！！」

カカシは見当はついてたのかそんなに驚かず、逆にナルト、サクラ、サスケは驚いていた。

そして俺は一番高い枝に腰かける。

「…木登り、出来たのか？カズト。」

「ええ、まあチャクラコントロールは基本中の基本ですから。父さんにも教えて貰ってましたから。」

これは本当。やはり幼少期の頃から勉強をしていたからこの木登りも聞けば教えてくれた。誤魔化しのためにね。

「ああ、そっか！確かカズトの父親は上忍で母親は中忍だったな。だったらこの程度なら知ってても不思議は無いか。」

こんな感じに納得してくれる。たまにはあの両親も使えるな。

「え、マジ！？カズトの両親って忍者なのか！？」

何故かナルトが驚く。

「ああ、そう言えばカズトの家である北郷家はそれなりに優秀な忍者を輩出している家系だしな。」

カカシが補足してくれる。

優秀な忍者は代々では無くたまにだけな。

「なるほど。だからカズトは強いんだア。」

サクラは納得する。お前の家系は普通だからな。むしろ何でお前は

忍者になったのが聞きたいくらいだ。
ナルトとサスケは微妙な表情をする。何たって俺は両親が健在だからな。

更に両方忍者なんて羨ましいんだろう。サスケもナルトも確か両親は忍者だったからな。

その後、俺はカカシからタズナの護衛につけと命じられたので現在1人で橋の建築現場で暇つぶしに本を読んでいる。

「ヒマそうじゃのう。」
タズナが話しかけてきた。

「そりゃね。別に襲撃も無いし。工事は順調そうだしな。
むしろ俺が忙しかったらお前ら大変だぜ。」

俺の軽口に「そりゃそうじゃな。」と笑いながら作業に戻った。
しばらくしていたら突然悲鳴が鳴り響いた。面倒くさいが一応仕事だから悲鳴の音源に行ったら何か格好はおかしいけど日本刀を持った男二人がいた。

多分ガトーの私軍の1人だろう。名前さえ出てこないモブか。

「てめえらウゼェんだよ！」

「いい加減諦めろよな！」
工事を邪魔しにきたらしい。随分小さい行動だが効果的でもあるな。
現に工員達がビビってる。

1人は老人に刀を向けているので

「あのさあ、オジサン達、こんな老人苛めて楽しい？」
老人と侍？の間に立つ。

「何だガキ？邪魔すんじゃねえ。」
もう1人の方が俺にも刀を向けて来た。

「こんな子供にまで刀を向けるなんて。アンタ等一応は侍だろ？恥

ずかしいとは思わねえのか？」

この世界の侍がどんなのか知らないけど。

「うるせえガキ！！テメエに関係ねえだろ！！」

何かが感に触ったのか1人が切りかかってきた。

これで反撃出来る。一方的にこつちから攻撃すると犯罪者になりかねんからな。

俺は軽くかわし、クナイで切りかかってきた奴の刀を握っている右手を切断した。

「ギャー！！！」

腕が吹っ飛んだからか悲鳴を上げる。

「ヒイツ！！化け物！！」

残った方は俺に敵わない事が分かったのか右手が無くなった相棒を連れて逃げるように帰っていった。

工員達は人の手が吹っ飛ぶ光景を見せられたからか啞然としていた。俺はそれを無視して元の位置に戻り、読書を再開した。

しばらくして工事は再開した。てっきり今日は中止かと思ったが意外に根性あるな。

タズナが頑張って説得したから皆一応作業に戻っていった。

何人かは俺を恐怖の目で見ていたがガン無視だ。

サクラがタズナの護衛に行き、俺はタズナの家族の護衛とカカシの補佐（介護）をするためにタズナの家で再び読書。

しばらく寝ていたカカシが目を覚まし、起き上がり俺に声をかけた。

「カズト、ちよつといいか？」

「…ん？何だトイレか？」

カカシはまだ全然回復してないからトイレに行くにも補助が必要だ。「いや違う。聞きたい事があるんだ。」

「何だ？」

「お前の実力についてだ。」

面倒な展開になってきたな。やっぱり目立ち過ぎか？

「実力？」

とりあえず惚けとく。

「ああ、アカデミーの成績表を見るとお前はどの教科でも必ずトップ10に入り、安定した成績を取っていたが、あまりに安定し過ぎていて作爲的に感じた。」

やっぱりどこか苦手教科を作ったりたまに悪い成績も取っとくべきだったか……。面倒だったからなあ。

「それに現実にお前の実力を見て見るとどう考えても首席を取ったサスケよりも上回る。」

更にアカデミー上がりには難しい忍の考え方もお前は普通に実践しているし、木登りで見えたチャクラコントロールでも下忍とは思えない程安定していた。」

やっぱりカカシクラスだとそれぐらい見破るか。親父は全く疑わなかったのにな。

「お前は低く例えても下忍のトップクラス。既に中忍の域にも達していると言っても良い。」

そこで疑問だ。何故実力を隠していたんだ？」

カカシが俺の目を見ながら聞く。

ウソを見破るつもり何だろうが、甘いと言っしか無い。

この俺に心理戦をふっかけるなんてな。

精神年齢は既に200歳は軽く越え、様々な修羅場や権力闘争、騙し合いの中で生きてきたこの俺のウソを見破るなど不可能だ。

何せコイツ等に見せてきた北郷カズトは全部偽物。本音が無いんだからウソか本当かの見分けなど不可能だ。

「……だつてさ、忍者の中で突出すると面倒じゃん。」

「……面倒？」

「ああ、先生が良い例だよ。」

カカシ先生は才能があり、その才能を小さい頃から遺憾無く発揮した。そのせいで直ぐに下忍、中忍、上忍になった筈だ。だろ？」
知ってるが一応聞いとく。あんまりに知っていると疑われるからな。

「ああ、そうだ。」

カカシは昔を思い出したように少し目を細めた。

「カカシ先生の時代は大全期だから更に顕著だったろうけど、今の時代だって優秀な忍者は直ぐに出世させて重要な任務につけさせる体制は変わってない筈だ。」

カカシを見ると頷く。

「だからさ、あんまりにも突出すると直ぐに出世させられて危険な任務に就かされるじゃん？だから敢えてそこまで優秀では無い忍を演じた。」

「……つまり、危険な任務に就きたくないから隠していたのか？」

「うーん……。まあそれもあつたけど、一番は若い内に出世したくなかったというのが強いね。」

カカシは分からないのか顔をしかめる。

「先生さ、子供の頃に遊んだ記憶ある？」

いきなりの俺の質問に少し驚いたようだけど直ぐに冷静になり答えた。

「……いや、あまり無いな。」

「だろうな。任務、任務の日々でロクに遊んだことなんて無かつただろう。」

だから今、その反動で遅刻やエッチな本を読むようになったんじゃない？」

それを言われてカカシは黙る。心当たりがあつたのか？

「俺の夢はさ。何れは父さんみたいに上忍になることだけだ。直ぐにはなりたくない。」

一杯遊んだり、学んだり経験しながらじっくり時間をかけて出世したい。

そして上忍か中忍になってある程度の収入が手に入るようになったら結婚して子供を作って、子供が独立したら隠居してのんびり暮らしたい。

孫に「俺の人生は充実している。」と誇らしく色々聞かせてやりたい。

これが俺の夢さ。忍者らしく無いけど…。」

カカシは真剣な顔で聞いている。どっちだろう？

疑ってるのか信じてるのか。北郷カズトのキャラ的にはあってる筈なんだが。

「先生を前にして言うのは何だけど…。息子や孫に語る話が任務のことばかりってのはキツイ。それに極秘事項が沢山あるからほとんど喋れないだろうし。

忍者に相応しくないとされるだろうが、「充実した人生を送りたい。」これだけは誰に言われようが曲げない！俺の忍道だ。」

最後になんだかこの世界が好きそうな言葉で締めくくる。

現実世界なら「あつそ。」や「じゃあ忍者辞めた方が良くね？」と言われるだけだろうがこの世界なら多分通用する筈だ。

「……………」

しばらくカカシは黙っていたが

「……………」そうか、聞いて悪かったな。」

と言ってまた横になり寝出した。

信じた!?

まさかこれで信じるとは…。

ダメだった場合に備えて幾つか他の回答も用意していたが、思ったより単純で助かったな。

だってどうやってこの強さを獲得したかとかどうやって忍らしい考

えや明らかにある実戦経験についてとか何も話して無いもん。
流石にこれを聞かれたらどうしようか悩んだんだけど簡単に終わっ
たな。

まあ、良いや。今はただ冷静にさっきと変わらずに読書してれば良
い。変な行動は取らずに北郷カストを演じるんだ。

16 高見の見物

ナルトとサスケも木登りをマスターした事でタズナの護衛に就くことになった。

その時にあのガキが面倒くさいことをほざいていたが無視だ。聞いて意味がある訳じゃ無いし、主人公達が勝手にやってくれるから俺がどうこうする事は無い。

翌日、ナルトは前日の木登りで体力を限界近くまで使ったから未だに寝ていた。

「しょうがない。ナルトは置いてくか」

ナルトをタズナの家に置いてカカシは4人で行くことを決断した。

しかしそこに俺が意見した。

「じゃあ俺も残ります」

いきなりの残る宣言にカカシは聞く。

「何でだ？ カズト」

「何か嫌な予感がするんです。」

ナルトは動けないから護衛にならないんで俺が残ってこの家を守ります。

それに、今までカカシ先生がこの家にいたから何も無かったですけど、もしかしてガトーがツナミさんやイナリ君を人質に取りに来るかも知れませんから。

まあ、杞憂だとは思いますが、忍びはクサイとあたりをつけたら出遅れる前に準備しておくのが鉄則ですから」

カズトの言葉も一理あるとカカシは考える。

確かに今までは自分と4人の内誰かはいたからタズナの家族に危害は及ばなかったが、今は自分が動けるようになったからこの家は無防備になる。

「それに、そつちにはようやく復活したカカシ先生がいるんですから俺が抜けても大した問題は無いでしょう」
その言葉にカカシもそれもそうか。と納得した。

「分かった。」

じゃあカズト。ツナミさんとイナリ君、それとナルトのことも頼んだぞ」

そう言つてカカシとサスケ、サクラはタズナの護衛について行つた。

「カズト君、護衛よろしくね」

自分達が狙われるなんて露程も思つてないからか、ツナミは笑顔で俺に言う。

アンタ等結構危ない地位にいるんだぜ？

タズナが家族をあんまり大事に思つてないんだつたらそんなに心配はいらないがどう見てもタズナは家族を大事にしている。だつたら人質に取るに決まつてる。

まあ、どうでも良いか。

一番の目的は再不斬と白に遭わない事だし。

流石にアイツ等を相手にするのはリスクが高すぎる。だから敢えて残つた。

これで死ぬ危険性は限りなく低い。後はナルトの目覚めを待つだけだ。

しばらく時間が経つとナルトが起きた。

「あー！寝過ぎしたアー！！」

ナルトが大声を上げながら飛び起きた。よく寝起きにそんなに大声出せるな。

「ナルト、起きたか」

「あれ、カズト！カズトがいるって事はまだ皆いるのか？」

希望を見つけたような目をしているが打ち砕く。

「いや、もう皆行ったよ。俺はツナミさんとイナリ君の護衛のために残っただけだ」

「何ー！ー！やっぱな！やっぱな！オレ置いて行きやがった！」ナルトが俺の前で着替え始めた。何でお前の着替えシーンなんか見なきゃいけないんだよ。

「何だ？ ナルトもカカシ先生の所に行くのか？」

「おう！あつたりまえだつてばよ！」

「カカシ先生はお前は今日はゆっくり休めと言ってたけど……お前の様子を見る限り大丈夫そうだな」

「見てのとおり！元気一杯だつてばよ！」

「……じゃあお前はカカシ先生と合流しとけ。ここの護衛に二人もいないから俺だけで十分だからな」

「よし、それじゃ行くつてばよ！カズトも護衛頼んだつてばよ！そう言つて元気良くナルトは出ていった。

これで原作通りに進む。何せナルトがいかないとサスケが死ぬからな。それもそれで良いけど。

しばらくして、気配を感じたから『完全なる隠匿』を使って家の裏口に移動したらガトーの専属ボディボードのゾウリとワラジがいた。

にしてもこいつら侍には見えないよな。この世界の侍や忍者って服装や髪型とか自由過ぎ。

家の中から「イナリーちよつと洗い物手伝ってー」「うーん。今トイレー！」という平和的な会話が聞こえ、二人が中にいる事が分かったからかゾウリとワラジはニヤツとして刀を構える。

「アンタ等何やってんの？」

いきなり後ろから声をかけられたからか、振り返りながら居合いをしようと二人は刀に手をかけたが、かけた瞬間に二人とも首を落とされて絶命した。
首は飛び、体は地面に倒れこんだ。

弱！

まあ、所詮侍。

一般人相手なら十分脅威だが、人間を越えている忍には敵わない。侍は人間だからな。

死体を海に投げて処分した。後は偉大なる自然によって分解されて母なる海に帰るだろう。

まさにエゴ。

これによって魚の餌が増えて多少は漁獲量が上がるかも知れない。死体は海に捨てるのが一番だ。

楽だし、臭わない。何より魚が肥えるから一石三鳥だ。

家に入りまた読書を再開する。

「何か音がしたんだけどどうしたの？カズト君」

ツナミが聞いてきた。

「ええ、先程ガトーの手先がこの家のすぐ近くにいたので処分してきました。」

ですがご心配なく、もう大丈夫です」

俺の処分発言に多少青ざめるが「そ、そう。ありがとう」とイナリに悟られないためか気丈な態度を見せる。

なかなか良い母親だな。母親の不安は子供に伝わるからな。毅然とした態度を取ってれば子供は安心する。

その後、イナリがトイレから出てきた時にはツナミは平然としていた。母親とはスゲエな。

さて、これでここはもう大丈夫だ。

後は念のために影分身を残して本体の俺は『完全なる隠匿』を発動させて橋に向かう。

ナルトはやはり来なかった。まあ俺がいると分かってたからな。無理に引き返すより一刻も早くカカシと合流したかっただらう。

そのせいでイナリが島民を引き連れるイベントが消えたからな。代わりに俺が行かなくてはならない。

幾ら侍の群れと言っても忍なら殲滅はそんなに難しく無い。

まあ殲滅する必要は無いがな。多少でも希望を持たせれば後は原作よろしく主人公組がなんとかしてくれる。本っ当、アイツ等こういうのは役に立つな。

俺が橋に着いた時は丁度ナルトが無意味にド派手な登場シーンをやってる時だった。

「うずまきナルト！ただいま見参！！」

カッコイイとでも思ってたのか？ 思ってたんだろうな。

「オレが来たからにはもう大丈夫だってだよ！」

物語の主人公つてのは大体こーゆーパターンで出て来てあっちゅーまにイー敵をやっつけるのだァー！！

クソ長いセリフをワメクバカ。

そのせいで再不斬から手裏剣を投げられるが白が千本で撃ち落とす。相変わらず甘いなアイツ。

そして何故かナルトは白の術の外にいるというアドバンテージを捨てて術の中に入った。

何故術の中に入ってきたとサスケに怒られ、言い争いが勃発。アイツマジ役に立たたたねえ。

その後、サスケが豪火球の術をして氷の鏡を溶かそうと試みるが無意味に終わり、ナルトと一緒になぶられる。

まあ、アイツ等じゃ普通に勝つのは無理だろう。白を完璧に殺す気にもならないとな。

何故か木の葉の里は忍の国の癖に平和ボケしてるからな。まるで現代日本みたいに。

霧隠れみたいに同級生同士で殺し合わせるぐらいはしないと忍としては不完全過ぎる。

カカシみたいにかなりの経験を積めば別だけど…。

カカシと再不斬の戦闘も始まった。

カカシが写輪眼を発動しようとしたらその前に再不斬がクナイで斬りかかり、それをカカシが手の平で止める。

何か会話した後に結局はカカシが写輪眼を発動させるが再不斬が霧隠れの術を使い視界を遮る。

ていうか俺にも見えない。残念ながら俺の両目は普通だし、透視能力も無いから見えない。

シユルルル、シユルルル。キン、キン、キン。とか手裏剣の飛ぶ音や弾く音と微かな会話しか聞こえない。

多分、再不斬が写輪眼のメカニズムを説明してるんだろうな。写輪眼は目を見なきゃそこまで脅威じゃないからな。

万華鏡写輪眼は別だが…。

「きゃああああ!!」

サクラの悲鳴が聞こえ、霧が開けてみるとそこにはサクラとタズナを守ったカカシが再不斬に袈裟斬り食らった場面だった。

よくあれで立てるな。普通なら痛みでのたうち回るぞ？

しかしその状況は最悪で、カカシも既にほとんど諦めた顔をしている。形勢が悪すぎるからな。

しかし

「サスケ君はあんな奴に簡単にやられたりなんかしないわ！！ナルトだって！！」

というサクラの声で何故かカカシの目に希望が生まれた。

意識はしてないだろうがサクラは良い仕事をした。あの言葉でカカシが希望を思い出したからな。

その時、どこからか禍々しいチャクラを感じた。

これが九尾のチャクラか…。

チャクラが具現化するなんてどんだけだよ。傷も完治していくし。ご都合主義過ぎ。

それをヤバいと見たカカシはポーチから巻物を出し、胸の傷に親指を当てて血をつけて巻物に線を引く。

そして印を結び口寄せをした。

口寄せって結構便利だよな。

俺はコピー能力があるから物を口寄せする必要は無いが生き物を呼べるのはデカイ。

残念ながら俺と契約してくれる奴がいるのか分からないが。

霧に隠れててよく見えないが何かゴゴゴゴという音がしたと思ったらドゴツとデカイ音がして何かが見れたらしい。

そして霧が晴れると再不斬に木の葉の額当てを着けた様々な種類の犬が再不斬に噛みついていた。

ありゃあ痛えな。

もしも狂犬病とか病気を持っていたら大惨事だし。

止めとしてかカカシが印を結び、右手にチャクラを集中させている。

そしてチャクラが見える程に集中して雷のように弾ける。

チチチと聞こえるからやはり千鳥だろう。とりあえずコピーした。でもあの技、接近戦用だからあんま使えないな。わざわざ敵に近付くとか危ないし。

何かしばらく話してたけど遂にカカシが動き出した。

千鳥を再不斬に突き出し、そのまま再不斬の心臓を貫くかと思いきや、突然再不斬の近くに氷の鏡が出て来て、そこから白が出て来て盾になった。

いきなりの事でカカシは止められず、そのまま白を貫いた。

そして白はカカシの手を掴んで固定し、カカシの動きを封じる。

その好機を見逃さず、再不斬が白ごとカカシを斬りにかかる。

なかなか良い手だ。それなら高確率でカカシを殺れる。でも無理だろうな。

再不斬は無意識だと思うが白の死体を斬らないようにしてるから動きが遅い。多分白の死も影響してるんだろう。

だからダメなんだよ。自分以外に執着心を持つのは。

俺は自分の命に物凄い執着してるから自分以外は何でも切り捨てられる。でも再不斬は鬼人とか言われてるけど典型的な人間だった訳だ。

バカめ、自分以外を求めるなんて強欲過ぎ。

人間はそこまで万能じゃない。自分を守るだけで一杯一杯だ。

だから俺は今までの人生でも寿命以外では死ななかつた。

自分だけを求めたからだ。

その後はジャンプ物が好みそんな展開だ。

冷徹に見えた再不斬は白の死に動揺してバカみたいな攻撃しかせず、カカシに良いようにやられていく。

そして再不斬の両手が使えなくなり、これで終わりかと思いきやそ

ここに最後の難関が現れた。

ガトー率いる私軍達だ。

ガトーのやり方は普通なら間違つて無いんだけどこの世界ではダウトだ。

普通の世界ならあの数の兵達を用いれば簡単に勝てるが、この世界は人外魔境がうようよいる世界。

ガトーは生まれる世界が違えばかなりの大物にもなれたかも知れないのにな。

さてクライマックスだ。

再不斬が白の敵討ち？ を仕掛ける。

ナルトからクナイを借りて、そのクナイをなんと口にくわえて大群に突っ込む。まさに特攻。

その自分の命を省みない攻勢のため、次々刀や槍などを突き刺されても進軍して後方に逃げ込んだガトーにも攻撃をかけた。

そして最後にガトーの首をハネて死んだ。

まさにカッコイイ死に方だ。

まあ、俺から見たら無駄死にだがな。

そのまま逃げる事も不可能じゃなかったのにな。

逃げて捲土重来すれば済む話なのにな。意味分かんない。

そしてもう一つのご都合主義展開として死んだ筈のサスケがこのタイミングで蘇生。

ていうか心臓が止まってから10分以上は経ってる筈だからとつくに脳も死んでる筈何ですけど。

何それ？ 奇跡？

物語的にはこれでハッピーエンドだけどそうそう上手くはいかない。

ガトーが死んだ事によって入る筈だった金が無くなったから私兵達は町を襲う現地調達に変更した。ある意味軍らしいな。そろそろ俺の出番だから行くか。

大群の先頭部分に起爆札を仕込んだクナイを投げて先頭部分にいた数人を爆殺した。

「うわぁー!!」、「ギャー!!」

など大群は突然の攻撃にビビり、止まる。

全員がクナイの飛んできた方向に目を向けると俺がいた。

「カズトオ!!」

ナルトが喜色満面な顔を向けている。

「よオ、悪いな。ちよつと遅れた」

とりあえずマンガっぽいセリフを言う。

「実はやっぱりタズナさんの家族を人質にするために刺客が送られててな。」

そいつを尋問したら大群を引き連れて橋に向かってるって聞いたから急いで来たんだ」

出任せな情報を流す。まあもう事実確認は無理だな。

何せ刺客は今頃海に浮いてるし、刺客に指示したガトーは首が無いから話せない。だからバレル事は無い。

大群はどうするか迷っている。

たった1人の加勢と言っても無傷の忍者。

オマケに人を殺す事に何の躊躇いも持っていない事はさっきの攻撃で分かる。

もしかして次は自分かも知れないからな。

更にナルトが

「よーしい!オレも加勢するってばよ!!」

と印を結んで影分身で増えた。

「くっ…。」

これによって大群は更に動揺する。敵が増えたんだからな。

それを見てカカシはチャンスだと思い、残ってるチャクラを振り絞って影分身で何十体も増える。

「ヒイーーーーッ!!!」

それを見て遂に大群は恐慌状態になる。強そうな忍者が何十人も増えれば当たり前だ。

「さーあ…やるかア!？」

カカシが低い声で言う。遂に大群は崩れて逃げ出す。

「やりませエ〜ん!!」、「うわああ逃げとけエ〜〜!!」など悲鳴を上げて自分達がここまで来た船に逃げて急いで離岸していった。

「よっしやー!!!」

それを見たナルトは喜ぶ。

まあもし逃げずに来ても大して問題は無い。最悪この橋を爆断すれば大群を海に落として後は狙い撃ちにすれば良かった。

最終手段として大瀑布の術で全員殺すというのもあった。勿論目撃者であるカカシ達もな。

そして最後は何故かこの季節に雪が降るといふあり得ない異常気象が起きて終わりだ。どんだけ奇跡が起きるんだよ。

最早必然だな。

何せ1回だけなら偶然、2回起きたら奇跡、3回起きたならそれは必然だ。

何か必然だと分かるとこの雪もスゲエ安っぽく見えてくる。何か紙吹雪を見てる気分だ。

にしても…。

俺空気が過ぎねえ?助けに来たのに誰も礼1つ言わないし。

酷い…。

17 中忍試験編

波の国から帰り、しばらくは簡単な任務が続いた。

畑仕事やお使い、ペット搜索。どれも忍者じゃなくても出来る内容だ。

まあ、中忍試験のための最低任務経験を得るためだけだな。

ていつかたかだか8任務をこなせば中忍試験を受けれるとか早すぎないか？ 普通の下忍はほとんどが上記みたいなDランク任務で敵地侵入のCランク任務なんてほとんど無い。

これでは経験など得られる筈が無い。だから大抵は倍以上の任務をこなしてから中忍試験に参加させるんだが、何故今年はルーキーが全員参加なんだ？

頭おかしいんじゃない？

とりあえず今日も任務のために集まった。

俺が待ち合わせ場所に行ったらサクラとサスケは既にいた。

何で早く来るんだらう？ どうせカカシは2、3時間は軽く遅刻するのが慣例なのに。

「よオ」

と声をかけると

「おう」、「おはよう、カズト」

と何時も通りの挨拶を交わし、後は無言だ。別に話すことも無いしな。各々ボーツとするか俺みたいに忍具の手入れや読書をしてヒマを潰す。

そして少し経つと

「グツ！モーニーン！！サクラちゃん！！」

デカイ声を上げながらナルトが来た。

そしてナルトはサスケと目が合うと「……」しばらくお互い無言に

なり、「フン！」とお互い目をそらす。
まさにやってることはガキだな。互いに意識してるんだろう。
サクラはこの雰囲気はどうにかしたいのか俺を見てくるが、俺は別にどうでも良いので無視する。
それで仕方ないのでカカシが早く来るのを期待するがそれはことごとく裏切られるのだった。

何時も通り3時間程経ったころ

「やー諸君おはよう！今日は道に迷ってな……」
という見え見えなウソをつきながらカカシが来た。

それに「いつも真顔で大ウソつくなっ！！！」とサクラが突っ込む。
最早日常だ。

そしてカカシから任務を言い渡される。今回は草むしりらしい。地味に面倒だな。

「あのさ！あのさ！カカシ先生さあ！オレら7班、最近カンタンな任務ばっかじゃん！？」

オレがもつと活躍できる何かこうもつと熱いのねーの！？こう、オレの忍道をこう！！心をこうさあ……！！？」

ナルトの不満が爆発する。

そんなに死に急ぎたいのか？ それとも再不斬と戦ったAランク任務が恋しいのか？ マジ勘弁。

ガキ特有の英雄願望か？ 俺には無かったけどな。

そして任務終了。

ナルトがサスケに敵対心剥き出しにして多重影分身で張り切った結果、早く終わったがナルトはポロポロ。現にサクラに支えられて歩いているという情けなさ。

「フ〜」

ナルトがため息をついていると

「もう、ムチャするからよオ！」

肩を支えているサクラが注意する。

「フツ、つたく世話のやける奴だな」

サスケのボヤキが聞こえたのか

「ムツキイー！！ザズゲイー！！」

ナルトは簡単に切れて暴れようとするが

「これ以上暴れたらとどめさすわよ！」

サクラに押さえられて終わる。

それを見ているカカシは

「ん〜。最近チームワークが乱れてるなあ……」

とつぶやく。それにナルトが反応する。

「そーだ！そーだ！チームワーク乱してんのはテメーだよサスケ！

！いつも出しゃばりやがって！！」

どうやら自分の事は分かってないらしい。

「そりやお前だウストラトンカチ。そんなにオレにカリを作りたくね

ーならな…オレより強くなりやいーだろが」

サスケの言葉に互いに睨み合う。子供だねえ。

何故かガキの頃は他人に借りを作りたがらない。それが人間関係を

円滑にするのに。

ピーー、ヒョロロー。という鳥の鳴き声が響き渡る。

あれは緊急招集命令。

それを聞いたカカシは

「さーと！そろそろ解散にするか。オレはこれからこの任務の報

告書を提出せにやならん…」

と言う。

それを聞いてサスケは「……なら帰るぜ」と去る。それに続いて「
じゃ俺も」と俺も帰る。

馴れ合うキャラじゃないから誰も止めない。止められても断るけど。

里を見渡すとちらほらとだが他国の額当てを着けた忍を見かける。完全に中忍試験が始まるらしい。

ある意味これこそが最大の死亡フラグであり、面倒なイベントだ。何せ大蛇丸がいやがるからな。アイツに目をつけられたら最後だ。だから慎重に慎重に行動しなくては…。

だってアイツ首落としたぐらいじゃ死なないだろうからな。そんな面倒な奴の相手は原作組に任せるのが一番だ。

少し経ち、朝早くからカカシからの集合命令があったので仕方なく集合場所に集まったが恒例のごとくカカシは大遅刻。何故か朝っぱらからハイテンションなサクラとナルトは無視してポーツと待つ。

「やあ！お早う諸君！！今日はちよつと人生という道に迷ってな…」
何時も通り適当な理由を上げるカカシ。

「ハイ！嘘ツ！！ちつとは反省しろ！」

サクラが叫ぶ。最近メツキが剥がれてきたな。

「ま！なんだ…。いきなりだが、お前達を中忍選抜試験に推薦しちやったから」

まるでコンビニに買い物に行ってくるくらいのテンションでとんでもない事を言うカカシ。ていうかやっぱり俺も入るのか？

だって中忍選抜試験ってスリーマンセルでしか受けられないからもしかして俺か、誰か1人は受けられないかとも思っていたがそれは無かったらしい。やっぱ特例？

「何ですって〜！！！」

サクラが反応する。とんでもない事だからな。

「志願書だ」

カカシが中と大きく書かれている紙を渡してくる。原作と違って4枚だけだな。

「カカシ先生大好きーっ!!」

ナルトがカカシに抱きつく。そんなに出たかったのか？

「…と言っても推薦は強制じゃあない。受験するかしないかを決めるのはお前達の自由だ。受けたい者だけその志願書にサインして明日の午後4時までには学校の301に来ること。以上！」

そう言つてカカシは瞬身で消えた。

ていうかこれつてこの前した俺の決意表明を完全に無視してねえか？ 明らかに早すぎるし。俺の意見など無視か…。

とりあえず家に帰り嫌だけど志願書にサインした。

だつて俺が出ないと多分アイツ等も失格だろうし。アイツ等がただのモブなら気にしないが、残念ながらモロ主役。出ないとどうなるか分からないからとりあえず出なければいけない。全く、疫病神を背負つてる気分だ。

次の日

待ち合わせ場所に行くとな案の定サクラとサスケはもういた。コイツ等真面目だよな。

サクラの元気が無いが別にどうでも良いので無視。

そして最後にナルトも来た。

4人で久々にアカデミーに行き、行列について行って階段を昇る。

3階の301が目的地なのに、ほとんどの奴等は2階にしか上がらない。完璧幻術に引っかけてるな。情けない。

そして俺達もとりあえず行列に従つて2階に上がり、教室を目指す

とそこには受験生達の集まりがあった。何を見ているのかと見てみれば先輩下忍が後輩達を間引いていた。ていうかチャクラ量やコントロールから変化で化けた上忍か中忍と分かる。これが第1関門なんだろう。

リーとテンテンがワザとやられた振りをしているのを無視してサスケは幻術を解けと迫る。

周りの奴等は「なに言ってるんだアイツ…」と分かってなかったらしいが。

ダメ押しとしてサクラが「だってここ2階じゃない」と看破したため、幻術は消えて教室の標示が301から201に変わった。

幻術を見破ったから次なる試験としてか変化で化けた下忍がサスケに蹴りを入れる。サスケもそれに応戦しようとしたが、その前にリーが入り、両方の蹴りを掴んで止める。

あの速さは相変わらずスゲエな。何度か訓練風景を見てたけど下忍の域を越えてるぜ。

そしてリーの行動をネジが注意するがリーはサクラを見て顔を赤くする。何て分かりやすい。

そしてリーはサクラの所に近付き、

「ボクの名前はロック・リー。サクラさんと言うんですね…。」

ボクとお付き合いしましょう！！死ぬまでアナタを守りますから！

！

歯をキラーンと光らせ渾身の告白をするがサクラは

「ぜったい…イヤ…あんた濃ゆい…」

と完膚無きまでに断られた。

リーはガツクリと肩を下ろす。それを見てナルトは笑っている。

傍らではネジがサスケに

「おい、そこのお前…名乗れ……」

友好さが微塵も見えない話しかけをしていた。

「人に名を聞く時は自分から名乗るもんだぜ……」
サスケも同じように返す。

「お前ルーキーだな……歳いくつだ？」

「答える義務はないな……」

会話になつてゐるんだかなつてないんだか分からない事をした後に互いに背を向けて終わりを迎えた。

「さあ！サスケ君、ナルト、カズト行くわよ！！」

何故かテンションが高いサクラがナルトとサスケの手を引っ張りながら3階に行く。俺もついていく。

そして向かつてる途中で

「目つきの悪い君、ちょっと待ってくれ！」

リーが声をかけてきた。もしかして俺もか？　とも思ったが

「何だ？」

とサスケだけが返事した。やっぱり自覚はあるのか。

「今ここで、僕と勝負しませんか？」

「今ここで勝負だと……？」

「ハイ、ボクの名前はロツク・リー。人に名前をたずねる時は自分から名乗るもんでしたよね？」

「うちはサスケ君……」

「フン……知つてたのか」

「君と闘いたい！」

リーが構えて言う。だからジャンキーは困るんだ。面倒くさい。死ぬまでこうだからな。

何か全員の注目があつちに行つてゐるから無視して先に行く事にした。俺がいる意味無いし。

階段を上がり3階の301教室の前に行くとカカシが待っていた。

「…ほう、意外だったな。カズトは来ないと思ってたよ」
カカシが言う。やっぱワザとか。

「…まあ、もしこれが個人での試験なら来なかったでしょうが、班員全員が受験しないと受けられないシステムらしいのでね。
流石に俺1人の我が侂で3人の受験資格を取り上げるのも何ですか
らね」

本当はなるべく原作を破壊しないように注意しただけだけだな。少なくとも俺が里にいる間は変えない。

俺に都合が良ければ変えるけど。

「へエ〜、知ってたんだ？」

「調べましたからね。情報源は秘密ですけど」

これぐらいなら調べれば誰でも簡単に分かる。

「それと、個人戦になって、もしヤバい状態なら迷わず棄権しますから。そんなときや来期を目指します」

「まあ、個人戦になったらお前の自由だからな。お前の判断に任せ
るよ」

その後ようやく3人も来た。

「……そうかサクラも来たか…。中忍試験…これで正式に申し込み
できるな」

「!……どういうこと…?」

「実のところ、この試験、初めから3人1組でしか受験できないこ
とになってる…。お前らは特例的に4人1組だが」

「え?でも先生、受験するかしないかは個人の自由だ…って。

…じゃあウソついてたの?」

「…もしそのことを言ったならサスケやナルトが無理にでもお前を
誘うだろう…」。

たとえ志願する意思がなくてもサスケに言われれば…お前はいい加
減な気持ちで試験を受けようとする…。サスケとカズト……ま!ナ
ルトの為に…ってな」

「じゃもしサスケ君とナルト、カズトの3人だけだったら？」
「ここで受験は中止にした。この向こうへ行かす気はなかった…。
だがお前らは自分の意思でここに来た。オレの自慢のチームだ。さ
あ、行つてこい！」
まさにジャンプなノリだな。
「よし！！行くつてばよ！！」
何故かナルトが宣言してサスケとサクラが扉を開ける。俺は見てる
だけ。

中に入ると既に大勢の下忍がいた。まあ多分俺達が最後だろうし
な。

「サスケ君おつそーい！」

いきなりサスケにいのが抱きつく。

コイツの何が良いのだろう？

成績？ 顔？ 何かあるミスティアさ？ まあ良いか。

サクラといのが何か言い合っていると横からシカマルとチョウジの
第10班が現れ、更に奥からキバ、ヒナタ、シノの第8班が現れた。
ポケモンみたいにゾロゾロ現れやがって。

何か久々に集まったからか割かしデカイ声で会話していると

「おい君たち！もう少し静かにした方がいいな…。」

カブトが現れた。コイツも要注意人物なんだよな。ある意味大蛇丸
よりイカれてるから。

「君たちがアカデミー出たての新人10人だろ？ かわいい顔して

キヤツキヤツと騒いで…まったく。

ここは遠足じゃないんだよ」

「誰よ～～アンタ？ エラそーに！」

いのが不機嫌そうに言う。

「ボクはカブト。それより辺りを見てみな」

「辺り？」

全員が後ろを振り返ると雨隠れの額当てをした3人組が睨んでいた。「君の後ろ…あいつらは雨隠れの奴らだ。気が短い。試験前でみんなピリピリしてる。どつかれる前に注意しとこうと思っただけ」

カブトがそう言うと全員黙った。

そして静かになったのが分かったのか睨み付けていた奴等も前を向いた。

「ま！仕方ないか。右も左も分からない新人さん達だしな、昔の自分を思い出すよ」

「カブトさん…でしたっけ？」

「ああ…」

「…じゃああなたは2回目なの？」

サクラが聞く。ある意味スゲエな。もう周りの奴等の警戒心が薄れている。

「いや…7回目。この試験は年に2回しか行われないからもう四年目だ」

そこまでバレないのは素直に賞賛するよ。

「へーじゃあこの試験について色々知ってた…!？」

「まあな」

「へーカブトさんってばすごいんだー」

その言葉に気を良くした風に見せたカブトは

「へへ…。じゃあかわいい後輩にちょっとだけ情報をあげようかな。この認識札だね」

とカードを出してきた。

「認識札？」

「簡単に言えば情報をチャクラで記号化して焼きつけてある札のことだ。この試験用に四年もかけてやった。札は全部で200枚近く

ある」

その後はどこの里が何人受験者を出しているかやリーや我愛羅の情報を見せてくれた。

にしてもリーはDランク任務20回、Cランク任務11回をこなしてるのか。まあ普通これくらい経験は必要だよな。

俺達なんてDランク任務8回、A？ ランク任務1回だからな。経験少なすぎ。

そしてナルトが震えていたかと思いきや突然

「オレの名はうずまきナルトだ！！てめーらにやあ負けねーぞ！！」
大声で教室にいる受験生達に宣言する。

当然ながら全員がこっちを注目してくる。しかしナルトは頭を後ろに組んで笑ってるだけ。どんだけハート強いんだよ。

サクラが「み…皆さん冗談です…。こいつかなりのバカでして…」とフォローする。

カブトが「フ〜、まったく…」と言った直後に音の忍3人が動き出した。

どうせ音の里はマイナーだと言われたのがムカついたのでろう。しかし喧嘩を売る相手がカブトってのが笑えるな。だってカブトも実質音忍だし。

音忍の1人が集団からジャンプしてカブトに剣だかクナイだか分からない刃物を投げ、カブトがそれを避けるともう1人の音忍が現れて何か穴が空いている籠手を着けた右腕で殴りにかかる。

しかし当てるつもりはあまり無かったのか大して速くなく、カブトは避ける。

しかし避けた筈のカブトのメガネが割れる。

そしてカブトはいきなり吐き出した。

確かになかなか強いよなああの攻撃。

「なーんだ…大したことないんだなあ。四年も受験してるベテラン

のくせに」

「アಂತアの札に書いときな、音隠れ3名、中忍確實ってな」
あの程度の挑発に乗る奴が無理に決まってるだろ。

ていうか何でこの世界の忍者はやたら自己主張が強い奴等ばっか
何だろう。

俺みたいに大した個性が無い奴こそが忍者らしいと思うんだが…。

18 第一次試験

「静かにしやがれどぐされヤローどもが!」
デカイ煙と一緒にデカイ声が響いた。

「な…何だ?」

周りの受験生達も驚く。

煙が消えるとそこには同じ服を着て木の葉隠れの額当てを着けた男女がかなりの数いた。

何でコイツ等もいちいちデカイことやるかな…。まあ今回は暴走を抑えるためというのもありそうだけど。

「待たせたな…。中忍選抜第一の試験」試験官の森乃イビキだ…
その雰囲気には受験生達は飲み込まれる。

イビキは音忍を指差して

「音隠れのお前ら!試験前に好き勝手やってんじゃねーぞコラ。いきなり失格にされてーのか?」

「すみませんねえ…なんせ初めての受験で舞い上がってしまいました…つい…」

「フン…いい機会だ、言っておく。

試験官の許可なく対戦や争いはありえない。また、許可が出たとしても相手を死に至らしめるような行為は許されん。

オレ様に逆らうようなブタ共は即失格だ。分かったな」

それって結構難しいよな。殺してはダメってかなり制限つくし。

まあ、一次試験なら問題無いけど。

「ではこれから中忍選抜第一の試験を始める…。志願書を順に提出して代わりにこの…座席番号の札を受け取り、その指定通りの席に着け!その後、筆記試験の用紙を配る」

まさかのペーパーテストに驚く者達もいた。

特にナルトは「ペツ…ペーパーテストオオオオ!!」と叫ぶ。

各自志願書の代わりに受け取った座席番号に従い着席すると見事に班員とバラバラになった。

そして次に試験官が試験用紙を各席に置いていく。勿論裏表紙で。「試験用紙はまだ裏のままだ。そしてオレの言うことをよく聞くんだ。」

この第一の試験には大切なルールってもんがいくつかある。黒板に書いて説明してやるが質問は一切受け付らんからそのつもりでよく聞いとけ」

「第1のルールだ！まずお前らには最初から各自10点ずつ持ち点が与えられている。筆記試験問題は全部で10問。各1点…。そして試験は減点式となってる。つまり問題を10問正解すれば持ち点は10点そのまま、しかし問題で3問間違えれば持ち点の10点から…3が引かれ7点という持ち点になるわけだ」

「第2のルール…。この筆記試験はチーム戦。つまりは受験申し込みを受け付けたチームの合計点数で合否を判断する。

つまり合計持ち点をどれだけへらさずに試験が終われるかをチーム単位で競ってもらおう」

幸いにも俺達は4人1組だから他チームよりも持ち点が多い。だからサクラも別に慌てない。仮にナルトが0点でも俺達でカバー出来るからな。

「第3に、試験途中で妙な行為、つまり「カンニング、及びそれに準ずる行為」を行ったとここにいる監視員たちに見なされた者は…その行為1回につき持ち点から2点ずつ減点させてもらう。つまりこの試験中に持ち点をすっかり吐き出して退場してもらう者も出るだろう」

「いつでもチェックしてやるぜ」
さつき変化で下忍に化けていた中忍が言う。

「不様なカンニングなど行った者は自滅していくと心得てもらおう。」

仮にも中忍を目指す者。忍なら……立派な忍らしくすることだ」
立派な忍がいるはず無いけどな。忍なんて作業員と同じだぜ？

「そして最後のルール……。この試験終了時までには持ち点を全て失った者：および正解数0だった者の所属する班は：全員道連れ不合格とする！！」

その言葉にサクラとサスケは動揺する。何せ自分達の班にはガンがいるからな。

「試験時間は一時間だ。

よし…始める！！」

その言葉と同時に全員がプリントを表にする。

しかし第1問目が暗号文か……。

様々な書物をコピーしてきたけどそれは忍術とか忍関係の事ばかりだからこういう普通の勉強はサツパリ分らない。ヤベエ、何か学生時代を思い出す。

ていうかただか12、16、7ぐらいの奴等に高等数学の問題解かせるなよ。無理に決まってるだろ？

別に問題を解く必要は無いがこのまま何もしないのはヒマだから俺もカンニングするか。

『完全なる隠匿』を発動させてる影分身を使い、堂々とカンニングする。

確か背中に勉とか書いてある奴が答えを全部知ってる筈だからそのつこの答案を全部見えてきて、見終わったら分身を解いて情報を取り込めば良い。後はその通りに丸写しすれば終りだ。

しばらくして影分身が見終わったのか情報が入ってきたので答えを全部書いてプリントを裏返す。カンニング防止のためにな。

何人か俺の答えを覗こうとしていた奴等がいたからな。
後はただ待つてれば良い。

「102番、立て、失格だ」

「ちつ…ちくしょう…」

「23番失格！」

「嫌だ〜〜！！！」

「43番と27番失格！」

次々失格者が増えていく。

その時、バン！！というデカイ音を鳴らして砂隠れの奴が立ち上がる。

「オレが5回もカンニングした証拠でもあんのかよ！！

アンタらホントにちゃんとこの人数を…」

抗議してきた砂隠れの下忍を瞬身で移動した木の葉の中忍が壁に叩きつける。

「ぐっあー！！」

「いいかい…私達は中忍の中でもこの試験の為に編成されたエリートなのだよ。君の瞬き一つ見落としてはしないんだよ。

言ってみればこの強さが証拠だよ」

スゲエ理論だな。まあそう言うしか無いしな。

でもチエックされてない奴等のは分かってないのだろうからそこまですぐで実力は無さそう。

「よし！これから第10問目を出题する…。…とその前に最終問題についてのちよつとしたルールの追加をさせてもらう」

その言葉に下忍達は動揺する。突然ルールが追加されるなんて堪ったもんじゃないからな。

その時、丁度カンクローが監視員に化けた人形と一緒に戻って来た。

「フ…強運だな。お人形遊びがムダにならずにすんだなア…？」

まあいい座れ」

「では説明しよう。」

これは…絶望的なルールだ。

まず…お前らにはこの第10問目の試験を…受けるか受けないかのどちらかを選んでもらう…！」

「え…選ぶって…！もし10問目の問題を受けなかったらどうなるの…？」

「受けないを選べばその時点でその者の持ち点は0となる…。つまり失格！もちろん同班の全員も道連れ失格だ」

「ど…どうということだ…？」

、 「そんなの受けるを選ぶに決まってるじゃない…！」

「…そして…もう一つのルール。」

受けるを選び…正解できなかった場合…その者については今後、永久に中忍試験の受験資格を剥奪する…！」

別に俺は良いんだけど。その方がありがたいし。

「そ…そんなバカなルールがあるかあ…！現にここには中忍試験を何度か受験している奴だっているはずだ…！」

「クク…ククククツ。」

運が悪いんだよ…お前らは…今年はこのオレがルールだ。

その代わりに引き返す道も与えてるじゃねーか…！」

「え…？」

「自信のない奴は大人しく受けないを選んで…来年も再来年も受験したらいい。」

……では始めよう。

この第10問目……受けない者は手を挙げる。番号確認後、ここから出てもらおう」

にしてもやっぱ矛盾があるな。

今年はおレがルールとか言ってもたかだか特別上忍ごときが他国の

忍達の受験資格を奪うなど不可能。

もしもその国々のトップ達が出て来て宣言したらかなりの説得力があるがな。流石にそれなら誰もが信じるだろう。

これを言えば全員合格も可能だが別にする意味無いから黙っとく。

しばらく誰も手を挙げなかったが、遂に1人が手を挙げた。

「オ……オレはっ……。……やめる！受けないッ！」

す……すまない……！！源内！！イナホ！！」

初めての脱落者。

この空気で手を挙げるのはとんでもない勇気と決断力が必要だ。素直に賞賛する。

1番始めと2番には大きな大きな差がある。正直、2番目からは情性で進む。

重さが全然違う。現に1番始めにリタイヤした奴等のガツクリさ半端無かった。

次々に我も我もとリタイヤしていく者が続く。1番始めの奴等みたいなガツクリ感や喪失感はほとんど無く、帰っていく。所詮他者に追従していく事を選んだ奴等。

まあ、社会で生きていくならその方が生きやすいし、残れるからあながち間違っちゃいないけど。

脱落していく奴の波が消えて、また静かな感じになった所でナルトが手を挙げた。

リタイヤかと思いきや手を机に叩きつけて

「なめんじゃねー！！！！オレは逃げねーぞ！！」

受けてやる！！もし一生下忍になったって……意地でも火影になってやるから別にいいってば……！！

怖くなんかねーぞ……！！」

いきなりの決意表面。そして何と自己中心的発言。他の班員の事なんて欠片も考えていないんだろう。

何でこんな奴が主人公なんだろう？ 明らかにジャンプ物に必要な友情が欠けてるぞ？

努力もしてないし。唯一合ってるのは勝利だけだ。

「もう一度訊く…。人生を賭けた選択だ。やめるなら今だぞ」

「まつすぐ自分の言葉は曲げねえ…。オレの忍道だ！！」

だったらお前、火影にならない方が良い。

だって国のトップは妥協が最も大事なんだぞ。独裁者だって妥協しないと国が成り立たない。それは歴史が物語っている。

俺が皇帝してた頃だって好き勝手してたよって結構妥協してた。理想は叶うものじゃ無いからな。

しかし周囲はナルトの言葉に感化されてるのか不安がる顔は明らかに減った。

「いい決意だ。」

では…ここに残った全員に……………「第一の試験」合格を申し渡す

！！！！」

「！！！！」

全員がいきなりの言葉に呆然とする。

「ちょ…ちょっと、どういうことですか！？ いきなり合格なんて

！10問目の問題は！？」

「そんなものは初めから無いよ。…言ってみればさっきの2択が10問目だな」

さっきまでの雰囲気とは違ってかわって笑顔で言うイビキ。雰囲気変わりすぎ。

「え！！？」

「ちょっと…！じゃあ今までの全9問は何だったんだ…！？

まるで無駄じゃない！」

「…無駄じゃないぞ。9問目までの問題はもうすでにその目的を遂

「上げていたんだからな……」

「質問したテマリはまだ分からない。」

「君達個人個人の情報収集能力を試すという目的をな！」

「?…情報収集能力？」

「イビキがこの試験についての説明をするが受験生達はまだ納得していない。」

「じゃあ…こんな2択はどうか…キミ達が仮に中忍になったとしても……。任務内容は秘密文書の奪取……。敵方の忍者の人数・能力・その他、軍備の有無一切不明。さらには敵の張り巡らした罠という名の落とし穴があるかも知れない……。」

「さあ…受けるか？受けないか？」

「俺1人なら受けるかもな。それなら敵も罠も無意味だ。」

「命が惜しいから……。仲間が危険にさらされるから……。危険な任務は避けて通れるのか？」

「答えはノーだ！」

「ヒデエな。」

「だから下忍以上にはなりたくないんだ。拒否権が無くなるし、責任問題が発生するからな。」

「どんな危険な賭けであっても、おρίることのできない任務もある。こゝ一番で仲間にも勇気を示し……苦境を突破していく能力、これが中忍という部隊長に求められる資質だ！」

「いざという時、自らの運命を賭せない者、来年があるさと不確定な未来と引き換えに心を揺るがせ…チャンスを諦めて行く者。」

「そんな密度の薄い決意しか持たない愚図に中忍になる資格などないとオレは考える……！」

「まさに俺の事を言ってるのか？と思える言葉だな。」

「残念ながら俺は無理なら諦める派だけどブレてはいないぜ？どんなときも自分優先。」

道路標識みたいこれには譲らない。

「受けるを選んだ君達は難解な第10問の正解者だと言っでいい！これから出会うであろう困難にも立ち向かっていけるだろう…。入り口は突破した…「中忍選抜第一の試験」は終了だ。キミ達の健闘を祈る！」

「おっしやー！ー！！祈つててー！ー！！」
合格と分かったのでハイテンションになるナルト。

全員がホツと一息ついている時にガシャン！！と窓を割りながら黒い塊が侵入して来た。

そして黒い塊からクナイが2本飛び出し、天井に突き刺さり、黒い布を両方に引つ張り、広げる。

そこには第2試験官、みたらしアンコ見参。

という明らかに前もって準備していたんだろう紹介文があった。

「アンタ達よろこんでる場合じゃないわよ！！」

私は第2試験官！みたらしアンコ！！次、行くわよ次イ！！！！
ついてらっしやい！！！！」

片手を挙げてカツコ良くポーズを決めるが、いきなりの紹介に全員ポカーン状態。

いつの間にか布に追いやられていたイビキが布の端っこから半身を出して

「空気読め…」

と言う。

それに自覚があったのかアンコも顔を赤める。アウエー感は分かるらしい。

アンコは会場を見渡して

「79人…！！？」

イビキ！26チームも残したの！？

今回の第一の試験…甘かったのね！」

「今回は…優秀そうなのが多くてな」

「フン！まあいいわ…次の「第二の試験」で半分以下にしてやるわよ！！」

ああ〜ゾクゾクするわ！

詳しい説明は場所を移してやるからついてらっしゃい！！」

アンコに連れられて教室を後にする受験生達。

遂に本番だ。波の国なんか比較にならない程ヤバいからな。

ここからはリアル忍者並みに警戒して気配を消して極力目立たないようにしなくては。

アンコに案内された場所は目の前に金網が張られて嚴重にロックされた樹海があった。

何か屋久杉みたいな木で森が形成されてんだけど？

日本が誇る世界遺産が何か小っちゃく見える。

「ここが「第二の試験」会場、第44演習場…別名「死の森」よ！」

なんとベタな名前。必ずこういう森あるよな。

「ここが死の森と呼ばれる所以、すぐに実感することになるわ」
その言葉に何故かナルトがムスツとして

「「死の森と呼ばれる所以、すぐに実感することになるわ」

なーんておどしてもぜんっぜんへーき！怖くないってばよ！」

「そう…君は元気がいいのね」

ニコツとアンコは笑うがクナイを取り出し、ナルトに投げた。

そのクナイはナルトの頬を掠め、皮膚を切った。そしてクナイはナルトの後ろにいた番傘を被った下忍？ の長い髪も一本切った。

「アンタみたいなのが真っ先に死ぬのよねエ、フッフ…」

私の好きな赤い血ぶちまいてね」

ナルトの後ろに瞬身で移動したアンコはナルトの頬の傷から滴る血を舐める。

その瞬間、アンコの背後から殺気を感じてアンコはまたクナイを取り出して攻撃しようとしたら

「クナイ…お返ししますわ」

長い長い舌でクナイに巻き付け、アンコにそのまま渡す。

「わざわざありがと」

アンコも笑顔で受け取る。

まさに師弟だな。発想が似てる。

ピーーンと張り詰めた空気が出来たが

「でもね…殺気を込めて…私の後ろに立たないで。早死にしたくなければね…」

アニコはクナイを受け取る。

「いえね…赤い血を見るとついウズウズしちゃう性質でして。

…それに私の大切な髪を切られたんで興奮しちゃって…」

そう言つて長い舌を口に戻す。どうやって長い舌を収納してるんだ？

「悪かったわね。

どうやら、今回は血の気の多い奴が集まったみたいね…。

フフ…楽しみだわ…」

何が楽しみなんだか。凡人の俺には理解不能だ。

「それじゃ、第二の試験を始める前にアンタらにこれを配っておくね！」

懐から紙の束を出す。そこには大きく同意書と書いてある。

「同意書よ。これにサインしてもらおうね。」

…こつから先は死人も出るからそれについて同意をとつとかないとね！私の責任になっちゃうからさ…」

アハハ。と笑顔でアニコは告げる。受験生の大半の顔が青ざめる。

「まず第二の試験の説明をするから、その説明後にこれにサインして班ごとに後ろの小屋に行って提出してね」

同意書が配られた。内容を読むと如何なる怪我、もしくは死亡したとしても自己責任という内容だった。ヒデエな。

「じゃ！第二の試験の説明を始めるわ」

アニコの説明によるとこの森の中央の塔を目指すこと。

森は円状になっていて塔までの距離は約10km。

そして天の書と地の書の巻物を揃えて5日以内に塔に集合する。

スタートは同意書と巻物を交換する際に44個あるゲートのいずれ

かに振り分けられる。

巻物は1チームに天か地の巻物を渡すから奪い合え。

ちなみに巻物を途中で開けてはいけない。開けた時の罰則は開けてのお楽しみ。

食料などは自給自足。完全サバイバルで行う。森には人食い猛獣や毒虫、毒草が多々あるので注意。

失格条件は時間内に巻物を揃えて塔まで3人もしくは4人で持つてこれなかったチーム。

班員を失ったか再起不能者を出したチーム。

途中ギブアップは認めず、5日間原則森から出られない。以上だ。

俺達は天の書を手に入れて12番ゲートに待機になった。

そして開始時刻になりゲートが開けられた。

「よっしゃあ!!行くぞ!!」

ナルトが何時も通り氣勢を上げる。それは通過儀礼なのか?

しばらく進んでいるとうわあああ!!という悲鳴が聞こえた。

「!!」「……今の人の悲鳴よね!？」

サスケとサクラが反応する。

「…な、…なんか緊張してきた……」

「ど…ど…ってことねーってばサクラちゃん!」

ナルトは強がるが確実にビビっている。

「……オレってばちつとしょんべん……」

ナルトは目の前の草に向かって立ち小便をしようとしたがその前にサクラが殴った。

「レディの前で何さらそうとしてんのよ!!草陰行きなさいよバカ

!!」

「テェー!!」

殴られたナルトは素直に奥の方の草陰に入る。

少しした後

「あーすっげー出た〜。すつきりー!!」

草陰から出てきたナルトは明らかに変だった。

「だからレディの前でそーいう……」

サクラがまた殴ろうとしたらその前にサスケがナルト？ の顔に回し蹴りをかました。

「サ…サスケ君…いくらなんでもそこまでしなくたって…」

何も知らないサクラはサスケを諫めようとする。

「な…なにすんだってばよ!!」

ナルト？ が立ち上がる。

「本物のナルトはどこだ！」

「え!？」

「きゅ…急に何わけわか…」

ナルト？ がしゃべろうとしたらサスケが遮る。

「手裏剣のホルスターが左足についてる。あいつは右利きだ。

それに決定的な違いはさつきあの試験官につけられた傷跡がお前にはない…。てめーはナルトより変化がヘタだなニセ者ヤロー」

サスケのその言葉にこれ以上は無理と悟ったのか変化を解き

「アンラッキー！バレちゃ仕方ねえ!!巻物持ってるのは誰だ!？」

中途半端なガスマスクを着けた雨隠れの忍が現れた。

その言葉に全員が戦闘体制を取る。

すぐに殺せるけどコイツを殺す事によってほんの僅かでも大蛇丸に注目されたくないからただ黙って見てる。

雨隠れの忍がこっちに突っ込んで来たらサスケはジャンプして火遁、鳳仙花の術で火の玉を数個吐いて攻撃するが全部避けられ、クナイでの戦闘になった。

サスケが敵を追撃するとそこには

「サスケー!!」

簀巻きにされたナルトが横たわっていた。

見捨てりや良いのにサスケはナルトにクナイを投げて渡す。

「ほらスキができたあ、ラッキー!!!」

雨隠れの忍はナイフやクナイを数本投げる。

サスケは木に隠れてやり過ぎすが、そのクナイには起爆札が仕込まれていたので爆発した。

それを避けるためにサスケは態勢を崩しながら着地する。

「これぞラッキー！動くときと殺す！巻物をおとなく渡せ!!!」

サスケの背後に回りクナイで脅す。確かに殺したら人質にならないからそうするしかないな。

まあ、俺なら全員殺してから荷物を探るけど。

しかしその時、やっと縄から脱出したナルトが雨隠れの忍に向かってクナイを投げた。

敵はそれを避けようとジャンプした。サスケはナルトが投げたクナイに片足で乗り、チャクラで吸着させてクナイを敵に向かって蹴り上げた。

敵はそれを何とか避けたが、その機動を読んでいたサスケによって利き腕である左腕をクナイで刺された。

「サ、サスケ君……」

サスケのいきなり攻撃に戸惑うサクラ。何でこの程度に戸惑うかな？

「手荒いがこうするしかなかった……！ボケボケすんな！こいつ1人とは限らない……」

いいか！気をぬいたら本気で殺されるぞ!!!」

今更な事を宣言するサスケ。イヤ、その前にお前こそちゃんと殺せよ。

普通に目とか首を刺せば殺れたのに。

利き腕を潰された敵は形勢不利と見たらしく去っていった。あれこそ忍者だな。勝てないなら早急に撤退すべきだ。

とりあえず全員で集まり

「いったん4人バラバラになった場合、たとえそれが仲間であつても信用するな。今みたいなことになりかねない」

「それじゃどーするの?」

「念のため合言葉を決めておく。いいか…合言葉が違った場合はどんな姿形でも敵とみなせ!

よく聞け、言うのは一度限りだ…忍歌『忍機』…と問う。その答えはこうだ。

大勢の敵の騒ぎは忍びよし、静かな方に隠れ家なし、忍には時を知ることこそ大事なれ…敵のつかれと油断するとき」

「OK!」、「……。」、「分かった。」

サクラは覚えられたようだがナルトはサッパリらしい。

「…またまたあ、そんなの覚えられるわけないじゃん」

ちよつと焦りながらナルトは言う。

「アンタバカね。私なんて即覚えよ」

サクラが自信満々に言う。座学や暗記が得意だったからな。

俺は原作から微妙に覚えてるから繋ぎ合わせれば多分イケる。

「オイ…ホントこの合言葉で…」

ナルトが無理だと言おうとしたが

「巻物はオレが持つ!」

とサスケが打ち切る。

その瞬間、いきなり風が吹いてきて、すぐに突風が変わった。明らかに自然現象じゃない。

「新手か!?!」

サスケは風が吹いてくる方向を見るが風が強すぎて全員吹っ飛ばされた。

気付いたら俺は結構飛ばされたらしいな。

と言っても精々100m前後。周りは相変わらず原生林だ。幸いにもナルトの方とは違い、デカイ蛇はいないから問題無い。本来なら仲間と合流するべきだが勿論そんな事はしない。ていうかこれを待っていた。

このまま戻れば大蛇丸との戦闘に巻き込まれてしまう。だから少なくとも俺はサスケに呪印を埋め込められて大蛇丸が退散するまでは絶対に戻らない。

ついでにその後の音忍との戦闘も参加しない。だって覚醒したサスケのとばっちりを受けたくないし。

さて、とりあえず念のために『完全なる隠匿』を使って姿を消して、あの雨隠れのチームを見つけよう。

俺達の天の書は大蛇丸に燃やされるし、地の書は音忍から貰い、原作では最後に雨隠れの奴等から天の書を奪ってクリアするんだから時間節約のためにアイツ等を狩る。

まだ1日目だから探せるだろう。多重影分身と『完全なる隠匿』の併用すれば搜索範囲は広大になる。

主人公組が地の書を手に入れる頃には見つけてる筈だ。

20 第二次試験 下

あの後、影分身と隠匿を併用して森中を探した結果、あの雨隠れのチームを見つけた。

まだサスケから受けた負傷が治っていなかったからか、現在は3人で固まってる。

会話を聞くと

「アイツ等よくもやってくれたな…。この借りは必ず返してやる！」という復讐宣言をしていた。

残念ながらそれは無意味になるんだがな。

気付かれたく無いから影分身を3体配置して一斉に首をハネた。

「とりあえず今は傷の回復に専…」

会話途中に一斉に首が飛んだ様子はちよつと面白かったらしい。

その後首が無い死体を漁り、天の書を手に入れた。

思ったより早く終わったな。

まあこの森は半径10kmくらいしか無いから人海戦術を使えばこんなもんか。

さて、とりあえずあれから1時間は経ったからもう大蛇丸はいないだろう。

アイツ等探すか。

搜索して更に1時間。

ようやく発見した。

どうやら原作通りサスケに呪印が与えられたらしい。

サスケは何かうめいてるし、ナルトはただ単に気絶している。

その二人をサクラが大木の根で出来た空間に隠れながら看護している。でも警戒して気を張ってるから逆に分かりやすい。それにかなり疲れているらしくたまに眠りそうにもなってる。あの状態じゃあ思考能力が低下してロクに戦えないぞ？ そちらに罠を仕掛けてあるけどアカデミーレベルの下級なモノばかり。もつとベトコンみたいに殺傷力がある罠を張れば良いのに。

更に危険な事に、俺の他に音忍の奴等にも監視されてる。

始末しても良いんだけどこの原作部分を変える必要は無いから無視だ。とりあえずサスケが覚醒するまでは待機だ。

夜が明けて日が昇って来た。

さつき起爆札を仕掛けられたリスがサクラの元に来たから間もなく攻撃が始まる筈だ。

音忍の1人は広範囲攻撃が得意な奴がいるから気を付けない。『完全なる隠匿』は完璧に気配を消せる代わりに攻撃はそのまま受けるからな。

相手に俺を攻撃した認識は無いけど。

サクラがまたうとうととしてきた頃、ようやく音忍が出て来た。にしても何でわざわざ全員で出てくる？

1人がサクラを相手して2人でサスケとナルトを殺せば良いのに。ていうか話しかけずに奇襲かければサクラなんて簡単に殺せる。何でこの世界の忍者は忍ばないんだらう？

ちなみに今はサクラが大蛇丸についてを聞いているところだ。大蛇丸という名前にわざわざ反応する音忍に呆れた。

なに自分達のボスの名前を聞いて動揺してんの？ そこは「大蛇丸？ 誰？」と惚けるべきだろ？

そしてようやくお互い戦闘体制をとった。その様子は所詮喧嘩レベルだ。

音忍がサクラが仕掛けた見え見えの落とし穴を暴露して良い気になり、一気に仕掛けようとしたら本命のトラップである大木の丸太が飛んでくる罠に引っかけた。にしてもあんな大木どうやって仕掛けたんだ？

しかし音忍の1人が丸太をいとも容易く破壊したので何ら被害は無い。

その事にサクラが驚愕していると

「はつきり言って才能ないよ君は…。そういう奴はもっと努力しないとダメでしょ？ 弱い君がボクらをナメちゃいけないなあ!!」
と音忍は勝ち誇る。

お前達だって舐めすぎ。俺みたいに例え相手がガキでも本気で殺すみたいにしなないと結構簡単に返り討ちにあうぜ？

ほらリーに蹴られた。

いきなり出て来て

「だったら君達も……努力するべきですね!」

かっこつけるリー。さっきので最低1人は殺れたのに…。少なくともあの音忍の女は完全に無防備だったから蹴りで首の骨を折るくらいは出来た。

「な…何者です!？」

「木ノ葉の美しき碧い野獣…ロック・リーだ!」

何ヒーローみたいにかっこつけてるん？ お前自分が忍者だつてこと忘れてねえか？ ていうかお前のどこに碧があるんだよ？

「な…何であんたがここに…」

サクラの最もな質問に。

「ボクは…アナタがピンチの時はいつでも現れますよ」

サクラは「はあ？」みたいな顔をする。

「…とにかくありがと…助かったわ!」

とりあえず礼をするサクラ。助けて貰ったのは事実だからな。

「前に一度言っただしょ?」

「……え?」

「死ぬまでアナタを守るって…」

ドラマじゃないんだぞ? 何戦闘中に決めゼリフかましてんだよ。

確かに女を落とすには良いかも知れんが。

でもガッツポーズかますのはどうかと思うがな…。せめてそういうのは完全に1人になった時にやれよ。

ようやくマトモな戦闘が始まった。

顔が包帯だらけな音忍がリーにご自慢の音の振動をかまそうと思っただが前に見たことのあるリーは警戒して地面に手を突き刺して大木の根を掴んで地面から引きずり出して防御する。

見事に巨大な根が大きくえぐれた。あの威力はなかなかだよな。

リーは流石に3対1、更に足手まといのサクラや動けないサスケやナルトがいる状態では余裕が無いから本気でやるようだ。

包帯を少し解いて長いヒモにした。

そして音忍が攻めてきた時に何か印を結んだ瞬間、爆発的に速くなっただ。

あれが蓮華か。流石にコピーしてもあれは使わない。リスクが高すぎるし。まあ『都合の良い祝福』を使えば体は治るけど。

リーは敵を蹴り上げ、更に加速して背後に周り包帯で拘束した。手まで完璧に拘束してるからありゃあ解けない。

そして後ろからリー自身で拘束して完全に動けなくして更に回転をかけてる。あの回転と落下速度で頭から地面に突撃したら間違いない死ぬ。

「あれじゃ受け身もとれねえ!!!ヤ…ヤバイ!!!」

仲間の音忍が印を結んで地面に手を突き刺す。

その瞬間、リーが敵を地面に突き刺すけどその威力の割に音が小さすぎる。

音忍は犬神家みたいに地面に突き刺さったけど無事出て来た。

「フー…」。

恐ろしい技ですね…。ザクが土をスポンジにしてくれなかったら即死でしたね」

土に手を突き刺しているザクは「やれやれ…どうにか間に合ったぜ…」と一安心してる。

一方、リーは「バ…バカな!」と驚愕している。完璧に決まったからな。だれでも仕留めたと思うだろう。

「次はボクの番だ…」

包帯の音忍がご自慢の籠手を出す。

そしてリーに攻撃をするがリーは軽く避ける。

しかし避けた筈のリーは殴られたようにグラつき、左耳から血が流れている。鼓膜が破れたかな？

サクラは何をしたのかと聞くと何故か音忍はわざわざ自分の能力を自慢するかのようの説明する。

何でアドバンテージを自分から捨てる？ そのまま攻撃すればまだメカニズムが分かってないリーやサクラを簡単に殺れるのに。

更にもう一人の音忍も地面をスポンジに変えた方法や自分が出る事を説明する。コイツら勝つ気あんのか？

その後はありがちな展開だ。

リーが平行バランスが取れないにも関わらず果敢に攻撃するがやはりダメージのせいか動きが鈍く簡単に見切られる。籠手がついた右腕で音忍は殴りにかかるがリーは何とか防御する。

しかしそれは防御になっておらず、音がリーを襲い、リーはたまらずうずくまり、吐く。

その後はサクラがクナイや手裏剣で攻撃するが軽く防がれる。まるでうるさい虫を相手にするように。

サクラは音忍のくのゝ、キンに髪を掴まれ動きが止まる。

「私よりいい艶してんじゃない…コレ。」

フン…忍のくせに色気付きやがって…髪に気を使うヒマがあったら修行しろこのメスブタが…」

キンが嫉妬からか更にサクラの髪を強く掴む。

確かにあんな長い髪は忍には邪魔だよな。潜入するときには芸者にも変装するなら話は別だけど。

「ザク…この男好きの目の前でそのサスケとかいう奴を殺しなよ。」

こいつにはちよつとした…余興を見てやるよ」

見事に自分で死亡フラグを立てたキン。さつさとサクラの首を狩ればいいのに。

「お！いいねー！」

賛成するザク。

「オイオイ…」

面倒くさそうな声を上げる包帯の音忍。いやドスだっけ？

そうしている内にサクラが何か決めたような目をしてクナイを取り出す。

「ムダよ！私にそんなものは効かない」

キンが嘲るが。

「何を言ってるの？」

サクラはニイツと笑い掴まれている髪を切った。おかげで脇だけ長い中途半端なシヨートになった。

「チイ！」

キン！殺れ！！」

ザクが何故か驚いて動きを止めているキンに言う。キンもその言葉に干本を取り出してサクラに突き刺そうとするがその前にサクラが変わり身の術の印を結ぶ。

キンがサクラに千本を突き刺した瞬間、丸太に変わった。

サクラはキンを避けてザクに接近し小さいクナイを8本程投擲するが空気に弾かれ逆にサクラを襲うがまたもやその前に変わり身をやって防ぐ。

基本通りに上に避けたサクラをザクは簡単に見抜く。サクラはまた変わり身の印を結ぶ。

「2度も3度も…通用しねーって言ってんだろーうが！！」

「てめーはこれで十分だ！！」

ザクは空気圧ではなくクナイを投げる。

それがサクラに刺さる。ザクはまた変わり身だと思い本体をまた探すがいいない。そしてサクラの血が自分にかかり、本体だと悟った時には既に避けれる距離になく、サクラはクナイで首を狙うがザクは何とか腕で防ぐ。

そしてサクラは何を思ったのか今度はザクの腕に噛みついた。

何がしたいんだアイツ？

攻撃に失敗したなら直ぐに引けば良いのに。おかげでザクに顔を殴られて血だらけだ。

まあ、噛みつかれたら誰だって噛みついた奴の顔を殴るわな。

しばらくサクラも耐えていたが限界が来たのか殴り飛ばされ、ザクが「このガキイ！！」と構えた瞬間、今まで見ていたいの達が参戦した。

と言っても参戦したのはいのとシカマルだけでチョウジはマフラーをシカマルに引っ張られて無理矢理出された。

突然、自分の前に現れて敵の攻撃を遮ってくれた存在にサクラは

「いの…どうして？」

「サスケ君の前でアンタばかり、いい格好はさせないわよー！！」

照れ隠しなのか本音は言わないの。

「またウヨウヨと…木ノ葉の小虫が迷い込んできましたね」
ドスが睨み付ける。

それに反応してチヨウジが自分の仲間達に抗議する。
しかしいのとシカマルは却下する。

そこにある意味救いの言葉が来た。

「クク…お前は抜けたっていいんだぜ。おデブちゃん」

しかしチヨウジには違う意味で変換されたらしく

「え？ いま何て言ったのあの人…。ボク…あんまり聞き取れなかつたよ……」

「あ！？ 嫌ならひっこんでろつったんだよ。このデブ…！」

ザクの言葉にいきなりチヨウジは震え出し、そして

「ボクはデブじゃない！！ポツチャリ系だ！コラー…！！」
ブチ切れた。

チヨウジは「うオオオ！！ポツチャリ系バンザイ！！」と叫んでいる。

まあ、秋道一族なら能力的には仕方ないが、確かにデブだ。ていうか忍がデブで良いのか？どう考えても動きが鈍そう。

チヨウジが切れた事で戦闘が勃発。

チヨウジが倍化の術で肥大化してどうやってるのか分からないが亀みたいに頭や手足を収納して転がりだした。

見た目は酷いが威力は凄まじい。現にザクが空気圧で止めようとしたが回転のせい効かない。

ドスが自分の能力である超音波なら有効だろうとチヨウジに近付くが、シカマルの影真似の術でドスの動きを止める。

それどころか両手の先を頭の上に乗せるといふざけた格好までさせられる始末。

それにはキンが「！？こ…こんな時に何をやってる…ドス！」と怒る。理不尽だろ…。

そして最後にいのがキンに心転身の術でキンの精神を操る。
木ノ葉ならいの達の勝利で間違いないだろう。

しかし相手は平和ボケした木ノ葉の忍ではなく、小国故に常に緊張状態で生活している音の忍だ。

ザクは操られているキンに向かって空気圧を放ち、木に叩きつける。そのせいで本体であるいのも血を吐く。

更に厄介な事にシカマルの影真似の術が解けてドスが自由になった。

この最悪な事態をどうするか悩んでいたが、また救いの手が差し伸べられる。

「フン……気に入らないな……」

マイナーの音忍風情が……そんな2線級をいじめて勝利者気取りか」
いつの間にかリーのチームメイトであるネジとテンテンがいた。

だから何でわざわざ話しかける。お前らならコイツらを瞬殺することも可能なのに。

オマケに自分が圧倒的強者であるかのような宣言。いかにも田舎者が言う言葉だ。

「ワラワラとゴキブリみたいに出てきやがって……」

ザクがイライラしながら言う。確かにここまで来るとウザイよな。

「そこに倒れてるオカッパくんはオレ達のチームなんだが……」

好き勝手やってくれたな……！」

白眼を発動させて睨むネジ。あの目って発動する度に血管が浮き出るけど、明らかに目に悪いよな。いつか失明するんじゃない？

ネジが格好良く決め、いかにもこれからネジのターンの始まりかと思いきやアイツが起きた。

まるで何かの病気か？ それとも趣味が悪いタトウーを入れているように左半身に変な斑点模様が浮き出ている。微妙に格好良くもない。

「サクラ……誰だ……お前をそんなにした奴は……」

立ち上がりサクラに聞く。それにサクラは呆然として答えられ無い。

状況を分かってないのかザクが「オレらだよ！」と何故か自慢気に言う。明らかにヤバイフラグ立ってるのが分からないのか？

自分が立てた死亡フラグのせいでサスケが音忍3人を標的に決める。まだいのがキンの体の中にいたから急いで心転身を解いて自分の体に戻る。

サスケは何かを溜めるように歯を食いしばる。すると左半身にしか無かった呪印が右顔にも現れた。一気にチャクラ量がハネ上がる。ある意味ドーピングか？

「チャクラがデカ過ぎる」

ドスはヤバイと確信したが

「ドス！こんな死に損ないにビビることあねえっ！！」

何故か強気なザクが印を結ぶ。

「よせ！ザク！分からないのか！」

ドスが必死に止めるがそんなの関係無いと言わんばかりにザクは両手をサスケに構えて今までより遥かに威力が高い風と超音波を出す。その凄まじい威力に地面がえぐれ、線上にあった木々がなぎ倒される。

「へっバラバラに吹っ飛んだか」

ザクが自信満々に言うがいつの間にか後ろにいたサスケによって殴り飛ばされる。

にしてもスゲエな。あの攻撃の線上にいたサクラとナルトを抱えてザクの後ろに移動しやがった。明らかに下忍の速さじゃない。

サスケは印を組み、火遁、鳳仙火の術をした。

それにザクはご自慢の扇風機で火をかき消すが火の中に手裏剣が混ざっており、手裏剣の攻撃をモロに浴びる。

防御体制を取ったために出来た隙間にサスケがまた速く移動した。

「！！ザク！！下だっ！！」

ドスが急いで警告するがザクが反応する前にサスケに両腕を拘束され後ろに回られた。

「クク…。お前…この両腕が自慢なのか…」
そう呟いた後に思いつき踏み込みながら腕を引つ張りザクの両腕を破壊した。

「ゴキー！、ボキー！という音がしたから多分関節が破壊されたらしい。でも関節を破壊するより引きちぎった方が後々楽になるのに。」

「ぐおおおおおああー！」
痛みのためか叫ぶザク。

それを見て涙目になるサクラ。

何で？ 波の国で人が死ぬのを見てきてんだからそんなに驚く事か？

「残るはお前だけだな…。」

お前はもつと楽しませてくれよ…」

標的をドスに変える。ドスはビビってる。

呪印を使っても相変わらず甘ちゃんだな。殺さないといつか復讐しに来るかも知れないのに。

普通の世界ならあんなふうに関節を破壊されれば障害が残って日常生活にも支障を来す恐れがあるが、この世界の医療忍術や技術、そして忍者の体の構造なら十分短期に治せる。実戦不足により甘い見通しかな？

さて、また拷問劇場が始まるのかと思いきや

「やめて！！」

サクラが後ろからサスケに抱きつく。

サスケが何かと後ろを見るとサクラも見返して

「おねがい…やめて…」

という素晴らしき友情と偽善を見せてくれた。

そのおかげが呪印が引いていきサスケは元の状態に戻る。

何か見飽きた光景だな。

「くっ…」

呪印が切れたサスケは座り込む。まるで薬が切れたジャンキーだな。これをチャンスと見たドスは自分達の地の書を置いていく代わりに

仲間を抱えて撤退した。

サクラが大蛇丸の事や呪印の事をドスに問い詰めたがドスは分からないと言って去った。

大蛇丸は普通勉強すれば分かるだろう？ 伝説の3忍の1人だぜ？
案外コイツ頭悪いんじゃない？

その後、リーはテンテンとネジに連れられて去り、シカマルとチョウジが寝ているナルトを無理矢理起こした後にサクラの髪を整えた
いの達も去った。

「あれ？そういえばカズトはどこだつてばよ？」
ナルトが辺りを見る。

「…あ！そういえばカズトの事忘れてた！！」
酷い事を言うサクラ。俺ってそんなに空気？

「どうすんだよ？カズトがいねえとこのままじゃ失格だ」
サスケは俺より失格になる方が重要らしい。泣けてくるよ。

「……俺の心配より試験の心配かよ……」
何か久しぶりにしゃべったな。

「！？カズト！！」
いきなり現れたから全員が驚いていた。

「無事だったのね！？」
唯一サクラだけは気にかけてくれていたらしい。

「まあな。あの突風にかなり吹っ飛ばされたんだ。
オマケに戻ろうとしたら敵に遭遇して戦闘になって大変だったよ」
それらしい事を言う。これならこんなにも遅れた理由にもなる。

「…敵に遭ったのか？」
「ああ、何とか倒してこの…天の書を手に入れたけど。俺達のと被るからムダだったな。」

懐から天の書を出して見せる。

「天の書を手に入れたのカズト!!?」

サクラがハイテンションで聞いてくる。いきなり揃ったからな。

「? そうだけど…それがそんなに嬉しいか? 地の書が無いと無意味だぜ?」

俺が不思議そうに聞くと

「それが…」

サクラが話そうとしたら

「待てサクラ! まずは合言葉だ。『忍機』」

面倒くさいが言わないとサスケは信用しそうに無いんで。

「大勢の敵の騒ぎは忍びよし。静かな方に隠れ家もなし。忍には時をしることこそ大事なれ。敵のつかれて油断するとき」

「よし! 本物らしいな」

ようやくサスケが警戒を解く。まだ早くね。これぐらいなら聞いた可能性だつてあるのに。

「んで? 俺がいない間に何があったんだ? 全員傷だらけだし、サクラの髪型が急にショートになってるし。」

俺は知ってるがまるで始めて知ったかのようにサクラ達の話聞く。

ちなみに呪印の事は伏せられた。

サクラが呪印についてしゃべろうとしたらサスケが睨んで来たのでサクラは言わなかった。

「……ふん…。大蛇丸ねえ」

知ってるかのようなニュアンスで言ったので

「カズト、大蛇丸のこと知ってるの?」

「ああ、ていうかお前が知らない事に驚いた。

大蛇丸は伝説の3忍の1人で極めて優秀な忍だったらしいが、あまりに過激な思想と行動に確か里を追放させられた筈だ」

この程度なら知っていても不思議は無い。忍者の家系なら尚更だ。

俺の言葉に全員が成る程。と納得している。

「……伝説の3忍……。だからあんなに強かったのね……」

サクラが何か言ってるが、普通の上忍でもお前らからして見れば圧倒的だぜ？

「……それと気になるんだけどさ……お前ら大蛇丸に何かされなかつたか？」

俺の言葉にサクラとサスケが反応する。ナルトは「何か？」と疑問を出している。

「聞いた話だとただ単に俺達の天の書を焼いただけで去っていったらしいけど、

わざわざ大蛇丸が試験の巻物を焼いただけで満足するとは思えない。何かお前らに残していったんじゃないか？ 呪いとか？」

呪い発言に更にサクラは反応する。言おうか迷ってるらしいがサスケは頷かない。

「……いや、何も無かったぜ？ なあナルト？」

「おう！あんまり覚えてねエけど何かされた覚えは無いつてばよ！サスケは惚けて、ナルトは自信満々に言う。ナルトは本当に分からないからな。

いや、ナルトも九尾の封印術式を弄られたからやられたっちゃやられたな。

「……そっか……
なら良いや。

じゃあ、さつさと塔を目指そうぜ？ 巻物は揃ったんだ。この森での野宿はご免だ」

まあ、これで良いだろう。あえて指摘するのは変だし。別に俺が知ってるのを知られて良い事は無い。

その後、進もうとしたが、サクラやサスケの体力やチャクラがヤ

バかったので仕方なく野宿。

見張りは俺とナルトがやった。

そして翌朝、ようやく出発。

幸運にも敵や罠に遭遇すること無く進めたため、サクラやサスケと
いうお荷物はいたが何とか夜までには塔に到着。

その後は原作通り巻物を開いてイルカ先生を口寄せしてありがたい
中忍の心得を聞いて終了。

原作と違って3日目に着いたから後2日は休みらしい。塔にある部
屋でそれぞれ休む。

良かったよ宿泊施設があつて。流石にコンクリの床の上で寝るのは
結構キツイ。

痛いし寒い。

21 第三次試験(前書き)

活動報告にも書きましたが、何とか今日中に書き終えました。

やはり2時間半で書き上げたせいか、消去前に比べると薄っぺらい。
無念…。

21 第三次試験

塔の中で2日過ごし、原作と違いゆっくりと休んだ。

『まずは「第2の試験」通過おめでとう!!』

それではこれから火影様より「第3の試験」の説明がある、各自、心して聞くように!!

では火影様、お願いします!!』

何故かマイクを通してアノコは言う。こんな至近距離で必要か？

「うむ、これより始める「第3の説明」

…その説明の前にまず1つだけ…。

はつきりお前たちに告げておきたいことがある!!

…この試験の真の目的についてじゃ。

何故…同盟国同士が試験を合同で行うのか？

「同盟国同士の友好」、「忍のレベルを高め合う」その本当の意味をはき違えてもらっては困る…!

…この試験は言わば…同盟国間の戦争の縮図なのだ」

つまり合同軍事演習の実戦版ということだろ？

演習の割には死者や負傷者がかなり多いが。

「ど…どういうこと？」

テンテンがタメ口で聞く。

何でタメ口？ 礼儀作法を知らないのか？

火影がかつての敵国との戦争を減らすためにこの中忍選抜試験が始まった事、国力の関係や政治について長い講釈を垂れる。

つまり他国に圧力をかけ、それでいて戦力の増強や金のためだろ？
ていうかわざわざこんなにも見せつける必要はあるのか？

戦力をつけたいならその国で極秘につけて、わざわざ他国に見せつける意味が無い。国同士で牽制し合うのだって平和には必要不可欠だ。

オマケにその戦力を蠱毒の壺みたいに殺し合わせ、その中の生き残った蟲を更に殺し合わせる。

そして生き残った蟲達を今度はローマのコロッセオよろしく、奴隷騎士みたいに衆人監視の中、殺し合わせる。

これだと優秀な駒は手に入るだろうが、数を得られないから微妙。どうせだったら下忍みたいな奴隷騎士達じゃなくて、中忍や上忍のような上級騎士達を殺し合わせれば良いのに。それなら観客がかなり喜びそうだ。

まあ、それは無理だろうがな。

上級騎士は数が限られているから貴重だ。

一方、奴隷騎士は腐るほどいるから多少減っても大した問題にはならない。

俺達は体の良い使い捨てでしかない。

しかしその事を納得出来ないのかキバは噛みつく。

「だからってなんで！命懸けで戦う必要があんだよ…！？」

「国の力は里の力…。里の力は忍の力…。

そして忍の本当の力とは……………命懸けの戦いの中でしか生まれてこぬ！！

この試験は自国の忍という力を見てもらう場であり…見せつける場でもある。

本当に命懸けで戦う試験だからこそ意味があり、だからこそ目指すだけの価値がある夢として中忍試験を戦ってきた」

だから何で見せつける？

力をつけたくて合同軍事演習をやるのは分かるが、そこにわざわざ自国の機密とも言える戦力を一般人は勿論、演習に参加してない国にまで見せつける必要がある。

ぶつちやけ、金儲けがしたいだけだろ？

じゃなかったら大名まで呼ぶ意味が無い。

まあ、確かにこの試験は金にはなるわな。

一般人は忍の殺し合いが手軽に見えるし、他国の里は次代の戦力を簡単に見れるからわざわざ足を運ぶ。よく出来たシステムだと思うよ。

でもやり方が微妙。

だったら初めから試験をテレビなどで受験生の勝利や脱落を放映すれば視聴率は期待出来る。

第一次試験の苦悩、第二次試験の殺し合い、第三次試験予選の間引き、本選の見せ物。

更に、誰が優勝するかの賭けでもすればかなりの収益が期待出来るのに。

それでも納得出来ないテンテンが再び質問する。

今回は敬語で。

「では、どうして…。友好なんて言い回しをするんですか!？」

「だから始めに言ったであろう!意味をはき違えてもらっては困ると。」

命を削り、戦うことで力のバランスを保ってきた慣習。ころこそが忍の世界の友好なのじゃ」

つまり頭がイカれてるんだろ。

まあ、年がら年中殺し合いやってれば一般常識なんて通用する筈が無い。

「ネギま」の旧世界と魔法世界みたいに分かりあえないんだ。互いを理解出来ないのだから。

「第3の試験前に諸君にもう一度告ぐ、これはただのテストではない……。」

これは己の夢と里の威信を懸けた、命懸けの戦いなものじゃ

火影の言葉に大多数の下忍は啞然。

下忍はまだ一般人に近い感性だから理解出来ていないらしい。

「納得いつたぜ……」

「何だつていい……。それより早くその命懸けの試験つてヤツの内容を聞かせろ。」

ナルトと我愛羅は言う。

一部例外がいたらしい。コイツら最早人間じゃねえ。

「フム……ではこれより「第3の試験」の説明をしたい所なのじゃが……。」

実はのオ……ゴホン

火影が言いづらそうに言う。何せ人数が多すぎて更に減らす何て悲惨なことをやらせるからな。

その時、一人の上忍が瞬身で出てきてひざまつく。

「……恐れながら火影様……。」

ここからは審判を仰せつかったこの……月光ハヤテから……」

「……任せよう」

「皆さん初めまして、ハヤテです。」

えー、皆さんには「第3の試験」前に……ゴホッ、やってもらいたいことがあるんですね……ゴホッ」

明らかに体調が悪そうに咳をするハヤテ。

そんなにゴホゴホ言つて大丈夫かよ？

敵地でもそんな咳してたら簡単に居場所がバレるぜ。

「えー…。それは本選の出場を懸けた「第3の試験」予選です…」
「？ 予選！！？」

「予選って…：どういうことだよ！！」

「先生…その予選って意味が分からないんですけど…」

「今残ってる受験生でなんで次の試験をやらないんですか？」

「下忍達から文句が出る。」

「えー、今回は…第一、第二試験が甘かったせいか…。
少々人数が残り過ぎてしまいましたね…」

「中忍試験規定にのっとり予選を行い…「第3の試験」進出者を減らす必要があるのです」

「そ…：そんな…」

「先ほどの火影様のお話にもあったように、「第3の試験」には沢山のゲストがいらつしやいますから…。だからとした試合は出来ず、時間も限られてくるんですね…」

「お客は大事だもんねエ？」

「何か戦力増強より金儲けに重点置きすぎじゃね？」

「えー…というわけで…」。

「体調のすぐれない方…。これまでの説明でやめたくなっただ方…。今すぐ申し出て下さい。」

「これからすぐに予選が始まりますので…」

「…！！これからすぐだと…！！！？」

「キバが騒ぐ。」

「お前らは俺達より早く来たんだからその分、休息はしっかり取れる筈だろ？ 何故騒ぐ。」

「沈黙が続いた後に、カブトが手を挙げて」

「あのー…。ボクはやめときます」
リタイア宣言をした。

原作ならナルトやサクラが驚くが、この世界では少し驚く程度。
まあ、マトモに話したのは第一次試験前だけだったからな。

「えー」と…木ノ葉の薬師カブトくんですね…。では下がっていいですよ…。」

カブトはそれを聞いて会場を後にする。

「えー他に辞退者はいませんか？」

あ…ゴホッ、えー言い忘れていましたが、これからは個人戦ですからね…。」

自分自身の判断でご自由にてを上げて下さい」

その言葉に俺も手を上げる。

「では俺も辞退します。」

「えー…同じく木ノ葉の北郷カズトくんですね…。」

では下がっていいですよ…。」

それを聞いて列から離れようとしたら。

「カズト！何でやめちゃうんだってばよ！…！」

小声だが叫ぶようにナルトに聞かれた。

「実はお前らと合流する前に受けた負傷が思ったよりキツくてな。

これから直ぐ始まると言われたら流石に無理だから俺はここでリタイアする。」

お前らは俺の分も頑張ってくれ。」

そう言われたナルトはしょうがない事を悟ったのかシュンとして黙った。

コイツ単純。簡単に騙せたな。

まあ、この会場に着いてから今まで負傷していたような演技を見せていたからな。

他者サイド

「…フム、確かあ奴は北郷の家の長男だったの。」
火影が担当上忍のカカシに聞く。

「えエ、まあ、優秀な奴なんですけど…いかんせん積極性に欠けて
いますて。」

カカシが少し困ったように言う。

「確かに…薬師カブトと違い、本当に負傷しているようには見えな
いからのウ」

北郷の偽装は火影や上忍にはバレていたのだった。

北郷サイド

会場から出ようとしたら扉の影からカカシが出てきた。

さっきまで火影の所にいたのに…。

流石上忍ってか？ 気配がまるで分からなかった。

「どこにいくの？ カズト」

「どこって、帰るんですよ。」

ここにいっても仕方ないですから。」

一応、怪我をしてるが隠しているという演技は継続中。バレてそう
だけど。

「だったら3人や他の奴等の戦いを見ていけよ。」

「…いやー、実は怪我をしましてね、これから病院に行こうと
思ってたんですよ。」

こりゃ完全にバレてるな。現にカカシの目は小揺るぎもしない。

「だったらここで診て貰えば良いよ。ここなら最高レベルの医療を
タダで受けれるし。」

「……」

「…ていうかそれって演技だろ？ 下忍には通用するだろうけど、上忍には厳しいよ？」

「…やっぱしバレてましたか…。結構自信あつたんですけどね。」

マジでシヨック。かなり真剣に演技してたからな。

「まあ、お前とはそこそこの付き合いがあつたから確信を持てた。もしも初対面なら確信は持てなかつただらう。」

カカシからテストの結果を受けた気分だ。

評価は… B - かな？

仕方なくカカシに従い観覧席に移動する。

「それで？ 本当の理由は何なの？」

「そんな大それた理由は無いですよ。」

始めに宣言した通り、個人戦になったから棄権しただけですよ。」

「確かにその通りだけどこうも言ったよね？」

『もしヤバい状態なら迷わず棄権しますから』って。

見た限り特にマズイ怪我もしてないし、お前の実力なら十分勝機はあると思っけど？」

そこを突くか。オマケに一言一句違わず言いやがって。

「…確かに特にこれといった怪我もしてませんし、自惚れになりませんが自分の実力なら普通の奴と戦えば勝てると思ってます。」

しかし今回の試験には脅威になる奴等がいますから。」

「…脅威？」

「ええ、先ずは日向ネジ。」

日向一族始まって以来の天才と名高いですし、日向流体術の柔拳は十分脅威に値します。

…そして何より、棄権するのに決め手になったのは、あの砂隠れの我愛羅。

アイツは何がヤバイのか分からないがとにかくヤバイ。

俺の本能とも言つべき部分が『アイツと戦つな、今すぐ逃げる』と
ピンピン伝えて来ます。

だから急いで逃げました。」

そう伝えるとカカシも理解したのか「…そうか」と言つて黙つた。

流石のカカシも人柱力には敵わないからな。

下忍に相手しろ何て言えないからこれで理解しただらう。

もしも聞かれた場合に備えた甲斐があつたな。

こういう時に化け物は利用出来る。

22 気分はローマ市民

カカシに無理矢理試合を観戦させられる結果になったので仕方なく会場の2階部分に移動した。

カカシはサスケに呪印が暴走したら試合中止にすると脅し、今は何故か俺の横にいる。

ていうか何故かサクラやナルトも近くにいます。何で俺の近くにいますの？

もしかして俺がいるから何となくとか？

まあどうでも良いか。

今は第1試合のサスケ対ヨロイの試合だ。

サスケは呪印のせいでチャクラがロクに使えないし激痛に悩まされるという大ハンデを背負ってる。

一方、ヨロイの能力は相手を触る事で精神と身体エネルギー、つまりチャクラを吸いとる。

ヨロイの能力は良いけど俺には使い勝手が悪い。

何せ吸いとるには手のひらを相手に当てないといけない超接近技。

その割りに大した量は吸えなさそうだから中途半端。

いかにもちよつとした敵キャラだな。悲惨だ。

試合が始まり、ヨロイは印を組んでチャクラ吸引の術を右手に展開し、手裏剣を投げる。

一方サスケも手裏剣を投げるが呪印の激痛のせいとかける。

そのおかげで敵の手裏剣を避けたという幸運があったが、立ち上がるのがもたついたためにヨロイから追撃を受けるが何とかかわし、ヨロイの右手に腕ひしぎ十字固めを決めるが、チャクラを吸われて腕を固定出来なくなり、簡単に脱出された。

その後もチャクラを吸われてもうダメかと思ったが、ナルトのデ

カイ声援を受けてナルトの方を振り返るとたまたまナルトの隣にリーがいるのを見つけて何かを思いつく。そしてヨロイが止めを刺そうと思いい、近付くと、突然蓮華をするりのように敵を蹴り上げた。そして影舞葉をしてヨロイの背後に移動して攻撃しようとチャクラ練つてしまい、呪印が開きかける。しかしすぐに持ち直して呪印を抑えて落下しながらヨロイに攻撃を加え、最後には獅子連弾とか言う微妙なネーミングのカカト落としをかましてノックアウトする。

何ともまあ、ご都合主義で。

ていうか門を開かれる訳でも無い癖によくあんな動きが出来るな。ム力つく程の才能ってか？

その後はカカシがサスケを連れて行った。無意味な封印をしに行くんだろう。

自分の意思が無いと封じれない封印なんて無意味だ。人間の意思なんて簡単に覆るんだからな。

その後の第2試合はザク対シノ。

ザクは両腕を吊ってるが何とか使えるらしい両腕で戦うが、シノによつて両手の平の噴出口を蟲に塞がれたおかげで今度は片腕が吹っ飛んだ。

かろうじて右手はまだくつついてるがもうダメだろう。完璧に障害者の仲間入りだ。

にしても何か気分は古代ローマのコロッセオで奴隷戦士達の殺し合いを見てる気分だ。

自分には何ら影響が無いから気軽に見れる。

微妙に甘いけど格闘技観戦よりかはエキサイティングだろう。

サスケの封印が終わったのかカカシも帰ってきた。

「よっ！」

何て気軽だけど大蛇丸に遭遇したばかりなのにその態度は凄いな。まあ、サクラを心配させないためだろうが。

次の試合はツルギ対カンクロウ。

「オレはヨロイと違ってガキでも油断は一切しないぜ。

始めに言っておく。オレが技をかけたら最後：必ずギブアップしろ。速攻でケリをつける」

ツルギが宣言する。やっと忍者らしい奴が現れたな。

まあ、宣言するのは甘いかな。何も言わずに殺れば良いのに。別に殺しても問題無いし。

ツルギは宣言通り速攻をかけてカンクロウの体をご自慢の軟体で締め付け、首をへし折ったが、それは傀儡人形で逆に締め付けられて骨を砕かれて終わった。

でも首とか致命傷になる事はしなかったから別に問題無いだろう。

アイツも何だかんだ言って殺さないよな。

ナルトが2対1で卑怯だとわめいているがカカシとサクラによって言い負かされる。

そして次はサクラ対いのだけと別にこれと言った事は無い。

ダラダラと長く続いて最後はクロスカウンターでダブルノックアウト。お前らは明日のジョーかよ。

第5回戦はテンテン対テマリ。

テンテンがとんでもない量の武器を使って攻撃するが全部風に吹っ飛ばされて終わった。

ある意味一番扱いヒデエな。

第6回戦はシカマル対キンだが、シカマルが軽く影真似の術をか

けて勝利、結局キンって大した能力無かったよな。

他の二人はそこそこの能力あったのに。

そしてお次はいよいよナルト対キバ。

会場的には大したこと無い試合だが、NARUTO的にはデカイ試合だ。

キバは落ちこぼれ時代のナルトしか知らないから楽勝だと思って侮っているが、アイツはAランク任務も経験してんだから簡単には負けない。

現にキバがぶっ飛ばして終わりかと思っただが、あっさり立ち上がる。しぶとさはゴキブリ並みだからな。

今度はキバは煙幕を張って攻撃を仕掛けるが、逆に隙をつかれて赤丸に変化したナルトに噛みつかれるし、赤丸は捕らえられる。

そのスキに赤丸を殺せば良いのに。

今の赤丸なら簡単に殺れる。赤丸を殺されて動揺したキバを後ろから影分身で攻撃すれば終了だ。

でもやらないだろうな。卑怯だの何だの言っただ。忍者の癖に。

ナルトの意外な強さにようやく本気になったキバが赤丸に兵糧丸を食わせ、そして自分も食いチャクラを倍増させる。

そしてどうやってかは分からないが赤丸がキバに化ける。この世界の動物は何でこんなにも賢いんだろう？

そして二人？がかりでナルトをリンチして最後に牙通牙だっけ？回転しながらナルトを切り刻む。

そして何故かキバは立ち上がるうとするナルトに挑発する。

そのまま追撃して終わらせれば良いのに。何でわざわざ立ち上がるのを待つ？

そのおかげで何かサクラの「立てーナルトー！！」という声を聞いて立ち上がり、何か格好良いセリフを言うという勝利フラグが立った。

ああなるとナルトの勝ちは確定した。

予想通りナルトはキバに勝利、途中ナルトが術を気張りすぎたせいか屁をこき、その屁を擬獣化して嗅覚が犬並みになったキバの顔の前だったためにキバが悶絶するというギャグ状態になったが最後は影分身を使ってサスケのリーを真似した技を真似て終わらせた。いかにも主人公らしい勝ち方だな。

そして次はまるで仕組まれたかのような対戦。

ヒナタ対ネジ。どっちもウザイ奴だ。

片やもじもじして何が言いたいのかわからない面倒な奴と、片や何でもかんでも運命運命ウザイ思春期によくありがちな何でも自分は知ってます的な奴。

そして試合結果はヒナタがフルボッコにされて終了。ネジも立場上、ヒナタを殺せないから手加減してやった。

まあ、最後はキレて殺そうとしたが上忍達に止められて終了。そして最後に明らかに負けフラグになる言葉をナルトにかける。

所詮ネジもガキだよな。ナルト何か無視すれば良いのに。

そして次はこの予選のメイン。

我愛羅対リー。

ある意味今までの前座でしか無い。

試合開始直後、リーは何故か大声で「木ノ葉旋風!!!」と技名を言いながら攻撃するが我愛羅の砂の自動防御によって軽く塞がれる。あの自動防御良いよな。我愛羅の意思とは無関係に防御してくれるんだからな。

でも重りを外したリーの速さに着いて行けてないのを見ると微妙なんだよな。上忍レベルなら確実に攻撃食らうし。それを思うとあん

ま使えないよな。

リーの攻撃は全て砂に防がれてもうダメか。という空気になった所でガイが叫ぶ。

「リー！外せー！！！」

「でもガイ先生！……それは………大切な人を複数名守る場合の時じゃなければダメだって……！」

「構わーん！！オレが許す！！！」

サムズアップしながらガイは言う。それを見たリーは笑い、足のサポーターを外す。

サポーターの下には根性と書かれている重りが付いたベルトが巻かれていた。

「よーしー！！これでもつと楽に動けるぞー！！！」

リーの言葉に大多数の奴等は下らなそうに見ていた。まあ、普通少し重りを外した程度じゃほとんど変わらないからな。普通ならな。

リーが捨てた重りが会場の頑丈な床に着地するとドゴツ！！ドゴツ！！というまるで何トンもの重さの何かを落としたかのような音を立てて床を貫通した。

それを見てほとんどの下忍は啞然。何せあんなクソ重いのを付けた状態であんなに早く動いていたんだからな。

「行けー！！！！リー！！！」

「オツス！！！」

ガイの命令の直後にリーは返事をした後に消えた。まあ下忍には消えたように見えただろう。

俺や上忍連中には普通に見える。でも速さは完璧中忍レベル。

リーの攻撃は前半こそ砂に防がれたが、段々砂の防御を超えるようになり、遂には我愛羅の顔に回転しながらのカカト落としを食らわした。

しかしカカト落としをモロに受けて頬が思いっきり切れたというの

に我愛羅は一滴も血を流さない。

しかしリーはそれに気付かず、更に速い動きで我愛羅を攪乱して攻撃を加える。その速さに砂の防御は全く追いついて行けてない。しかし我愛羅は全く慌てない。

何故ならばリーに思いつきり攻撃を受けた顔面が崩れた。

いや、顔面ではなく、今までは肌と同じ色をしていたから気付かなかった砂の鎧が崩れたのだ。

その砂の鎧の下の皮膚は全くの無傷。

そしてその崩れた鎧もまた構築されて我愛羅を覆う。

でもあの砂の鎧って砂の楯と違ってかなりチャクラ食うし、防御力も劣り、重さのせいで動きが鈍るからほとんど使えない。まあ、緊急防御用だからあんなもんか。

「それだけか……」

我愛羅が失望したかのような声を出す。

その声に反応したリーはガイを見る。指示を仰ぐように。そしてガイは笑顔で頷く。

それを見たりーも笑顔になり包帯を少し外して蓮華の体制を取る。

そしてリーは我愛羅の周りを高速で走り、我愛羅の「さつさと来い」という言葉に答えて思いつきり下から蹴り上げた。

そして更に蹴り上げて我愛羅が天井に届くんじやないかと言わんばかりに蹴り上げる。

しかしその途中にリーは蓮華の反動のせいか痛みに顔をしかめて目を閉じた。その瞬間を狙って我愛羅は砂の分身を変わり身の術で入れ換えて避けた。

それに気付いて無いリーは目を開け、包帯で砂の分身を巻き付けて動けなくし、回転を加えて頭から地面に落とした。

もしもあれが本体だったなら死んでた可能性すらあったが、その地面にめり込んだ我愛羅は崩れ落ちて砂になった。

そして砂に隠れていた我愛羅が姿を現し、砂でリーを攻撃する。

リーは避けようとするが体内門を開いた反動のせいで避けられない。

我愛羅は遊びたいのか手加減をしているからリーは何とかまだ生きています。

バカめ。

言っちゃ悪いがお前あんま強く無いぞ？

今の戦闘を見る限り、上忍クラスなら我愛羅を殺すのはそんなに難しく無い。

2、3人で高速で攻撃を加えれば簡単に首を落とせる。そうすれば中の尾獣も死ぬだろうから問題無い。

何で砂はアイツを殺さない？

風影の息子だから？ いざというときの兵器になるから？ でも兵器としてはあまりに不安定で使い勝手が悪そうだが？

リーが覚悟を決めたのか両手を交差して構える。

カカシやガイ、サクラが裏蓮華について言い合ってるが無視だ。

ていうか何故か俺には一切話しかけて来ない。俺ってそこまで空気か？

そして遂にリーが第三の生門を開いた事によりリーの体は赤く染まった。更にリーのチャクラが急激に何倍にも膨れ上がった。

更に第四の傷門をこじ開けてチャクラが上がったが代わりに血管が切れたのか鼻血を流す。

そして次の瞬間、一気にリーは駆けて加速して我愛羅を蹴り上げる。その速さは間違いないなく上忍クラス。あまりの速さに俺も見えなくなつた。

我愛羅は蹴り上げられ、砂が我愛羅を守ろうと浮き上がるが全く追いつけ無い。

そして砂が追いつく前に、見えないがリーによって様々な攻撃を加えられてまだ空中をさまよう。

あの速さは十分脅威に値する。

でも何で素手で攻撃するんだらう？

あの速さの状態でクナイを持って攻撃すれば我愛羅の砂の鎧なんか簡単に貫ける。

そしてリーは最後の攻撃として第五の杜門も解放して更にスピードを上げる。

我愛羅を再び包帯で拘束して自分の元に引き寄せて全力で我愛羅な腹に掌底をかまして地面に叩きつけた。

首を狙えば良かったのに。そうすれば幾ら砂の鎧でも防げずに氣道を破壊して終わった筈だ。

我愛羅は背負っていた瓢箪を砂に変えて衝撃を防ぎ、裏蓮華のせいでロクに動けないリーの左手足を砂で覆い、思いつきり圧迫して破壊した。

「ぐわああああ！！！」

リーの悲鳴がこだました。

そして我愛羅は止めとしてリーの頭を潰そうとしたが、その前にガイによって砂を散らされた。

ガイが片手で砂を防いだ事を見るとやっぱりあの砂はそんなに脅威では無い。周囲が砂漠とかわたら勝てないだらうが、こつこつコンクリの所なら十分勝てる。

まあ、別に殺らないけど。他のオリ主やこの世界の忍者（笑）と違って目立たない事にしてるからな。

リーは気絶しながらも立ち上がり、まだ戦おうとする物凄い事を見せてくれたが、左手足が潰されて最早忍として生きていけないと宣言された。

それが一番良いと思うが？ これからは平穏な日常を送れると思えば悪くない。
でもコイツ復活するんだよなあ。
ご都合主義で。可哀想に。

次の試合はチヨウジ対ドス。

チヨウジが耳栓をして倍化の術をやり、ドスの衝撃波を聞かないように工夫したのは良かったが、人体の約7割は水で出来てるんだから関係無く、直接振動させられて終了。
前の試合に比べて何て小さい。

「えー、では、これにて「第三の試験」予選…全て終わります！」
ハヤテの宣言により、予選は終了した。これで帰れるかと思っただが、まだ誰も帰らないから仕方なく俺も残る事にした。目立ちたく無いからな。

「中忍試験「第三の試験」本戦進出を決めた皆さん…。ゴホッ…一名はここにいませんが…おめでとうございます。」

「えー…では、火影様…どうぞ」「うむ…。」

では、これから…本戦の説明を始める…。
以前も話したように本戦は諸君の戦いを皆の前でさらすことになる。各々は各国の代表戦力として、それぞれの力をいかに発揮し、見せつけて欲しい。

よって本戦は…一ヶ月後に開始される！」

「ここで今からやんじやないの？」

ナルトが聞いた。今からやっても大した面白みが無いぞ？ 何せほとんどの奴等は疲れてチャクラが枯渇気味だ。

これじゃあ単調な殴り合い、蹴り合いで観客が楽しめない。

「これは、相応の準備期間というヤツじゃ……」
「どういう事だ？」

ネジがタメ口訊く。何でお前はそんなに偉そうなんだよ？たかだか下忍で強い方なだけで。

「つまりじゃ………各国の大名や忍頭に予選の終了を告げるとともに本戦への招集をかけるための準備期間……」
そしてこれは……お前たち受験生のための準備期間でもある」

つまりお客様をご招待するためってことね。一応建前として受験生の体力回復や戦略を練る時間を与えるという意味もある。

「だから意味分かんないじゃんよ！どういことだ？」

カンクロウが聞く。お前、他国のトップによくそんな口訊けるな。

「つまり、敵を知り、己を知るための準備。予選で知り得た敵の情報を分析し……勝算をつけるための期間。」

これまでの戦いは実戦さながら……見えない敵と戦う事を想定して行われた」

実際忍の戦いってそうだろ？ 敵の事を知ってる状態何か極々希だ。

「しかし本戦はそうではない……。ライバルたちの目の前で全てを明かしてしまつた者もあるだろう……。相対的な強者と当たり、傷付き過ぎた者もあるじゃろうて。」

公正公平を期すため、一ヶ月は各々、更に精進し励むが良い。もちろん体を休めるも良し！」

「……というわけじゃ……」。

そろそろ解散させてやりたいところじゃが……その前に一つ、「本戦」のためにやつとかなきやならん大切な事がある」

「なんだってばよ！」

「まあ、そう焦らず……。アンの持つとる箱の中に紙がはいつとる

からそれを一人一枚取るのじゃ」

アニコが箱を持って前に出てきた。

「私が回るから順番にね！」

アニコが左端の奴から順番にクジを引かせる。

「よし…全員取ったな…ではその紙の数字を左から順に教えてくれ！」

「8だ」「1だつてばよ」……各々番号を言い。

「では、お前たちに本戦のトーナメントを教えておく!!」

「えー！ー!!?」、「そのためのくじ引きだったのか！」

ナルトとシカマルが叫ぶ。それぐらいしか思い付かねえだろ？

そして組み合わせが発表される。

「では、それぞれ対策を練るなり休むなり、自由にするがよい。

これで解散にするが何か最後に質問はあるか？」

「ちよつといいツスか？」

「うむ！」

シカマルが質問する。

「トーナメントってことは優勝者は一人だけって事でしょう…。つ

ことは中忍になれるのはたった一人だけってことツスか？」

「いや！そうではない。

…この本戦には審査員としてわしを含め、風影や任務を依頼する諸国の大名や忍頭が見ることになっておる。その審査員たちがトーナメントを通してお前たちに絶対評価をつけ…中忍としての資質があると判断された者は、例え一回戦で負けていようと…中忍になることができる」

「ということとは…。ここにいる全員が中忍になれる可能性があるってことか？」

テマリが聞く。どうせお前等は裏切るんだからそんなの無意味だろ？

「うむ。

じゃが逆に……一人も中忍になれん場合もある！トーナメントで

勝ち上がるということは…自分をアピールする回数が増えるということじゃ。

分かったかのオ……シカマルくん！」

一下忍が里のトップである火影が名前を言われる何て光栄だがプレッシャーでもあるな。

現にシカマルは面倒くさそうな顔をしている。

「では、御苦労じゃった！ ひと月後まで解散じゃ！」

その言葉にようやく終了した。

各々で森を越えてようやく懐かしの里に帰ってきた。にしてもまたあの森を渡る事になるとはな。

てつきり試験は終わったから試験官が誘導したりするのかと思っただら自由解散だもんな。おかげでまたあの危険極まりない森を越えるハメになった。

隠匿を使えば何にも問題無いが、念のために使わず普通に越えた。無いとは思うが下忍がちゃんと森を出られるか監視されてたら困るしな。

さて、ようやく面倒なイベントも終了した。後は最終段階だ。

大蛇丸の前では何もおかしなことはせず、目立たずにいたから別に声をかけられる何て死亡フラグも立ってない。

まさにパーフェクト。評価はA、いやSでも良いだろう。

後は一ヶ月、最後まで気を抜かず、怪しまれないようにしなくてはな。

23 揺れぬ生き方(前書き)

今回、北郷は自身の人生訓?みたいなのを語ります。

23 揺れぬ生き方

家に帰り、両親に二次試験で落ちたと説明した。

まあ両親も流石に1度で合格するとは思って無かったのか大して気にしてなく、俺の心配をしていた。

「大丈夫だカズト。中忍試験はとても難しく、誰でも一度は落ちる。始めてで合格するのは稀だから気にするな。」

現に俺なんか2回も落ちて3回目であろうやく合格出来たんだからな。親父が自身の体験談を出して俺を慰める。

「そつよカズト。」

それにアナタはまだ12歳なんだから急ぐ必要は無いわ。

また次の中忍試験を頑張れば良いわ。」

母親も慰める。

この人達は普通に良い親だからな。

今まではロクな親がいなかったからその分ありがたい。

何せネギまの時は両親とも親戚に預けてほったらかしだし、ハンター

ハンターの際は母親は死んでたし、父親は自分を優先して俺を親戚に預けた。

現実の両親は俺がどうしようも無いクズだと早いうちから分かったからか干渉しなくなった。

高校に落ちた時も「ああ、やっぱりか。」としか言われなかった。

まあ、普通なら両親にそんなことを言われれば荒れて家庭内暴力でも起こすんだろうが、俺は気にしなかった。初めから自分がどういふ人間か分かってたし。

それに、何故だか生まれつき孤独が苦では無い。

何故かは分からないが小さい頃から独りが辛くなかった。

別に家族や友達がいなくても外に出れば人がいるし、店員との短いやり取りなどのせいも孤独とは思わなかった。

まあ、そのせいでこんな性格になったがな。
でも俺のこの性格が無かったら今の人生は耐えられないだろう。
何せ周りは全て他人。本当の自分を知ってくれる人間は皆無。
多分普通の人間なら他者との繋がりを求めて原作に介入したり、友
達や恋人を作るんだろうが、俺には必要無い。

何故ならそんなモノを作れば気持ちに揺らぎが生じる。

俺の目標である木の葉を抜けるという決心にも迷いが生じるだろう。
残念ながら迷いながら上手くいくほど人生は甘くない。

だから俺は常に自分を優先して他人を求めない。
だから常に勝つて来た。

どんな世界に行こうが、この考えを貫いて来たから負けた事は無い。
何せ負ければゲームオーバー。死だ。

よく二次小説のオリ主は家族や他人を求めたり、何かしらの繋が
りを重視する。だから常に予想外の事態に直面してピンチに陥る。
しかし俺は自分しか求めないから常に先回り出来る。行動に矛盾が
生じないからだ。

ハッキリ言って自分の命を守り、家族の命を守り、恋人の命を守り、
友達の命を守り、そして尚且つ他人の意思を尊重しながら行動する
など無理だ。

そんなことしたら必ず矛盾や揺らぎが生まれる。

だから俺は自分の命と意思を絶対にして他は切り捨てた。

そして常に臆病になり、異常な程警戒して周りを伺い、必ず勝てる
状況を作ってから勝負した。だから必然的に勝てる。

マンガの主人公みたいに不確定要素を無視するなど愚の骨頂だ。そ
んなのは主人公だけに許された特権。

俺みたいなモブは必死に必死に考えて敵を追い詰め、退路を経ち、

弱点を見定め、孤独にさせて、敵より優位に立ち、そして全力で叩き潰す。

そうしないと主人公は殺れない。

さて、何か俺の人生観についての話になってしまったがそろそろ戻るか。

両親には「ありがとう。次の中忍試験は受かって見せるね」と答えて安心させる。

中忍試験で自信を喪失して忍者を辞める奴がたまにいるからな。

両親もそれを心配してたらしい。

別に良いじゃん。息子が争いと無関係な世界を生きたいと言えばそれを喜べよ。

それとも息子に特攻隊員みたいにいつ出撃命令が出るか分からない生活をして欲しいのか？

とりあえず今は一月後の事を考えよう。

木の葉崩しの時を逃せば無事に抜けられる可能性が格段に下がる。

もしも遅れれば戦力増強のために試験を辞退した俺まで中忍に昇格させられる可能性すらある。カカシは俺の実力は中忍程度はあっていると思ってるだろうから推薦するかも知れない。

やっぱ実力をもっと下げた方が良かったか？

でも下げすぎるとナルトみたいに足手まといになるし、動きにくくなるからある程度の強さは必要なんだよなあ…。

まあ、木の葉崩しの時に逃げれば何ら問題無いから良いか。あの戦いでかなりの忍が死んだから俺が死んでも不思議は無い。

そのためにあの術を完璧に会得しなくては。

何せこれはコピー出来ないから自力で会得するしかない。

超上級忍術だが、これを会得出来ないと言いつても誰にもバレずに里を抜けれる成功確率が低くなる。

逆に成功すれば逃亡成功は間違いない。

だから何としてでも会得しなくては。

この術はもしもの時のために1年くらい前から練習してるが、未だに成功していない。

この1ヶ月が勝負だ。

一度でも成功すれば後はコピー出来るんだからな。

ついでにネジの修行を時々観察していた。

あのメンツの中じゃ唯一使える術を持つてる奴だったからな。

なかなか成功していなかったが、大会前日にようやく成功させた。

あの全方位防御の八卦掌回天だ。

まあ、ただ単に全身の点穴からチャクラを出しただけだがな。

それでもある程度なら防御出来るし、全方位に対して防御出来るから使える。

それに回天で出したチャクラを何重にも張れば理論的にはどんな物理攻撃も防げるようになる。

これで防御面もある程度は大丈夫になった。

さて、明日は本番だ。

もしかして木の葉が終わるかもな…。

24 木の葉崩し

遂に中忍試験本戦の日になった。

本戦の会場は満員状態。下忍など今日ヒマな忍達や高い入場料を払って殺し合いを見に来た奴等で一杯だ。

まあ、そのせいか客層がガラが悪い奴等が多い。まるでフリーガンの集まりみたいだ。

ちなみに俺は公式には来ておらず、隠匿を使って会場にいる。

アカデミー時代の友達に誘われたが行かないと言った。

「落ちた試験に興味無い」といじけているように言ったので相手も分かってくれた。

何せ今日は俺は会場じゃなく、家にいた。と思われた方が後々のために良いからな。

「えー、皆様、このたびは木ノ葉隠れ中忍選抜試験にお集まり頂き、誠に有り難うございます！！

これより予選を通過した8名の『本戦』試合を始めたいと思います！！

どうぞ最後まで御覧下さい！」

火影の開会宣言が終わり、遂に本戦が始まった。

予定では9人だったが、ドスは死んだからな。バカな奴め、我愛羅に真っ向勝負を挑むなんてな。

お行儀良く並んでた8人のうち、6人は控室に行き、会場にはナルトとネジが残った。

お互いに中央に集まり、にらみ合う。そしてナルトがネジに拳を向けて「ぜってー勝つ!!!」と改めて決意表明する。

「では、第一回戦、始め!!!」審判の合図で試合が始まった。

下馬評では完全にネジ有利。オッズで言えばナルトは500倍以上だ。当たれば万馬券確実。

大抵の奴はネジの圧勝を疑って無い。

ちらほら上忍もいるが、みんなネジが勝つと予想している。

確かに普通ならネジが勝つだろうが、このNARUTOの世界ではうずまきナルトは主人公だ。こんな大事な大会、更にはヒナタとの約束まであるんだ。

何があるうと必ずナルトが勝つ。それが主人公なのだ。

ナルトは多重影分身の術をやり、5人に増えた。

確かに影分身なら本体と同じだから白眼でも見分けがつかない。でもナルトとネジでは実力に差がありすぎるからバカ正直に挑んでも無意味。

結果、影分身である4体は簡単に消された。

その後、何故か少しの話し合い。

ネジの何時も通りの運命や分かったような現実論。いい加減聞き飽きた。

そしてナルトが今度は何十体もの影分身を作り、集団で襲いかかる。しかし攻撃は簡単に見極められ、攻撃頻度が最も少ない奴を本体と思い、ネジは攻撃する。

しかしそれも影分身で別の方向にいた本体がネジに攻撃しようとするが、ネジは回天でいなす。

そして更にネジは構え、ナルトに八卦六十四掌をナルトに叩き込み、全身64個の点穴を閉じさせた。

そのままネジが追撃すれば勝負は簡単に着いたのに、何故かまたまたネジはナルトとお喋りしてる。

だから何でいちいちそんな面倒をする？ お前ら友達でも何でも無いだろ？

そして聞いても無いのにネジは自分の過去を話す。

自分に呪印を刻まれ、父を身代わりとして差し出された。

などなど、言っちゃ悪いが「だから？」としか感じない。

別に珍しく無い話じゃん。

分家の者は宗家のために生きる。普通じゃん。

それを自分が世界で一番不幸みたいに言っちゃってさ。マジで中二病かよ。

お前の人生なんてナルトの人生に比べたら天国だぜ？

何せ頼れる者達は一抔いるし、分家と言えど名家だから食うに困ることも無い。

それに何より迫害されない。

もしもナルトがお前のセリフを言うならまだ理解出来るが、才能溢れ、名家に生まれ、愛されて生きてきたお前が言っちゃダメだよ。

その後はナルトが九尾のチャクラを操り地面からのアップパーカッツを食らわせて終了。

やっぱ勝ち方が主人公だよな。

次はサスケ対我愛羅だけど。

肝心のサスケはまだ来ない。忍が大事な用に遅刻とかがあり得ないだろっ？

観客が何時まで経っても試合が始まらないので苛つき、罵声を上げる。カカシが修行つけてるからなあ。

アイツのガキの部分まで受け継いでんのか？

普通なら失格だが、あの天下のうちは様だから試合は最後にして貰った。良かったねえ、うちはに生まれて。

ていうかアイツ、うちはに生まれなかったらタダのモブだっただろ

うな。写輪眼やうちはの才能が無ければタダのイケメンな下忍で終わっていた筈だ。
アイツそれ以外、何にも無いからな。

そして次はカンクロウ対シノの試合にくり上がったが、カンクロウは棄権したのでシカマル対テマリの試合にまたくり上がった。

テマリは仕方なく会場まで降りてきてやる気を見せる。しかしシカマルはそんな気は無いから棄権しようかと思っていたが、いらぬ気が効かせたナルトに押されて会場に落ちてしまった。

シカマルは落ちた体勢のままボーツとしているが、観客はそれを許さず、「コラー、さっさと試合しろ!」、「こんな試合とつとと終らせるー!」などなどヤジを飛ばす。そんなにサスケの試合が見たいかよ。
アイツそんなに強く無いぞ?

未だに立ち上がらないシカマルにテマリは試合開始の前に勝負を仕掛ける。

しかしシカマルはそれを軽く避ける。流石に攻撃を受ける気は無いらしい。

テマリが扇を広げて風を起こすが、シカマルは既にいなく、会場の僅かな木々に隠れた。

しばらくテマリはシカマルを見ていたいたが、シカマルはただボーツと空を眺めていた。

それがムカついたのでかテマリは扇を思いっきり振り、カマイタチを起こす。カマイタチのせいで砂ぼこりが起きたが、それが引いてくるといきなり影が伸びて来てテマリを追うが、途中で限界が来て縮んでいく。

テマリは影真似の術の射程距離を見破ったと余裕になるが、シカマルは何故か対戦中にも関わらず何か手を組み、考え出す。

対戦中に長考なんて余裕だな。実戦であんなことやったら真つ先に死ぬ。明らかに実戦経験が無いと分からせられる。テマリもあんなの待たずに攻撃すれば良いのに。完全にスキだらけなんだから。

シカマルが長考を止めて構えを取ったのを見てテマリはまたカマイタチの術を食らわせるがシカマルは木に隠れる。

しばらく膠着状態が続いた後、会場の影が大きくなった事を分かったシカマルはテマリにまたしても影真似を仕掛ける。

テマリは前届かなかった場所にいますから避けようとしなかったが、咄嗟に思い付いて急いで下がった。それが効をそしたのかギリギリで避けられた。

テマリは今度こそ大丈夫と思っていたらカンクロウの「テマリ！上だ！！」の声に上を見るとそこには上着とクナイでパラシュートみたいにした物があった。

それによって新たな影が生まれてシカマルは更に影を伸ばす。しかしそれも限界が来て影は縮む。

今度こそ終わりかと思ったテマリは扇で自分を隠し、分身の術をしようとしたら体が動かなくなった。

何故かと見るとさっきナルトが開けた穴から影が伸びてテマリを掴んでいた。

シカマルはテマリに近づく。そうすれば影を縛られてるテマリもシカマルに近づく。そしてシカマルが手を上げた。もちろんテマリも手を上げる。

さあ、これで終わりかと思いきや、シカマルが「まいった…ギブアップ！」と宣言。

最早チャクラが無いからもう良い。と言ってギブアップ。そのせいでテマリは勝利になった。

あれってかなりの屈辱だよな。テマリも勝った気がしないからシカマルを睨み付けた後にカンクロウ達の下に戻っていった。

いよいよ先送りにされていたサスケ対我愛羅の試合順になったが、未だに来ていない。

「次の試合はどうしたー！うちははまだかー！」

観客がまた騒ぎ出した。いい加減アイツ失格にしるよ。

そう思っていたら木の葉を纏った竜巻が現れて、竜巻が止むとサスケとカカシが背中合わせで立っていた。

格好つけてるつもりか？遅刻野郎の分際で。

カカシは一応形だけ「いやー、遅れてすみません…」と謝っているがサスケは無言。

審判から「名は？」と聞かれると「うちは…サスケ」と答える。あの態度を見ると殺したくなるのは俺だけだろうか？

ナルトと軽い会話をした後、試合を先送りにされたと伝えられ、ナルトとシカマルは控室に戻り、我愛羅がわざわざ階段を使って降りていった。別に飛び降りるなりすれば良いのに。その方が早いし。

常人なら控室から飛び降りれば足が折れるだろうが忍なら何ら問題無い。

我愛羅も降りてきていよいよ試合が始まった。

試合開始直後、我愛羅が瓢箪から砂を出し、サスケがそれを警戒して下がる。

しかし我愛羅は攻撃せず、頭痛がするのか頭を抱え、何かブツブツ独り言を言う。

そして再び頭痛に襲われたのか頭を抱え、少しすると落ち着いた。

サスケが手裏剣を投げると我愛羅はそれを砂の楯で防ぎ、その砂を砂分身にしたて攻撃を加えるがサスケはそれをジャンプして避ける。そしてしばらく砂分身との攻防を続け、遂には我愛羅の顔に拳を叩

き込む。その姿やスピードはリーと同じだった。

何故パンチ？ クナイを握りながら攻撃すればもしかしたら殺れたかも知れないのに。

しかしサスケはわざわざ我愛羅が立ち上がるのを待ち、来いと挑発する。

我愛羅が黙っていると自分から攻撃を開始して、さっきより速いスピードで攻撃する。

我愛羅も何とか砂で防御や攻撃しようとするが軽く避けられて逆に攻撃を食らう。

少しにらみ合い、我愛羅はこのままでは敵わないと見たのか大量の砂で自分を覆い始めた。

サスケは砂が完全に覆う前に攻撃しようとする前に出て殴りにかかるが、僅に遅く、今では球体になった砂の塊を殴るとカウンターとして砂が尖り、サスケを襲う。サスケはその針みたいな砂を紙一重で避け、球体から離れた。

サスケがその砂の固さに驚いていると球体の横の空中に砂で出来た目が飛んでいた。

サスケは何かは分からないがとりあえず球体に攻撃をかけるがビクともしない。

サスケは会場の壁まで下がり、更には壁にチャクラで吸着して登った。

そして壁の中腹くらいで片膝を着き、印を結び、両手を下に向けて左手で右手を掴み、何かを溜めるような体制を取る。

少しするとバチ、バチイ！というデカイ音が鳴り出した。

そしてサスケが構えていた右手には見えるほどのチャクラが集中していた。チャクラを雷属性に変えたんだ。

膨れ上がったチャクラを溜め終えたサスケはチャクラで肉体活性

をやり、更にスピードを高めて我愛羅の下に走る。

何故か千鳥で地面をえぐりながら進み、我愛羅が引きこもってる砂の球体に千鳥を食らわせた。

そのとんでもない威力のおかげか右手は球体を突き破り、中の我愛羅に攻撃を加えた。

その瞬間「うわああ！血があ…オレの血があ…！」という我愛羅の悲鳴が聞こえた。たかだか血ぐらいで騒ぐなよ。

サスケは腕を引き抜こうとするが抜けず、またチャクラを集中させて千鳥を我愛羅に食らわす。

「ぎゃあああ…！」

我愛羅が叫び、サスケが全力で球体から右腕を引き抜くと、サスケの右腕に何か見たことの無い生き物の腕が引っ付いていた。実際に見るとスゲエデカイ腕だな。血管浮いてマジキモイ。

何か化け物にあつた時のような嫌いな感じがしたかと思つたら球体が崩れて中から我愛羅が出てきた。

肩の傷を押さえて何かに耐えている？

そう思つていたら突然周りが鳥の羽だらけになった。

これが何か知つてる俺はいち早く「解」と幻術返しをして幻術を破つた。

しかし周りの観客達は分からないのか次々寝ていく。中には下忍や中忍もいたが軒並み幻術にかかつて寝ている。油断し過ぎ。

そして間もなく、火影と風影がいる観覧席が煙に包まれると一斉に砂忍や音忍と木の葉の暗部が戦闘を始めた。

遠くからは何か破壊するデカイ音が聞こえることから大蛇丸の口寄せの大蛇が暴れてるんだろう。

風影が火影を拉致つて天井に行き、音忍の四人衆が結界を築いた。

ほとんどの木の葉の暗部は結界に達する前に止まったが、1人が間に合わず結界に触れてしまい、瞬く間に全身が燃えてしまった。

一応あの四紫炎陣という結界忍術もコピーした。そこそこ使えそうだからな。

会場は一気に混乱状態になり、そこかしこで戦闘が始まった。

試合会場では我愛羅がうずくまったままで、カンクロウやテマリ、砂の担当上忍が我愛羅の側に寄る。

今がチャンスと思い、俺はナルトに近づき、まだ眠っているナルトの上着をめくり腹を出す。

チャクラを込めていないから腹には何も無いが、別に浮き上がらせる必要は無いからこの時のために用意していた術を右手に展開してその右手をナルトの腹に当て九尾を封印している四象封印を解くために「四象解印!!!」とまず1つ目を解いた。

ちなみに四象封印は二つあり、二重の封印式が書いてある。

解いた瞬間、膨大なチャクラが漏れてきた。

それに気付き、カカシが近くに来たが、俺の姿を認識出来ないので何故突然封印が破られようとしているのかが分からない。

そんなカカシを尻目に俺はもう一つの封印も解いた。

解いた瞬間、ヤバイと分かっているので瞬身を使い全力で会場から逃げた。

最後に見た光景はナルトの腹を裂いて何かとんでもなくデカく長い爪が出ようとしていた。

会場から何かとんでもないデカイ叫び声のような、威嚇音のようなものが聞こえた事から成功したらしい。

何かデカイ音が止まないことから多分守鶴と九尾が戦ってるんだろ
う。

守鶴と九尾では勝負にならないから直ぐに決着が着く筈だ。

急いで家に戻ると家の中には3つの死体が転がっていた。

親父、お袋、知らないガキの3人だ。3人とも俺が朝の内に殺して家に運んだ。

里を抜ける時、俺は死んだ事にしておきたいから唯一の血縁関係である父と母を殺した。隠匿と影分身を併用して同時に殺したから何も分からずに逝っただろう。

ガキは俺と年格好が似てたから適当に殺して連れてきた。どうせコイツの親は息子は中忍試験を見に行っただと思ってるだろうから探してもいない筈だ。

このガキの死体を俺の死体に偽装するために元々着てた服を剥いで代わりに俺の服を着せた。

そして俺の額当てを着けさせ、更にコピーした俺の血を致死量分、ガキの死体の周りにまいた。

これで偽装は完璧だ。後はコイツの顔を誰だか分からなくすれば良い。

外からデカイ破壊音や戦ってる音が聞こえて来たからそろそろ最後の仕上げをするか。

外に出て火遁の術で家は勿論、周りの家も焼いて敵や九尾の仕業に見せかける。

火遁の猛烈な火力に木造建築の家は瞬く間に燃え広がっていった。既に家は丸焼けで例え生きてる人間がいても焼け死んでるだろう。

それを確認した俺は急いで里を出た。

そして大分遠くの山から木の葉の里を見ると、そこは地獄になっていた。

会場の方には守鶴と思しき肉の塊が横たわっていた。やっば守鶴は死んだか。まあ、格が違うからな。

その守鶴を殺した九尾は現在里を燃やしている。都合良く、燃やしている辺りは家があった辺りだからこれで証拠隠滅は確実だ。

その九尾に様々な忍者が里の防衛のために攻撃を加えているが全く効いてない。それどころか、攻撃を加えた忍者は焼かれたり踏み潰されたりして大多数は死んでた。

流石、伝説の妖獣。桁外れな強さだ。

さあて、どうする木の葉？

頼りの九尾を封印した4代目はもういないし、伝説の三忍も今では自雷也しかない。

結構な数の下忍、中忍は会場で幻術食らって寝てたから今戦えるのは幻術を解除した上忍と国境警備に行つてた奴等ぐらい。

暗部や根の連中も戦力にはなるだろうが素直に戦力になってくれるだろうかねえ？ それに、例え味方になってくれても九尾に勝てるとは思えない。

大蛇丸対火影の戦いがどうなったかは知らないが、お互い無事ではいられないだろう。

さて、これで終了だ。

後は九尾が破壊し尽くしてくれるだろう。これ以上見てもしょうがないし。

さっさと火の国を出よう。

これで木の葉は終りだ。

これから火の国に進出する戦争が始まるだろうな。

巻き込まれない内に遠くの国に逃げよう。

とりあえずは岩の国にでも逃げるか。火の国が潰れば岩の国が最大規模だ。

そこなら比較的マシだろう。

25 激動の時代（終）

木の葉崩し、ていうか木の葉の悲劇が起きて1年。

九尾の襲撃を受けた木の葉の里は壊滅的な打撃を受けた。

3代目火影は九尾に殺され、大蛇丸は九尾が出てきたら直ぐに火影を捨てて、配下共々音の里に逃げたらしい。

流石に大蛇丸も九尾に勝負を仕掛けるといふバカな真似はしなかったらしい。それに、このまま九尾が暴れば木の葉は滅ぶと分かるから何もせずに帰ったようだ。

自雷也や木の葉の忍は懸命に里防衛のために奮戦したらしいがやはり敵わず、自雷也は勿論、大多数の忍や住民は死んだ。

その後、粗方木の葉の里を破壊しつくした九尾は消えたらしい。

どっかに行ったのか？ と思ったがその後は目撃されて無いし、各里も探したらしいが見つからなかった。

多分、九尾は死んだんだろう。

何せ封印を破る時にチャクラを注ぎまくって力任せに無理矢理破ったからな。

もしかして力を使い果たして死んだか？

だとしたらこれで一件落着だろう。

何せ暁の計画には尾獣が全部必要だったし。

サスケやナルトも恐らく死んだだろうから原作は完璧に破壊された。大蛇丸が5体満足で音の里も戦力を未だ有しているのが微妙だけど、まあ、関わらなければ問題ない。

今は激動の時代に移り変わった。
最大勢力を誇った木の葉がほぼ壊滅した事により火の国の戦力は大
激減。

岩の国、砂の国、雲の国、霧の国。

つまり忍び大国はこれを好機と見て一齐に火の国に侵攻を始めた。
これに追従して小国の草の国や滝の国なども参戦しておこぼれに与
ろうとしている。

一方、木の葉もただやられている訳では無い。

「根」の者達が政権を獲得し、暗部や残った中忍や下忍を戦線に投
入して必死に防衛している。

この緊急事態に、今までは不干渉だった日向家など名家も戦争に参
加させられ、予想外にも木の葉は大健闘していた。

もしかしたら多少は領土を失うかも知れないが、木の葉は残るかも
知れない。スゲエな。

周りの国ほぼ全てが敵に回ったというのにまだ国を守れている。
むしろこの事態のせいで里は一致団結したのか？

ちなみに俺は現在、火の国から最も遠い岩の国にいる。

岩の国は火の国と戦争やってるんだから国内は混乱してないかと思
っていたが、そんなことは無かった。

まあ、戦うのは岩隠れの里だからな。

岩の国自体は別に戦ってないから里で無ければ何も変わらない。

それに岩隠れの里はかなり強い里だから他国からの侵攻はほとんど
無い。

そう言えば最近、砂の国もヤバイらしいな。

何せ風影は大蛇丸に殺されてし、肝心の戦力の我愛羅も死んだから戦力がガタガタ。

木の葉に集中していた各国の視線も落ち着いて来て、今では砂の国を狙っている国も多い。

俺もこの激動の時代に乗ってどこかに国を建国しようかとも思ったが、わざわざ面倒くさい人生を歩むのも俺らしく無いと思ったので止めた。

このまま北進してまだ知られてない国にでも行くこうと思ってる。この地域ではあんまり生きやすい所は無いし、永住したい国も無い。だから新天地を目指してしばらくは旅人になるつもりだ。

まあ、もしかしたら別の大陸やこの地域から遠い所に国を作って、忍に頼らない近代的な軍でも創設したらこの地域に侵略するかもな。このまま忍に頼り続けたら文明が停滞しそうだし、その時は忍を滅ぼすのも良いかな？

とりあえず、今は永住できる土地を探さなくてはな。

それからの事はその時考えれば良い。

これからは何のしがらみも気にする事は無い。

追い忍に追われる事も無い、自由を勝ち取ったんだからな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2097u/>

リアル忍者 北郷

2011年7月13日20時03分発行